

と佛の知見を開くことで、これは穢れたものを捨てずに、其の汚物に價値を發見する、それが開顯の義であります。提婆達多は恐るべき獄を寂光淨土と開顯した、穢れ多くして成佛の器にあらずと罵られた女人の爲に、八才の龍女は衆人の眼前に即身成佛して女人成佛の路を開いたのであります。末法今日に於て下種の御教を信受するお互は何物を開顯すべきでありませうか。先づ第一に、念佛の法然・親鸞等によりて廣く深く宣傳されてある邪義、此身は不淨なれば捨て、仕舞へ、この娑婆は衆苦充滿の穢土なる故に早く去れよと教へた捨身成佛、捨土往生の義に對して、凡夫即身成佛、娑婆即寂光と開かねばなりません。これぞ大聖釋迦世尊の大悟の極地、法華經の眞實義、日蓮大士絶叫の下種益の法門であります。開導上人云く、

此ノ觀心ハ末法相應ノ我等己心ノ本尊也。此御題目ハ我等胸内寶藏ニテアルヲ、今度指サシ教ヘサセ給ヒタル也。コレヲ下種ト云フ也。(十卷抄)

これは「御本尊ニ向ヒ奉リ南無妙法蓮華經ヲ祈ル時」云云の下の御注釋であります。口に任せて唱ふるが本門の觀心であります。この口唱が即ち下種の義を成するのであります。

九、弘通の大目的

上來種々の方面から述べましたことによりて下種といふことは大體おわか

り下さつたことと思ひますが、猶ほ下種の義を深く心底に染めて戴く爲に更に更に角度を換へて、くり返して見ます。開導上人の御指南、開導要決に云く、

常不輕品御義口傳ニ云ク、佛性トハ法性ナリ、法性トハ妙法蓮華經ナリト云云。此法性ヲ南無妙法蓮華經ト拜シ奉ル信行が釋尊ノ本行菩薩道ノ御修行ナリ。此ノ佛性ヲ拜ム事ヲ上行ニ付シテ上行日蓮大士、一切衆生ニ拜ム事ヲ御授ケニナルガ下種ト申スナリ云云。

昔、不輕菩薩は人々を拜でお歩きなされました。其拜むといふは何を拜まれたのかと申しますと、一切衆生の佛性を拜まれたのであります。而して佛性——やがて成長して佛となるべき種子——佛種とは如何なるものなりやと尋ねますと、宇宙一切の萬物(萬法)に本來として具はつてゐる法性——法の性質——であります。其の法性といふものは一體どんな姿をして居るか伺ひますと、それが釋尊御悟りの一大秘法たる妙法蓮華經の五字であります。五百塵點劫の昔、釋尊は一切の萬物の法性は妙法蓮華經であると御悟り遊ばされてから、手をかへ姿をかへて此の義を宣布遊ばされた。今、末法日蓮大士も亦其の御一人、釋尊の和光同塵の尊き御姿であります。されば宗祖大士御一期の大目的は、一切衆生の胸中に佛種たる妙法蓮華經の安座ましますことを教ふるより外無いのでありま

す。これを信ぜよ、これを拜めよと絶叫遊ばされた。これが下種と申す義であります。御弘通の目的はこゝにあります。こゝが日蓮ハ不輕ノ跡ヲ紹繼スといふ義であります。既に衆生心即妙法蓮華經なりと信ずることを得たならば、日々これを磨かねばなりません。知つた文では光りは發しません。日夜朝暮に懈らず磨かねばなりません。宗祖大士の一生成佛抄に

深ク信心ヲ發シテ日夜朝暮に又懈ラズ磨クベシ。何様ニシテカ磨クベキ。只南無妙法蓮華經ト唱へ奉ルヲ是ヲ磨クトハ云ナリ。云云。(一一八頁)

お題目を口にまかせて唱へ奉るのが磨くのであると御教へ下されてあります。

一〇、經力下種

口に任せてお題目を唱へるのが下種となる、而も信者はこれを知らずに口唱してゐる。これは經力の下種なるが故であります。開基聖人の私新抄に云く、

小兒乳ヲ含ム其ノ味ヲ知ラズ自然ニ身ヲ益ス。我等一分ノ慧解モ無ク但ダ口ニ任セテ南無妙法蓮華經ト唱フル外ニ餘念ナシ、思慮ナシ、思慮ナケレバ信心ナリ。信トハ無餘念ナリ。無餘念ナレバ疑心ナシ。疑心ナケレバ己心自妙法ナリ。是則チ初心ノ行者、其義ヲ知ラズ自然ニ之ヲ行フテ其ノ下種ノ義ニ當ル。是レ即チ信位ノ下種、最初發信ノ下種ナリ。云云。

何も知らぬ、赤ん坊が何の考へもなしに乳房にすひ付てゐると同じ事だ、一分の智慧も解もない底下の愚人、しかし生じつかありもせぬ考へなどは出さぬ方がよらしい。飯に糞をまじへると同じだ、役に立たぬ丈で相濟まぬ邪魔になる有害無益だ。頂戴した妙法に變な味をつけぬことだ。持つてる臭味を早く除くことだ。ガラス瓶の中に綺麗な花がはいつてゐる。瓶の上に来たないレッテルがくつ付てゐる。折角の花がかくされて仕舞ふてゐる。早くきたないレッテルやよごれを拭取つて仕舞へ。何も外に彩色などする必要は少しもない。よごれさへ除けばガラス瓶の中のきれいな花が拜まれるのだ、雲が晴れ、ば月が拜めるのだ。無餘念無思慮となれば己心自から妙法なんであります。まだよごれがとれないか、そんならもつと口唱をせい、獨りではまだ無餘念とならぬか、拍子木を叩け、助行を受けよ、太鼓を叩け、したら無餘念に早くなりませう。御教歌に

餘念なくなるも太鼓の音のみか、すといとんの拍子木もよし

知らず識らずに罪障のよごれが除かれる。これ全く經力佛力のしからしむる所であります。

一一、お經とお題目

末法下種の砌にはお題目だけで、お經はよまなくてもよろしいのかと尋ねたい人がありませう。イヤ讀んでも差支はありません。御教歌に

お經よめ心得てよめ末法は下種のみぎりと心得てよめ
 下種中心でお經よめば差支はありません。開基隆聖の十三問答抄に
 法華經ヲ過去三五下種ノ處ニ置キ、下種ノ義ヲ以テ能開ノ神トナシ一經ヲ談ズレバ、一經即チ
 過去經ナリ。種子無上經ナリ。云云。

下種の義を以て開會して讀め、イヤモウ結構です。我等凡愚のものがどうして開會なぞが出来ませ
 ろや。お經を間違ひなくよむのさへなかくの骨折仕事ぢや。とてもく開會するの、三五下種の處
 へ置くのといふやうな事は出来ませぬ。教務の方ならば、或は又御法門研究の上に必要があるかもし
 れませぬが、我等信者の分際ではとても出来ない難行苦行ぢや。そんな六ヶ敷事をするよりも
 易修易行の五字七字の口唱題目宗の信者で澤山で御座ります。而も無餘念の口唱さへはげれば自然と
 下種の義を成じ、下種即身成佛の大果報を聞く事が出来るとの御指南を頂いて充分満足であります。
 小兒の正宗いじりは物騒千萬、たゞく信の一字こそ下種の砌は大切と心得ます。

第四 本門經王宗

一、王の義

法華經第七の卷藥王菩薩本事品に云く、帝釋ノ三十三天ノ中ニ於テ王ナルガ如ク、此經モ亦復是ノ如シ。諸經ノ中ノ王ナリ。

又云く、佛爲レ諸法ノ王ナルガ如ク、此經モ亦復是ノ如シ、諸經ノ中ノ王ナリ。

一口に經王と申しましても、其の對するものによりて種々に王の位が變ります。宗祖大士の顯謗法抄を拜見致しますと、

主ヲ王トイハハ百姓モ宅中ノ王ナリ。地頭、領家等モ又村、郷、郡、國ノ王ナリ。シカレドモ大王ニハアラズ。(四五三頁)

百姓でも一家の主人といふ時には王様といへるのであります。町村長、郡長等も其の町村郡に於ける王様であります。況んや昔の殿様などは一國の王としての權威を充分に發揮したものであります。が、一朝明治維新に遇ふや忽ちに王位を失ふて臣下となる。これ眞實の王様で無かつた爲であります。顯謗法抄に云く、

小乗經ニハ無爲涅槃ノ理ガ王ナリ。小乗ノ戒定等ニ對シテハ智慧ハ王ナリ。諸大乘經ニハ中道ノ理ガ王ナリ。又華嚴經ハ圓融相即ノ王、般若經ハ空理ノ王、大集經ハ守護正法ノ王、藥師經ハ藥師如來ノ別願ヲ説ク經ノ中ノ王、雙觀經ハ阿彌陀佛ノ四十八願ヲ説ク經ノ中ノ王、大日經ハ印眞言ヲ説ク經ノ中ノ王、一代一切經ノ王ニアラズ、法華ハ眞諦俗諦、空假中、印眞言無爲ノ理、十二大願、四十八願、一切諸經ノ所説ノ所詮ノ法門ノ大王ナリ。(四五三頁)

大小權實の諸經てんぐに己れが經中の王である、諸經の中の第一であるといふてゐますが、その相手は如來一代五十年の說法を指して居るのではありません。それ故眞實の經王といふ事は出來ないのであります。然らば法華經も同様一部分の經王であるかといふに、斷然然らずと御答へ致します。妙樂大師(記六)云く、

縱ヒ經アリテ諸經ノ王ト云フトモ已今當説最爲第一ト云ハズ。

と釋せられてあります。何んば第一じや第一じやといふても已今當説最爲第一といはないから、眞實の第一ではないといふのであります。然らば法華經にはそれが有るのですか、といふに勿論あります。否妙樂大師の御釋は、法華經に説くが如く已今當説、最爲第一といはぬから、といふ意味であります。

ますから、有るの無いのといふ事は問題になりません。然らば其の已今當云云の文の意如何、以下説明を加へることに致します。

二、三説超過

法華經第四の卷、法師品に云く、

我が所説ノ經典、無量千萬億ニシテ、已ニ説キ今説キ當ニ説カン。而モ其中ニ於テ此ノ法華經最モコレ難信難解ナリ。

文の意は釋迦佛の御説きなされた御經は無量千萬億もある。已に説いた澤山な經々、今説いた御經、是から當に説かんとする經々の中に於て、此の法華經が一番六ヶ敷いのであるといふのであります。扱て此の三説はどの御經を指して居るのかといふに、天台大師は今初ニ已ト言フ者、大品已上漸頓ノ諸説ナリ。今ト者同一座席、無量義經ヲ謂フ。當ト者涅槃ヲ言フ也。(文句七)

とあります。大品とは般若經を指します。即ち華嚴、阿含、方等、般若の四十餘年の經々を已説と申すのであります。今説とはタツタ今説いたばかりの無量義經、當説とは法華以後の涅槃經を指すのであります。この已今當の三字で釋迦佛所説の一切の經々を言ひ盡して、其中で法華經が一番六ヶ敷

とあります。なぜ六ヶ敷のか、信じ難いのかと申しますと。天台大師は

今、法華、法ヲ論ズレバ一切ノ差別融通シテ一法ニ歸ス。人ヲ論ズレバ師弟本迹俱ニ皆久遠ナリ。

二門悉ク昔ト反スレバ信ジ難ク解シ難シ。(文句七)

人法二面に於て難信難解である。法に就いては、一切の萬法が差別を泯絶し圓融して一法の妙法に歸す。聲聞、緣覺、菩薩の別あるなく、男女皆同一である。菩薩の成佛を許さば何ぞ聲聞緣覺の二乗の成佛を妨ぐべき。男に佛性を認むれば女にも亦佛性あるを許さざるべからず、然るに法華以前に於ては二乗は永く成佛すべからずと説き、女人また淨土の門を閉ざされたり、かくの如く所説の法に於て昔と根本的に相違する爲め聽衆の信を取り難いのであります。それ故に大智舍利弗尊者、猶、魔の佛となりて我を惱亂するに非ずやと悶えたのであります。人に於ては三千塵點、五百塵點の因縁を説く。就中、四十餘年前始めて成佛せしと思ひし釋迦牟尼如來は、何ぞしらん五百塵點劫以前に於て成佛遊ばされたと説く。加之それ以來教化せられた御弟子本化の上行等、雲の如く集まる大衆に練達熟習の菩薩達は惑耳驚心したのであります。四十餘年の經々と事毎に天地の相違を現出する、驚かざらんと欲するも能はざる所であります。

爾前ノ經々ハ多言ナリ、法華經ハ一言ナリ。爾前ノ經々ハ多經ナリ、此經ハ一經ナリ。彼々ノ經々ハ多年ナリ、此經ハ八年ナリ。佛ハ大妄語ノ人永ク信ズベカラズ。不信ノ上ニ信ヲ立テバ爾前ノ經々ハ信ズル事モアリナン。法華經ハ永ク信ズベカラズ。(七六一頁)

不信の上に信を立つるを許すとも、猶法華の信は得難いとの宗祖大士の切言、何ぞ痛快なる。實に法華經は難信難解の御經であります。然れども如何に多言對一言なりとも、天子の一言を奈何せんや。多經對一經なりとも、焙烙千ニ槌一ツ(二八四一頁)の御諺。多年對八年なりとも前判は後判に従ふの道理、一切の大衆最終の歸結、最高の指導原理たゞ已今當三說超過の法華經あるのみ。茲を以て妙樂大師は記の六に云く、

今乃チ諸ノ小王ヲ廢シテ唯一主ヲ立ツ。是ノ故ニ法華ヲ王中之王ト名ク。

王の義を説明し盡せるものといはねばなりません。

三、本門經王 一口に法華經は經中の王、否、經王中の經王なりと申しましても、其の法華經の中に迹門と本門との二つがあることを知つて置かなければなりません。宗祖大士の治病抄に

法華經ニ又二經アリ。所謂ル迹門ト本門トナリ。(二〇九八頁)
とあります。これは勿論、宗祖大士の獨斷ではありません。妙樂大師が釋籤の一に
本迹ヲ二經ト爲ス。

と釋されてあります。而して此の二經に就て、治病抄に宗祖大士は

本迹ノ相違ハ水火天地ノ違目ナリ。乃至、本迹ヲ混合スレバ水火を辨ヘザル者ナリ。(二〇九八頁)

と嚴判されてあります。なぜこんなに水と火と天と地とほど違ふのかと申すことに就ては、なか／＼
六ヶ敷説明を要する事とて、こゝで讀者の満足を得ることは出来ませんが、治病抄の御指南によれば、

爾前(法華經以前の諸經)ト迹門トハ相違アリト雖モ、相似ノ邊ニ有リヌベシ。(二〇九八頁)

權教權門といふ爾前の經々と迹門とは共通點——相似ノ邊——があるといふのです。而して本門は

一向永異と申しまして、本門と爾前權教とは絕對に違つて居ります。即ち本門の唯一の特徴である、

久遠實成の釋尊といふ高處に立つて見るときは、迹門も權教の分際に同するものであります。されば

迹門十四品モ一向ニ爾前ニ同ズ。(七六六頁)

と宗祖大士は指摘遊ばされてあります。加之、

法華經ノ半分、迹門十四品。(一五六〇頁)

といふて、迹門には法華一經を代表する資格を缺いて居るのであります。然らば本門も矢張り法華
經の半分ではないかと疑ふ人があるかもしれませんが、一寸見れば半分の様にも見えませんが、決して
そんな譯のものではありません。

元來法華經といふことは略稱で、具には妙法蓮華經と申すことは皆様の御承知の處であります。

此の妙法蓮華經は本門の題目であつて迹門には、妙法蓮華經無しと申されてあります。天台大師は玄

義に於て釋せられた時に、

此ノ妙法蓮華經ハ本地甚深ノ奥藏ナリ。

とあります。本地とは本門の事であります。されば妙法蓮華經は本門の題目であります。依て宗祖

大士は三大秘法を唱へ遊ばす時、本門の本尊、本門の戒壇、本門事行の南無妙法蓮華經と御定め遊ば

されたのであります。これに依て嚴密に申せば法華經とは本門法華經であります。故に法華經は經王

なりと申すことを日隆聖人は本門經王宗と仰せ遊ばされたのであります。

四、迹門は裏

それならば迹門はどうなるのですか、法華經の中から取捨つるのですか、とい

ふに宗祖大士は四菩薩造立抄に、

末法ノ始ハ一向ニ本門ナリ。一向ニ本門ナレバトテ迹門ヲ捨ツベキニアラズ。法華經一部ニ於テ前ノ十四品ヲ捨ツベキ經文コレ無し。(二八五七頁)

と御示し遊ばされてあります。捨て、よいといふ事は御經に設てない。然らば用ひもせず捨てもせずといふと一體どうなるのですかといふに、決して用ひないのではありません。用ひますが主として用ひないのであります。物には正と傍、主と副と表と裏の區別を立て、行かねばならぬものです。隊長と副官、亭主と女房、紙にも裏表、末法には一經の中に於て本門を表とし、正とし、迹門を裏に、傍に用ひて弘通するのであります。故に四菩薩造立抄には、

今ノ時ハ正ニハ本門、傍ニハ迹門ナリ。迹門無得道ト云フテ、迹門ヲ捨テ、一向ニ本門ニ心ヲ入レサセ給フ人々ハ、未ダ日蓮ガ本意ノ法門ヲ習ハセ給ハザルニコソ、以テノ外ノ僻見ナリ。(同上)

とあります。亭主が一家を代表し、一家の中心となつて居るからとて、女房は不用の者といへますか、そんな強氣な亭主はありませんね。然しそれだからとて二人並んで、亭主が客と取引をして居るのに側から女房が口を出すのはいけませんね。飽迄内助の御奉公でありたいですね。本門は日です、

迹門は月です。本門は陽です、迹門は陰です。本門は亭主です、迹門は女房です。家の名札は亭主の姓名で出て居ります。然し女房が居ない譯ではありません。つまり所は本門法華經の裏に迹門がくつ附いて表を助けるのです。この事を本面迹裏、本正迹傍、或は本勝迹劣など申すのであります。換言すれば、末法に於ては南無妙法蓮華經の五字七字を弘むるより外何物もありませんが、此の御題目を弘通するに就て、本門の意に依て弘むるを本門を正とするといふのであります。本門の意に依て弘むるから、迹門の意を全然用ひないのかといふと、それはいけないのであります。なぜいけないかといふと、それは迹門を捨つることになります。曩に述べました如く、迹門を捨つべき經文これ無き道理であります。されば迹門の意を適宜に取り用ひるのであります。然し水火の相違ある二門の教でありますから、時には用ひない場合もあります。一例を挙げますと、本門は折伏行です。迹門は攝受行です。この二つの修行を折伏正意、攝受傍意と用ひるのであります。末法は折伏を表として弘通はするが、時により、人によりて攝受を用ゆることがあります。如何に進むを知つて退くことを知らぬ日本軍でも、場合によれば退却することもありません。しかし軍隊ではこれを背進と申すとか、進撃正意の言葉であると思ひます。或は迹門は智者、本門は信者でありますが、然し信を妨げず、寧ろ信

心増進の爲に智者の解行を許す場合もあります。
 以上を約言致しますと、法華經の中には本門と迹門との二經がありますが、末法に於ては法華經は一部悉く本門となつて仕舞ふのであります。この時迹門は本門の家の迹門と呼ばれるのであります。女が自分の姓を捨て、男の家に嫁し、男の姓を名乗る。而も女としての特徴は嚴として存在し、男の爲に内助の働を爲すが如く、迹門の特徴を以て裏より本門の弘通を補ふのであります。かゝる義趣を以てお題目を弘むるを本門經王宗と申すのであります。

第五事相宗

一、愚者には事相 日隆聖人(四帖抄) 云く、日蓮所立ノ本門法華宗ハ事相宗ナリ。此ノ事相宗ハ末代ノ愚人ヲ攝スル最要ナリ。愚者ハ事ヲ好ム。好ム所ノ事ニ即シテ本門ノ事妙ヲ授ク。機法相當シテ巨益甚深ナリ。記ノ九云ク、未了者ノ爲ニ事ヲ以テ理ヲ顯ス云云。日蓮大士此ノ意ヲ得テ諸御抄ニ、章々段々ニ事ノ釋ヲ作ル。云云。
 此の御指南誠に事相宗の御意を述べ盡されてあると存じます。取りわけて、

愚人ハ事ヲ好ム。好ム所ノ事ニ即シテ本門ノ事妙ヲ授ク。機法相當シテ巨益甚深ナリ。云云。

の御文、要中の要であります。それでこの御文に従て一通り説明を加へて見ませう。
 俗、事とは事實の事で、世上に現るゝ現象を申します。小さければ小事、大なれば大事となります。愚者は兎角目前に現れる事實でなければ信用致しません。信用しなければ如何に結構な教も何の詮もない事になります。御經文に信ヲ以テ入ルコトヲ得タリとあります。又信力ノ故ニ受クとも御指南遊ばされ、信ノ一字ヲ詮ト爲ス(二五三九頁)と定判遊ばされてあります。なぜ愚者は事を信するかといふに、事に對するものは理でありますが、智者は心眼、智眼等で之を見ることが出来ますが、愚者の眼には一向うつりません。眼にうつらなくても道理を説いたらわかるだらう、といひますが、その道理が愚者には理窟と響くものです。イヤ理窟でもよいじやありませんか、理窟即ち道理、道理即ち理窟であります。と、それが理窟といふもので、尤も理窟の窟は穴といふ義で地上の凹い處をいひます。水はこの凹い穴へ自然に集まります。其様に道理が集まる所を理窟といふのですけれども、自然に集まつてこそ結構、無理やりに引張つて来て岩窟へ押込む様な集め方をするのが當世の所謂理窟であるので、今日では字引に理窟の處へ「コヂツケの理由」と説明がついて居ります位であります。愚者は

結構な道理と此コチツケの理窟とを同一視、しないまでも親類位には思ひまして、理窟はつけやうでネといふのが一般であります。そこで論より證據といふ事實しらすべをして、この事實があればそれは本當だと初めて信を置くのであります。これはごく低い人斗りかといふに決してさうではありませぬ。現代は科學時代と申します。彼の哲學時代に對していふ言葉でありますが、哲學は愛智の學であるに對し科學は徹頭徹尾事實の學であります。されば本邦に於て科學といふ語は天文學、物理學、生物學等の自然科學を意味する有様であります。而も哲學をさへ科學化し去らんと爲しつゝある現代の趨勢は、如何に事に重きを置くかを相知ることが出来ませう。

二、本門事妙

天台大師が迹門ノ正意ハ實相ヲ顯スニ在リ。本門ノ正意ハ壽ノ長遠ヲ顯スと釋せられてある如く、迹門は實相の妙理を説くを正意とするが、本門は如來の壽命の長遠を顯すのが主眼であります。如來の壽命と申せばいふ迄もなく生きてまします佛、現實の佛、即ち事の佛を説き顯すのであります。換言すれば釋迦牟尼如來の成佛已來の生ける歴史、實地御弘通の叙述が本門の法門であります。此の生きた事實談の上に眞實の妙法蓮華經は顯現されます。これを本門事妙といふのであります。妙樂大師が、但ダ遠本ヲ點ズレバ遠妙自ラ彰ルと釋されたが、久遠の本因の御修行、

久遠本佛の本果の御上を説く處に久遠の妙法は自ら顯現するといふのであります。わかり易くいへば、お互が難有い信心なるものを説かんとする場合、どうしたら一番よく説明が出来、對手に信を發さしむることが出来るかといふに、道理ではとても第一わかりません。御經文や御書御指南、それはよく存じて居りません。道理證文よりも現證に如かずで、自分が御信心を頂いた事、即ち現證御利益の事實談を語れば尤も効果的であるのであります。これが取りも直さず但點遠本、遠妙自彰であります。妙を説かんとして説くことの出来るものではありません。

本門は事の御教であります。開基日隆聖人の五帖抄に云く、日蓮宗ニハ事ノ三世、事ノ本土ニ約シ、事相報佛ノ長壽ニ約シ、事成ノ顯本ヲ顯ハシ、事成ノ十界皆成ヲ示シ、本門事圓三千事行ノ南無妙法蓮華經ヲ弘通スベキモノナリ。と御指南下されてあります。事の三世とは五百塵點劫の過去以來を指し、事の本土とは西方安養世界等に對して、吾が足もて踏める此事の娑婆世界をいひ、事相報佛の長壽とか事成顯本とかいふのは久遠の實修實證の本佛を意味する等であります。長くなりまますから説明を省略致します。

三、機法相當

機とは機根であります。即前に述べた如く末法今日の衆生の機根は何れも

事を好み、事相に顯れ来るものを信頼するのであります。是機は一個人一個人のみでない現代既に科學時代と稱する程實驗、實地に傾いて居るのであります。所謂機と時國が事相萬能となつて居るのであります。さればこの好みに従て、この發信の容易なるに投じて、茲に本門事の教法を宣布する、必や大衆を感化することが出来るに相違ないのであります。されば宗祖大士は、本尊に修行に將た利益に於てすら、何れも事を主として御説き下されたのであります。以下具體的に如何に事相を主とするかを説明致しませう。

四、事相とは有相行 先づ第一に修行の上でいふて見ますと、事相とは有相行であります。開基隆聖の一帖抄に云く、初心無智ノ行ハ有相、事相ノ行ヲ以テ最要ト爲ス可シ云云。然るに有相行といふ事に就て妙樂大師(輔行ノ二)云く、菩薩法華ヲ學ブニ二種ノ行ヲ具足ス。一ハ有相行、二ハ無相行。無相安樂行ハ甚深妙禪定、六情根ヲ觀察ス。有相安樂行ハ散心ニ法華ヲ誦シ、禪三昧ニ入ラズ、坐立行、一心ニ法華ノ文字ヲ念ズ云云。又云く、三昧ニ入ラズ但ダ誦持スルガ故ニ、故ニ有相ト名ク云々。法華經の修行に二通りあるのです。有相行と無相行であります。無相行は禪定、即ち三昧に入つて心を觀するのであります。有相行は禪定に入らず、たゞ御經文を唱へ、又御經文を念する丈で

あります。

さて禪三昧に入らず、たゞ法華の文字を唱へ念するといへば、皆さんも直におわかりで御座います。南無妙法蓮華經の御本尊を念じ口唱する御看經が末法時機相應の有相安樂行、即ち事相行であります。されば開基隆聖は事行トハ口唱ナリ。(四帖抄)と仰せ遊ばされてあります。事行とはいふまでもなく事相行を略して事行と申されたのであります。

又開導上人は

本門は事相宗なり、事相とは、めに見えたるを事相とぞいふ
よそめにも信心すると見ゆるこそ、時機相應の事行なりけれ

又本門事行といふことを、

末法は無智なる故に心にて、出來ぬを所作であるが信心

と御詠み下されてあります。心で思ふてゐる信心は觀念的で無相行に近い。誰の日にも、あれは信心をして居ると直にわかるやうにして居るのは當講の御本意に叶ふ有相行であります。

五、對境が事相

次に修行の對境が事相であります。無相行の方では自分の心を對境とするの

であります。宗祖云く、我が己心ヲ觀ジテ十法界ヲ見ル是ヲ觀心ト云フ（九三〇頁）。即ち坐禪入定して心の實の相を觀するのであります。天台大師（止觀）云く、一心ニ十法界ヲ具ス。一法界ニ又十法界ヲ具スレバ百法界ナリ。乃至百法界ニ即チ三千種ノ世間ヲ具ス。此ノ三千、一念ノ心ニ在リ。云云。凡そ人の心には地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十法界を具するものである。人界に十法界を具するならば他の地獄等の九界の一界一界にも皆各十法界を具するは自明の理である。されば十法界各十法界を具す故に百法界となる。此の百法界に三千種の世間を具して居るが、此の三千種の世間は一念——一刹那の心に在るものである、と天台大師は述べられてあります。而も此の不思議の心と三千種の世間との關係を觀するに、一心より三千種のもものが生じた、でもいけない。一心に三千種のもものが含まれて居るといふても不可である。心が即ち三千其のもものが是れ心である。一でもなく多でもない。其の處玄妙、深絶、不可思議境であると叙せられてあります。一念三千の法門即此であります。此等は到底末法愚凡の窺ひ知る處ではありません。これに依て宗祖大士は靈筆を以て十界の曼陀羅を顯現して、有相行の信者の所對の境と御示し下されたのであります。宗祖大士云く、

一念三千ノ法門ヲフリス、ギ立テタルハ大曼陀羅ナリ。（七四六頁）

一念三千ヲ識ラザル者ニハ佛大慈悲ヲ起シ、妙法五字ノ袋ノ内ニ此ノ珠ヲツ、ム。（七四九頁）

開すれば十界の曼陀羅となり、收むれば五字七字の題目となる。妙法の御本尊こそ我等の觀する對境であります。而も此の妙法の五字は、抽象的理法にあらずして久遠實成の生身の佛陀にまします。開する處の十法界の聖衆、亦是れ本佛分身の佛菩薩にまします。即ち有相事相の御尊形を御本尊とし修行の對境と仰ぐのであります。

六、理證よりも現證

かく修行の對境たる所觀の本尊既に有相であります。此の有相の本尊に向つて事行の南無妙法蓮華經を口唱する。その所得の利益を證明するに又理證よりも現證を先とするのであります。

つらく三千年前、靈山會上に於て此の妙法を證するに、四智八辯の大聖釋迦牟尼佛、猶ほ高さ五百由旬、廣さ二百五十由旬の大七寶妙塔の出現を請じ、加之、十方分身三世の諸佛の助舌を求められました。開目抄に云く、
爾時ニ東方寶淨世界ノ多寶如來、高サ五百由旬、廣サ二百五十由旬ノ大七寶塔ニ乗ジテ、乃至佛前

ニ大地ヨリ涌現シテ虚空ニ上リ給フ。例セバ暗夜ニ満月ノ東山ヨリ出ルガ如シ。七寶ノ塔大ゾラニカ、ラセ給テ、大地ニモツカズ大虚ニモ付セ給ハズ。天中ニ懸リテ寶塔ノ中ヨリ梵音聲ヲ出シテ證明シテ云ク、乃至。釋迦牟尼世尊ノ説ノ如キハ皆是レ眞實ナリ。(七六〇頁)

呵責謗法抄に云く、

釋迦ハ廣長舌ヲ色界ノ頂ニ付ケ給ヘバ、諸佛モ亦復是ノ如ク、四百萬億那由佗ノ國土ノ虚空ニ諸佛ノ御舌、赤虹ヲ百千萬億並ベタルガ如ク充滿セシカバ、オビタマシカリシ事ナリ。是ノ如ク不思議ノ十神力ヲ現ジテ、結要付屬ト申シテ、法華經ノ肝心ヲ拔出シテ四菩薩ニ譲リ、我ガ滅後ニ十方ノ衆生ニ與ヘヨト慇懃ニ付屬ス。(二〇一五頁)

これ何れも事相であります。宗祖日蓮大菩薩、日本第一の智辯にましませども、日蓮佛法ヲ試ミルニ道理ト證文トニハ過ギズ。又道理文證ヨリモ現證ニハ過ギズ。(二二五五頁)

と仰せ遊ばされてあります。佛法は道理と經文より外は無。これを以て其の正法を證明すればよいのであるが、然しよく考へて見ると、それ等の道理證や經文證よりも現實證の方が極めて効果的であるとの御意であります。其他、

人界所具ノ佛界ハ水中ノ火、火中ノ水、最モ信ジ難シ。乃至。此等ノ現證ヲ以テ之ヲ信ズベキナリ。

(九三三頁)

文證、現證アル法華經ノ即身成佛ヲバナキニシテ、文證モ現證モアトカタモナキ眞言ノ經云云。

(二二〇九頁)

イカニ人申ストモ、即身成佛ノ人ナクバ用ユベカラズ。(一九六七頁)

成佛の可能なりや不可能なりやを證明せんとするに現證——事實證を如何に重視せられたかを知る事が出来ませう。

以上、教、行、證の三方面から、末法の弘通は偏に事を尙ぶ所以を述べました。門祖の愚者ハ事ヲ好ム、好ム所ノ事ニ即シテ本門事妙ヲ授ク。(四帖抄)

の御意果して説き得たりや否や。

第六 無 智 宗

一、惡世末法

末法に教法を弘むるには先づ時と機とを鑑みなければなりません。しかるに法

華經第六の卷、分別功德品に、如來の滅後に此經を弘むるに就て五品の次第を御説き遊ばされました。其中に、惡世末法ノ時、能ク此經ヲ持ツ者と仰せられて、此の法華經を弘通する末法は惡世なりと御示し遊ばされてあります。此の惡世といふは即ち惡人充滿といふ事で、土地が惡いとか、山や川が惡いとかいふ意味ではありません。惡人が澤山住する國が惡國で、惡人が幅をきかせて居る時代を惡世といふのであります。此の惡國、惡世の人々は愚人計であります。換言すれば下根下機の人々の集まる時代であります。第一末法といふ名目がその意味を示して居るのであります。正法一千年は正しき教法の弘まる時代。像法一千年は、像は肖像の像で形、姿といふ義で、やがて形丈はといふ意を表し、結局形式だけは佛法流布の時代といふのであります。それが第三の末法となれば、末は粉末の末で、又は微弱の意で、殆んど佛法らしいものは無いといふ時代であります。これは教法の上での名目でありますが、同時に、正法は正しく佛法を持つ上根上機の人の集まる時、像法は形式的には持つが精神的には持つ丈の機根の無い中根中機の人の集まる時、末法は名のみ佛教徒で、誠の信も誠の行も無くなつた下根下機の惡人愚人のみ落ち合ふた時といふ事であるのであります。

宗祖大士の教行證御書に、

正法ニハ教行證ノ三俱ニ兼備セリ。像法ニハ教行ノミアツテ證ナシ。今末法ニ入テハ教ノミアリテ行證ナシ。(一一一五頁)

と説かれてあります。教は佛の教法、是は一口に云へばお經の事です。何時の世にもあります。然しこれを修行すると否とは時と機根によりて變ずるのであります。即ち正法時代ではチヤンと修行して必ず證得するのであります。像法には形式的に、いはゞ眞似かた丈は行するが、何分機根が劣つて居るので、肝心の證得とてさとりは得られない。末法に入つては形式的な眞似かた丈でもありません。況や證得をやであります。機根の上中下はこれによりてよく知られませう。

末法が惡人愚人充滿の時代であることを、モ一つ傳教大師の末法燈明記によりて述べ加へて置きませう。

末法ノ申ニ於テハ但ダ言教ノミアツテ行證ナシ。若シ戒法ニ依ラバ破戒アルベシ。既ニ戒法無シ。何ノ戒ヲ破スルニ由リテカ破戒アランヤ。破戒尙無シ。何ニ況ヤ持戒ヲヤ。乃至。末法ノ中ニ持戒ノ者アラバ既ニ恠異ナリ。市ニ虎アルガ如シ云々。

正法千年は持戒、像法千年は破戒のもの多くして持戒少し。末法には破戒さへ無い。なぜかといふ

に持戒あつて始めて破戒のものが出来る。持戒のものが無いのにどうして破戒の者が出来ませう。もし持戒のものが居るといふならば、それは頗るあやしいものぢや。市中に虎が住んで居るといふに同じであると同様にあります。破戒尙無シの一語、末法の機情を道破せるものといふべきであります。以て末法の機に對する經論の諸説を伺ふことが出来たてであります。

二、要法を説け

上來述べました如く、末法は下根下機の人々のみでありますから、隨つて六ヶ敷ことを説いても救はれないのであります。それで佛は末法の衆生の爲に廣略を捨て、要を取り、要中の要たる妙法蓮華經の五字に限つて信奉せしめる様、上行菩薩に命じ遊ばされたのであります。御經文に以要言之——要ヲ以テ之ヲ言ハハといふ其の要は南無妙法蓮華經であります。

宗祖大士云く、

大覺世尊壽量品ヲ演說シテ、然シテ後ニ十神力ヲ示現シ四大菩薩ニ付屬シ玉フ。其所屬ノ法ハ何物ゾヤ。法華經ノ中ニモ廣ヲ捨テ略ヲ取リ、略ヲ捨テ要ヲ取ル所謂ル妙法蓮華經ノ五字。(一一〇四頁) 又云、日蓮ハ廣略ヲ捨テ、肝要ヲ好ム。所謂ル上行菩薩所傳ノ妙法蓮華經ノ五字ナリ。(一〇四二頁) 下根下機といふことを一口にいへば無智といふことであります。無智のものが聞き手でありますか

ら、六ヶ敷ことはいふても甲斐がありません。たゞ聞かす丈ではありません。修行させねばならぬのであります。然るに人を導くには口でいふた丈ではナカク、やらないものであります。無智の人は其點では猶更であります。即ち行ふて見せるので無ければ用ひないのであります。こゝに於て其の手段となる師匠も亦無智者としての修行をせねばならぬのであります。開導聖人は

智惠の無き弟子に教への御言葉は、我は無智ぞと師匠のたまひ

宗祖大士の開目抄に、

日蓮が法華經ノ智解ハ天台傳教ニハ千萬ガ一分モ及ブ事ナケレドモ云々。(七七二頁)

とある御文によりて御詠み遊ばされたものであります。

三、無智の誇り

法華經を弘むるものが無智の誇りを受くることは、不輕菩薩の御時よりあることで今更珍らしいことではありません。即ち法華經第七の卷に云く、

惡口罵詈シテ云ク、是ノ無智ノ比丘。

と、不輕菩薩の折伏に憤怒の色を現はした僧俗男女は、口々に不輕菩薩を「是ノ無智ノ比丘」と罵つたのであります。開基日隆聖人は四帖抄に云く、

不輕大士ヲバ輕毀四衆ノ諸宗謗ジテ云ク、是無智比丘トイヘリ。當時又謗ジテ云ク、無智ノ日蓮、ナニモ知ラザル法華宗ト云々。不受餘經一偈ノ無智宗ナリ。

と、不輕大士は無智の比丘と謗られ遊ばした、吾宗祖日蓮大士も亦無智と罵られ遊ばしました。聞基又云く、

廣略ヲ捨テ、要ヲ取ル。不輕ノ不專讀誦經典ノ初心始行ヲ學ビ、は無智比丘ノ先證ヲ受ケテ法華宗ヲ立ツ。

不專讀誦經典とは第七の卷、不輕品の御文で、經典ヲ讀誦スルコトヲ專ラニセズと讀みます。所謂のお経屋さんではないのであります。お経もろく／＼讀めない、讀まない初心の行が不輕の御流儀、これを世間の者共がお経もあげられない是の無智の比丘と罵つた、その無智を受繼で法華宗を立たのが、吾宗祖日蓮大士で御座います。されば無智といはれても決してつらくはありません。つらい所か却て結構と喜ばねばならぬのであります。然るに此の無智宗の信心が氣に入らぬ人があるやうです。私は大學を卒業したのだ、私は女學校を卒業しました、無智だなどいふて下さるな、といふ様な口振りがチラホラ見えますが、佛法でいふ智といふものは學士や博士の智慧などは問題にしてゐない

のですよ。天台大師の玄義に二十智が出されてありますが、一番始を世智といひます。その世智の内容は支那でいへば、五行、六藝、天文、地理、醫方、卜相、兵法、貨法、草木、禽獸等を極めたるものであるといはれてあります。印度の世智といはれるものには十二ヶ年間恒河の水を耳の中に停めたなどいふものも入れてあります。その世智の上に十九の智があります。十九番上の智を妙覺といふ即ち佛のお悟りであります。少々の學問をしてもそれは物識といふに過ぎません。眞の智といふ者には一寸間が御座いますから、博士様でも佛法では無智の仲間であります。今いふ所の無智といふ智は佛法の内の十九智が無いといふことであります。このゆわれが御わかりになりましたら無智といはれてもお怒りは起らぬわけでありませう。

序乍ら申して置きたいのは、信者の方が無智といふ事を御存じないのはマア御尤と致しますが、僧侶であつて無智といはれることを大變つらがつてゐる人が有ります。それで有智のメツキを張りつけて一かどの學者振を見せてゐる人がありますが、私の知つてゐる人は、人物としてはナカ／＼のやり手だと感心してゐる位であります。其メツキがとても鼻について胸が悪くなり、ツイ馬鹿な人だなあと思はずにはゐられないのです。彼の孔雀の尾を拾ふて自分のお尻にさし込で意氣揚々として歩

きまはる鳥殿にも似たりや似たりと三歎せずにはゐられません。お五は決して無智をつらがらず、寧ろ無信を恐れなければなりません。宗祖大士は、
 總ジテ予ガ弟子等ハ我が如ク正理ヲ修行シ給ヘ。智者學匠ノ身トナリテモ地獄ニ墮チテハ何ノ詮カ
 アルベキ乎。所詮、時々念々ニ南無妙法蓮華經ト唱フ可シ。(一八五七頁)
 と御示し下されて有ます。正理とは妙法五字、正理修行とは妙法口唱、これぞ第一の大事であります。

第七 信心 宗

一、信心の價值 凡そ佛教に於ては信なきものは、如何に學問があつても成佛は出来ないと言
 判されてあります。法華經に「以信得入」とある。信心のみ能く寂光淨土の門に入ることが許され
 てあるのであります。宗祖大士は、
 法華經ニハ以信得入ト云ヒ、涅槃經ニハ是ノ菩提ノ因ハ復タ無量ナリト雖モ、若シ信心ヲ説ケバ則
 チ已ニ攝盡ス等云云。夫レ佛道ニ入ル根本ハ信ヲモテ本トス。タトヒ悟リナケレドモ信心アラシ
 ハ鈍根モ正見ノ者ナリ。タトヒ悟リアレドモ信心無キ者ハ誹謗闍提ノ者也。(五八四頁)

信心は成佛の根本であつて、又成佛の全體であります。依て、四信五品抄には「信ノ一字ヲ詮ト
 ナス」と仰せ遊ばされてあります。開導上人の御教歌に、

信心は何になるぞと人間は、一寸先は闇の提灯

遠き未來は猶更でありますが、現世に於ても一寸先が闇のお互凡夫には何より大事なものは信心の
 光りであります。日月は世間の闇は照らしますが、人の心の闇は照らしません。信心の光りに依つて
 のみ現世安穩の歩みを運ぶことが出来るのであります。

二、信心の定義

疑ヒナキヲ信ト曰フ。これは天台大師の御判であります。法華經第五の卷に
 は、淨心ニ信敬シテ疑惑ヲ生ゼザル者ハ地獄餓鬼畜生ニ墮セスシテ、十方ノ佛前ニ生ゼン。又云く、
 若シ此經ニ於テ疑ヲ生ジテ信ゼザルモノハ即當ニ惡道ニ墮スベシとあります。信と疑とは相反す
 るものであることを知らなければなりません。然るに開導の御教歌に、

おのが身を君に任すを忠といひ、法にまかすを信といふなり

とありますが、身を任せる、萬事貴殿に任せる、といふ任せるは相手を疑はぬ故であります。もし
 も任せたが猶ほ疑があるといふならば、本當にまかせたのでなく餘儀なく任せたのであります。そ

んな任せ方は此の信の字には當てはまりません。所謂全部の信でなくてははいけません。

すこしでも疑ひあらば全分の信にあらねば墮獄なりけり（御教歌）

佛教では全部の信でなければ成佛は出来ないであります。開導聖人の御指南に、

當世ノ信者祈レバ御利益アルコトヲ知テ、懈怠ニ御罰アタルコトヲ知ラザル也。是ヲ知ラヌ間ハ半分ノ信者ト申スナリ。（開導要訣）

これは自分の都合のよき事は難有く信受するが、都合のわるい事は信受せぬものを指されたものであります。何事であれ、佛説を疑はぬが信心なれば、御指南のより食ひ、好き嫌ひなどは半信であります。現當二世心願満足思ひもよらぬ事であります。總ての御指南を信じて疑はぬ心、身も心もお任せする心こそ眞實の信心であります。

三、發信の方法

日隆聖人の一帖抄に、信心ハ事教ヨリ起ルと御示し下されて其次下に

記ノ九ニ云ク、未了者ノ爲ニ事ヲ以テ理ヲ顯ス云云。謂ク事ハ信ニ當ル、理ハ解ニ當ル。

とあります。未了者といふのはまだ學業が終了せぬといふ意味で未熟者といふのと同じであります。此の未了未熟のものに理を教へますととんでもない見當違ひの處で合點する。事實を以て教へなければ

ば第一、信を發しません。言ひ換へますと、論より證據でなければ信用しません。理窟は付け様ですからね、泥棒にも三分の理ありですからね。といふ風で、とても信じませぬ。宗祖大士も、

日蓮佛法ヲコ、ロミルニ道理ト證文トニハ過ギズ、又道理證文ヨリモ現證ニスギズ。（一二五五頁）

と御示し下されてあります。佛法は道理である。經文に依て此の道理を證顯してあるのであります。然し末法今日に於ては道理文證では人が發信しない。どうでも現實の證據——現證より外に方法は無いとの御意であります。これが事ヲ以テ理ヲ顯スのであります。事は信を發し、理は解を呼ぶ。明智の人は此の理に依て解を得るのですが、暗黒の愚人は却て誤解を招くのみであります。されば暗者は其分を守つて現證の事に基く御法を習ふべきであります。

諸事教とは何であるかと申しますと、法華經本門の御教へが即ち事教であります。門祖の御指南五帖抄に、

日蓮宗ニハ事ノ三世、事ノ本土ニ約シ、事相報佛ノ長壽ニ約シ云云。

とあります。想像の過去では無く事實の過去、本門壽量品に説き顯し給ひし五百塵點劫の過去を基本として論ずる三世が事の三世であります。此事の過去たる五百塵點劫の當初、釋迦牟尼佛が實修實

證とて、凡夫の時代に成佛の行を修した世界、これを本地の娑婆世界といふ。此即ち事の本土、理想の佛にあらぬ事實の相好を莊嚴し給ふ實佛、一言に申せば久遠實成の本佛は常住不滅の長壽を有せられます。此の事佛の説せ給ふ御教へこそ上に述ぶる所の事教であります。而して本門の事佛は何を説き給ひしやといふに、久遠實成といふ一事に外ならぬのであります。天台大師が、迹門ノ正意ハ實相ヲ顯スニ在リ、本門ノ正意ハ壽ノ長遠ヲ顯スと釋せられてあります。迹門は一切萬法の理體を如實に説顯すを目的とし、本門は久遠の如來の長壽を顯すを以て正意と致します。迹門は理、本門は事を説くといふことも、此の天台の御釋で伺ふことが出来るのであります。されば法華經第六の卷に於て如來の在世滅後の法華修行を説く時、

ソレ衆生有テ佛ノ壽命ノ長遠是ノ如クナルヲ聞テ、乃至一念ノ信解ヲ生ゼバ得ル所ノ功德、限量アル事ナシ。

事教とは過去五百塵點劫已來、常住にして滅せざる生身の如來を信ぜしめんより外は無いのであります。而して此の久遠本佛の盡未來際迄常住——生きてましますことを信する功德は實に廣大無邊にして到底之を測知することは出来ないであります。

四、何を信ずる

本門の三大秘法——本門本尊、本門戒壇、本門事行の南無妙法蓮華經——を信じ奉る。第一本門本尊は、久遠五百塵點劫のそのかみ實修實證得の大釋迦牟尼世尊こそ、過去にも滅せず未來にも生じ給はぬ、不生不滅、不老不死の覺體でまします。而も十方三世に分身示現して我等を救護し給ふことを信ず。法華經第二の卷に曰く、今此ノ三界ハ皆是レ我が有ナリ、其中ノ衆生ハ悉ク是レ吾子ナリ。而モ今此處、諸ノ患難多シ。唯ダ我一人ノミ能ク救護ヲナス。と、宗祖大士曰く、日本乃至一閻浮提一同ニ本門ノ教主釋尊ヲ本尊トスベシ云云。(二五〇九頁)

第二本門の戒壇、本佛釋尊の常にまします處即ち我等の滅罪生善の戒壇であります。法華經第六の卷に云く、我常ニ此ノ娑婆世界ニ在リテ説法教化ス云云。我等の住める世界こそ本佛常住の戒壇處であります。大恩教主ましますれば如何に極樂淨土たりとも信心修行して何の詮かありませう。幸ひなるかな我等の世界と釋迦佛の常住の世界とが同一であることを。

第三本門事行の南無妙法蓮華經、事行とは心で念じて居るばかりでない、口で唱へ身に行ふ實際修行の法なる故に事行といふ。而も我等の罪障を消滅し成佛の因を植ゑることの出来る法は此の南無妙法蓮華經より外にない事を信ず。教主釋尊も常に此の法を説て無數億の衆生を御助け遊ばされて御座

るのであります。法華經第七の卷如來神力品に云く、國アリ娑婆ト名ク、其中ニ佛イマス釋迦牟尼ト名ケ奉ル。今諸ノ菩薩摩訶薩ノ爲ニ、大乘教ノ妙法蓮華經菩薩法、佛所護念ト名クルヲ説キ給フ云云。

以上の三大秘法を約言致しますと、世には阿彌陀とか大日とか、或はエホバとか金の神とか種々雑多の神佛がありますが、我等を眞實に救護し賜はるは釋迦牟尼如來御一方のみであると信ず。我等の修行すべき所は、たゞ此の娑婆世界あるのみ、釋迦佛の御許にさへ居ればそれで一番安心であります。又持つべき法は唯だ妙法蓮華經の一法に限る、と。これ即ち三大秘法を信持することでありませぬ。

五、三箇は一秘 三大秘法と申せば三つが別々にあるやうに思ひますが、決してさうではなくて、三箇は一大秘法の南無妙法蓮華經にこもつてあるのであります。開基日隆聖人の弘經抄大意に云く、

此ノ三大秘法ヲ總在スレバ、妙法蓮華經ノ一大秘法ナリ。

佛法には總別といふ法門があります。宗祖大士の曾谷殿御返事に、

總別ノ二義アリ、總別ノ二義少モ相背ケバ成佛思ヒモヨラズ。輪廻生死ノ基タラン。(一五一四頁)

とあります。尤も是は付屬の上の總別で極めて大事な法門でありますが、其他總願別願、總釋別釋などあります。今三箇一秘の問題はやはり總別の法門であります。即ち三大秘法は別で、一大秘法は總であります。されば「三大秘法を總在すれば」と仰せられたのであります。かく申せば或は又、三大秘法の外に總在の妙法があるやうに考へる人があるかもしれませんが、決してさうではありません。三大秘法の中の一大秘法たる妙法蓮華經に即して三箇總在を論するのであります。隆聖直門、日忠聖人の仰に、

此ノ本尊ハ三大秘法ノ中ノ一箇ノ大法ナリ。三箇秘法ノ中ノ本門ノ本尊ヲ擧ゲテ、自餘ノ二箇ノ大法ヲ攝得スルナリ。

とあります。偕末法にて三箇秘法中の一大秘法と申すは、本門の肝心上行所傳の南無妙法蓮華經であります。此の妙法五字の中に教主釋尊を始め一切の本尊聖衆皆こもらせ給ふてあるのであります。されば南無妙法蓮華經と口唱し修行すれば三大秘法を信じ行じ奉ることになるのであります。

六、妙法は生身の佛 三箇が一箇にこもるとか、他の二箇を攝收するとか申すことは、猶ほ理觀であります。本門事觀の筋を以て申せば、妙法蓮華經こそ本佛の御名であると申さねばならぬので

あります。宗祖大士（御義口傳）曰く、

無作三身ノ寶號ヲ南無妙法蓮華經トイフナリ。

無作とは有作に對する語で、本來本有の義、無始本覺の義であります。三身とは佛に法身、報身、應身の別があります。此の法報應の三身も別の筋で申すことで、實は一體の如來の三面であります。一言に申せば久遠實成の本佛の寶號を南無妙法蓮華經といふのだとの御指南であります。開基日隆聖人は弘經抄に、人法一體ノ妙法蓮華經と申されてあります。人とは佛のこと、法とは眞理のことで、佛と法とが別々にあるものではない。本來本有として一體なものであるのです。その一體の根本の御名が南無妙法蓮華經と申し奉るのであります。佛立開導日扇上人はわかり易く、御教歌に

妙法のいきていませる御佛をたゞ文字なりと思ひけるかな

妙法の其體何と尋ねればこれぞまことの佛なりける

目に見ゆる妙法五字は生身の御佛にこそ其のしるしあれ

生きています妙と思ひて生きています法といふこと今しりにけり

生きてゐます敬ひをせばいつとなく妙法五字は佛なりけり

南無妙法蓮華經はたゞお經の名前だ、とのみ思ふてゐるのは大なる間違であります。生きて御座します久遠の本佛であります。一切の佛は皆久遠の如來の分身であると説かせ給ふ。されば一切の佛皆此の妙法の五字に還歸しますなり。従て妙法本尊安置の場所は我等の滅罪生善處であります。開導日扇上人の御教歌に、

妙法は生きていますといふことを疑はぬをば信者とぞいふ

信心宗の根本信は妙法本佛の信仰にあります。この信仰を有する人が信心宗の信者であります。總て他の信はこの根本信から發生するのであります。

第八 易行宗

一、易行道

仕易い修行といふ事が易行といふ義であります。此の易行といふ事は十住毘婆娑

論第五に、

佛法ニハ無量ノ門アリ、世間ノ道ニ難アリ易アリ、陸道ヲ歩行スルハ則チ苦シク、水道ニ船ニ乗レバ則チ樂シキガ如シ。菩薩モ亦是ノ如シ。或ハ勤行精進スルアリ。或ハ信ノ方便ヲ以テ易行ニシテ

疾ク阿惟越致ニ至ルモノアリ。

と説かれたのに依るもので、文中、阿惟越致といふのは不退轉の義であります。序でありますのでこの語の説明を加へて置きます。十住毘婆娑論第五に

阿惟越致ノ菩薩ハ心ヲ衆生ニ等シクシ、他ノ利養ヲ嫉マズ、法師ノ過ヲ説カズ、深妙ノ法ヲ信樂シテ、毀譽ニ異アルコトナシ。此等ノ五法ヲ具セバ阿耨多羅三藐三菩提ニ於テ退轉セズ、懈廢セズ。云云。

阿耨多羅三藐三菩提は無上道と譯し、佛の大覺の内容であります。上も無き道——最上の道に志して他の名聞利養を嫉まず、法師の過をいはす、自利に墮せず、懈らず精進するが即ち阿惟越致であります。此の位に達すれば最早退轉することがありませんので不退轉と譯されるのであります。法華經の第六に、彌勒菩薩が、我等、阿惟越致地ニ住スレドモ云云とありますから、彌勒菩薩位の菩薩だと思へば間違は無いのです。

偕、此の阿惟越致——不退轉の處まで到達するに二通りの道がある。一は難行、二は易行であります。恰も陸路歩行と、海路乗船との差で、解行は難行で、信行は易行であります。然るに淨土宗の祖、

曇鸞禪師がこの文によりて聖道門、淨土門の別を立て、法華經等の大乘經を聖道門とし、難行道となし、念佛の三部經を淨土門とし、易行道と定めたのであります。觀念觀法の法華經等は如何にも難行で、たゞ一向專念阿彌陀佛は易行に相違ありません。

併し難易を立つる事は決して假眞を別つものではない。如何に易修易行道でも方便教であつて見れば易行だとして少しも有難い事はありません。恰度世俗に、易カラウ悪カラウといふ語がありますが、念佛の三部經は則ちその部に屬するものであります。たゞ我法華經のみは安クテウマイ極上等請合の代物であります。これは私の語でない。法華經の序分無量義經、十功德品に

若シ衆生アリテ是ノ經ヲ聞クコトヲ得バ則チ大利トナス。所以ハ何ン。若シ修スレバ必ズ疾ク無上菩提ヲ成ズルコトヲ得ルナリ。若シ衆生アリテ聞クコトヲ得ザルモノハ、當ニ知ルベシ爲レ大利ヲ失ヘルナリ。無量無邊不可思議、阿僧祇劫ヲ過グレドモ終ニ無上菩提ヲ成ズルコトヲ得ズ。所以ハ何ン。菩提ノ大直道ヲ知ラザルガ故ニ、險徑ニ於テ留難多キガ故ナリ。

法華經を聞いて修行すれば疾く成佛するが、法華經以外では如何程長い間修行しても絶対に成佛は得られない、といふ御意であります。されば如何程易行の彌陀念佛でも遺憾乍ら問題とするに足らぬ

といふ事になります。

一、眞の易行

法華經第一、方便品に、若シ法ヲ聞クコトアランモノハ一トシテ成佛セザルコトナシと説かれてあります。法華經に御縁をつないだものはよし地獄の底に陥入るとも遂には必ず成佛することが出来るのであります。故に無一不成佛の一は「一人として」といふ義であります。誠に有難い事であります。されば此の御意に基きて、假使遍法界、斷善諸衆生、一聞法華經、決定成菩提の御釋があります。假使ヒ法界ニ遍ネキ斷善ノ諸ノ衆生モ、一タビ法華經ヲ聞ケバ決定シテ菩提ヲ成ズ、と訓じます。私は常に精靈の回向に此の文を唱へるのであります。どんな悪人でも妙法の經力にて必ず成佛が出来るとの難有い御文を口に誦じ心に念じ回向致しますれば、我等程の無智のもの、無戒不徳のもの、御回向も、必ずや精靈に酬いられるであらうことを信するからであります。

次に又、法華經第七、如來神力品に云く、我が滅度ノ後ニ於テコノ經ヲ受持スベシ。是人佛道ニ於テ決定シテ疑ヒアル事無シ。と佛滅後の末法に於て此の法華經を受持するのみで成佛疑ひなしとの御文實に有難い次第であります。宗祖大士は御義口傳に此文を釋して、

末法當今ハ此經ヲ受持スル一行バカリニシテ成佛スベシト定ムルナリ。

とあります。隨て門祖日隆聖人は弘經抄神力品の下に

此ノ我が滅度ノ後ニ於テ斯經ヲ受持スベシ。已下一行ノ文、末代我等ガ爲メアリガタキ尊文ナリ。

心腑ニ染メテ信ジ奉ルベキナリ。

と歎釋されてあります。朝夕たゞ口ずさみに誦し奉つてみますが、誠に尊い御文であることを知らねばなりません。

以上の諸文を拜して、法華經の御教が易行にして而も成佛疑ひなきものなるを知る事が出来ませう。實に易くてうまい醍醐味である事が首肯されませう。宗祖大士は此の易修易行の事を守護國家論に御説き遊ばされました。

法華經一部八卷ヲ執ラザレドモ是ノ經ヲ信ズル人ハ晝夜十二時ノ持經者也。口ニ讀經ノ聲ヲ出サザレドモ法華經ヲ信ズル者ハ一切經ヲ讀ム者也、佛ノ入滅ハ既ニ二千餘年ヲ經タリ。然リト雖法華經ヲ信ズル者ノ許ニ佛ノ音聲ヲ留メテ時々刻々念々ニ我が死セザル由ヲ聞カシムル也。心ニ一念三千ヲ觀ゼザレドモ、偏ク十方法界ヲ照ス者也。乃至是レ豈ニ權教ノ念佛者ノ臨終正念ヲ期シテ十念ノ念佛ヲ唱ヘント欲スル者ニ百千萬倍勝ル、之易行ニ非ズヤ。云云。

開基日隆聖人は四帖抄第三に

天台所立ノ法華宗ハ止觀ノ妙解、妙行ニ依テ宗旨ヲ立ツ是レ恐ラク難行道ナリ。日蓮所立ノ本門法華宗ト者末代相應ノ易行宗ナリ。能(化)所(化)俱ニ名字凡位ニ居シ定慧ヲ去ツテ信ヲ取リ、信心ヲ以テ宗旨ト爲ス。

天下第一の易行宗とは信心口唱の一行にて即身成佛の大果報を得る當講の事であります。御教歌に妙法は易修易行なり怠らず、口唱するのを持つとぞいふ

第九 經力宗

一、妙法經力 經力といふ語は妙法經力、もつと丁寧に云へば妙法蓮華經の力用といふことであります。元來妙法には任運自然に不可思議の力用を有してをります。而して其の力用がやがて現安後善の利益を一切衆生に蒙むらしむるのであります。宗祖大士曰く、

妙法五字ノ光明ニ照ラサレテ本有ノ尊形トナル、コレヲ本尊トハ申スナリ。云云。(一六二五頁)
一切衆生が妙法の功力によりて無始の罪障を消滅し、本來本有として具有する尊形を顯現する時、

本尊聖衆となる。これを成佛といひ、又本尊の中へ参るとも、或は寂光淨土へ参詣するとも申すのであります。總じて一切の利益一として經力の發動に非ざるものはありません。故に妙樂大師は記の十に、行淺功深シ。以テ顯經力ヲと釋せられました。この文は第四の卷法師品の「能ク竊カニ一人ノ爲メニモ法華經ノ乃至一句ヲ説カン。當ニ知ルベシ是人ハ如來ノ使ナリ」或は「能ク來世ニ於テ此經ヲ讀ミ持タンハ是レ眞ノ佛子」或は第五の卷の惡人提婆達多及び八歳の龍女の成佛、第六の卷の一念隨喜の功德は尙ほ八十年の布施の行に勝る、等の利益を指させるもので、何れも行者は初心始行者であるに拘らず、斯程の大利益に預る事全く妙法の經力によるものなることを歎釋されたのであります。傳教大師は秀句に於て、能化所化、俱ニ歷劫ナク、妙法ノ經力即身ニ成佛スと申されてあります。宗祖大士は上野殿御消息に、サレバ法華經ヲ持ツ人ハ、父ト母トノ恩ヲ報ズルナリ。我心ニハ報ズルト思ハネドモ此ノ經ノ力ニテ報ズルナリ。(一三六八)と御示し下されてあります。妙法の經力の尊さ難有さ誠に言語の道を斷つ所であります。

二、本有の妙理 經力は何れの處に存在し、如何なる理によりて發動するかといふことを伺ひ見るに、曩に下種宗の下に於いて述べました如く衆生の心こそ即ち佛種であり、やがては妙法蓮華經

であるのであります。宗祖御妙判に曰く

夫レ無始ノ生死ヲ留メテ此度決定シテ無上菩提ヲ證セント思ハマ、スベカラク衆生本有ノ妙理ヲ觀ズベシ。衆生本有ノ妙理ト者妙法蓮華經是レナリ。故ニ妙法蓮華經ト唱ヘ奉レバ衆生本有ノ妙理ヲ觀ズルニテアルナリ。(一一七)

開導上人の御教歌に

心性は彌陀や薬師の名にあらず南無妙法蓮華經なりけり

人皆の心の名ぞと驚は法、法華經とつぐるなるらん

この理を教ふるが教化で、又下種といふことであります。開導上人(十卷抄)示して曰く、

此御題目ハ我等胸内ノ寶藏ニテアルヲ今度指サシ教ヘサセ給ヒタルナリ。コレヲ下種トイフナリ。

尊貴極まりなき寶珠、妙法蓮華經は衆生の心中にましますのであります。されば衆生本有の妙理とも、甚深の奥藏とも申すのであります。既に妙法蓮華經が衆生の胸中にあるといふことが判れば經力の所在も自ら明瞭であります。即ち衆生の胸中より經力は發動する譯であります。然し乍ら此の本有の經力は捨て置ては發動致さぬのであります。法華經方便品には「佛種ハ縁ニ從テ起ル」と説き

給ふてあります。木中の花が春の縁に觸れて發生するのと同じで、經力も又縁をまつて發動するものであります。されば佛は常に法を説いて此の佛縁を結ばんと種々に方便し給ふのであります。第六の卷如來壽量品に

我レ佛ヲ得テヨリ來タ、經タル處ノ諸ノ劫數、無量百千萬、億載阿僧祇ナリ。常ニ法ヲ説テ無數億ノ衆生ヲ教化シテ佛道ニ入ラシム、シカシヨリ來タ無量劫ナリ。云云。

成佛已來實に無量無數劫の間常に教化に努力せられ、而も猶ほ及ばざるを歎き給ふ。

毎ニ自ラ是念ヲ作ス。何ヲ以テカ衆生ヲシテ無上道ニ入り、速ニ佛身ヲ成就スルコトヲ得セシメント。

これを古來より破地獄の文と唱へ、佛の大悲を謝し奉るのであります。かゝる御努力は徧に衆生奥藏の妙理を開發せしめん爲めの佛縁を結び給ふに外ならぬのであります。

三、内薰外護 外より結ぶ佛縁に對して内部より感應するを内薰と申します。宗祖大士曰く、

妙樂大師云ク、内薰ニ非ザルヨリハ何ゾ能ク悟ヲ生ゼン。故ニ知ヌ悟ヲ生ズル力、眞如ニ在リ。故ニ冥薰ヲ以テ外護ト爲ス也。(二五九)

如何に強烈なる力を加へても、内に感應する何物かゞ無ければ偉大なる力は決して發生するものではありません。外にある佛陀（大悟）と同一のもの（眞如の妙理）が衆生にあればこそ同性相引の理によりて感應するのであります。佛の悟りといふも眞如の妙理たる妙法蓮華經、衆生本有の妙理も亦妙法蓮華經でありますから、外から加へる力に内より感應するのであります。この外より加へる力を外熏といひ、又外護とも申すのであります。この内熏外護について開導上人は

口ニ任セテ唱題スル也。聲佛性ニ熏ズル即チ佛果ヲ得ル。乃至心内ニ佛顯レ下ヘバ諸天外ヨリ守護シ下フ。コレヲ内熏外護ト云也。（守護國家論註）

と示されてあります。外熏といへば先づ働きかける佛菩薩の願力で、外護といへば内熏を護る諸天の護法力と別たれますが、これは往いて一致することはいふ迄もありません。かく内外相應じて熏發する所のものが即ち經力であります。されば我等の成佛得益は自力に非ず、他力に非ず、佛力の加被に熏發せる經力成佛であります。

四、籠鳥の譬

内熏外護を宗祖大士は籠の鳥の譬を以て御教諭下されてあります。法華初心成佛抄に曰く、

譬バ籠ノ中ノ鳥鳴ケバ、空トブ鳥ノ呼バレテ集マルガ如シ。ソラ飛ブ鳥ノアツマレバ籠ノ中ノ鳥ノ出デントスルガ如シ。口ニ妙法ヲヨビ奉レバ我身ノ佛性モヨバレテ必顯ハレ給フ。梵王、帝釋ノ佛性ハヨバレテ我等ヲ守リ給フ。佛菩薩ノ佛性ハヨバレテ悦ビ給フ。云云。

籠の中の鳥は衆生己心所具の佛性であります。空飛ぶ鳥といふは釋迦多寶等の佛界を初め大梵天王、帝釋天王等の諸天善神等の佛性を指すのであります。籠の中の鳥が空飛ぶ鳥の音につれて鳴くのは佛の説法、或は菩薩、其他の善知識の御法門を聽聞して佛性を内熏せしめることであります。籠の中の鳥がしきりに鳴き立てるので空とぶ鳥が集まつて来るのは、衆生の佛性の内熏に感應する佛天の外護を譬へられたのであります。又空飛ぶ鳥の集まれば籠の中の鳥が出でんとするは、佛性内熏發動の姿でありまして、籠の中で羽根ばたきをしたり飛び廻らうとしたりするのは、煩惱の縛より解脱せんと努力する成佛の一步であります。是こそ現證の利益に譬ふべきであります。開導上人は

鳥ノ鳴ク時カゴノ戸ヒトリ開クガ妙ト申シ奉ルナリ。

と御示し遊ばされてあります。我等が南無妙と念じ唱ふる經力によりて、一分ひらくは一分の罪障消滅、二分ひらくは二分の罪障消滅であります。やがて一心口唱の念力によりて悉く開いた時こそは

罪障の籠全く消滅して、あら面白や法界寂光土にして、瑠璃を以て地となし金の繩を以て八の道を
 界へ、天より四種の花ふり、虚空に音楽聞え、常樂我淨の風にそよめき、寂光の虚空を自由自在に
 かけめぐる娛樂快樂の境界に住する身となるのであります。但し信心弱く口唱解れば籠の戸はいつま
 でも堅く閉ぢ、從てかゝる芽出度果報を感得することは出来ないであります。序を以て開導上人の
 如上の譬説に關する御指南を引證致します。

籠ノウチノ鳥ナケバ空飛ブ鳥ノヨバレテ集マル時ニ籠ノ内ノ鳥モ出ントスルガ如ク、我等ノ南無妙
 法蓮華經ト唱フレバ、釋尊ハ歡バセ給ヒ、諸ノ佛ト申ス佛ハ皆ヨロコバセ給ヒ、本化ノ菩薩ハ晝夜
 ニツキソヒ、諸天善神、鬼母十女ハ障礙ヲ拂ヒ、所願成就、弘通開運ヲ守ラセ給フ事、皆是レ眞
 實ナリト多寶佛、十方ノ諸佛ハ證據ニ立タセ給ヘリ。カ、ルウレシキコトハ候ハズ。籠トイフハ婆
 婆ナリ。カゴノ外ハ寂光ナリ。鳥ノ聲ハ本佛行因ノ要法ナリ。臨終ノ夕ニハ寂光虚空ノ大空ニ
 集リ給ヘル菩薩諸天ニイザナハレテ、飛行自在ノ身トナリ、六根清淨ヲ得テ大光明ヲ放チ、法界
 ヲ一目ニ照シミテ、本化ノ菩薩ノ御モトニ參リ、釋迦諸佛ニホメラレ候コト、佛眞實ノ法華經ニ
 説セ給ヘリ。アナカシコヤ。清風御判

五、力士の譬

迷ひの凡夫たる我等が彼の輝ける摩訶不思議の經力をどういふ譯で内薰し發動
 することが出来るものでありませう。天と地と、雪と墨との如く正反對のものを、どうして薰發する
 ことが出来るのでありませう。絶無の凡夫に如何にしても經力の發生を信することは出来ないのであ
 ります。然るに天台大師は止觀第五に於て「如是力」の下に左の如く述べられてあります。

王ノ力士ノ千萬ノ技能アルモ、病アルガ故ニ無シト謂フ。病差ユレバ用有ルガ如シ。心モ亦是ノ如
 シ。具ニ諸力アリ。煩惱ノ病ノ故ニ運動スルコト能ハズ。如實ニ之ヲ觀ズレバ一切力ヲ具ス。云々
 病める力士、身體ばかり大きい三歳の小兒にさへ向ふ力が無い。而し病さへ癒ゆれば大王の御抱
 へ力士ちや、千人力、萬人力、鬼神も恐れを懐く怪力が出るのであります。何處からそんな怪力が出
 るか、それはわからんが兎に角出ることは事實であります。それと同様に、我等凡夫の心は一寸先も
 わからぬ情け無いものであります。然しこれは病の爲に大力士が、腕もなへ腰も抜けてゐると同じ
 で、此の煩惱の病さへ治れば本來本有として備はる不可思議の力が發動するのであります。大悟徹底
 の眼を以て如實に觀察すれば共一切の力を具へて居ることを知ることが出来るのであります。

六、水火の譬

宗祖大士はこの事を水火の譬を以て御教示下されてあります。

人界所具ノ佛界ハ水中ノ火、火中ノ水、最モ信ジ難シ。然リト雖モ、龍火ハ水ヨリ出デ、龍水ハ火ヨリ生ズ。心得ラレザレドモ現證アレバ之ヲ用ユ。(九三三頁)

水中の火、火中の水、何れも信することの出来ないものではありませんが、現證があれば用ひない譯にはまゐりますまい。開導上人御教歌に

人界に佛界具する證據とは妙法口唱、利益現證

お互がお題目を口唱する丈で結構な御利益が戴けるといふのは、これは佛界——經力——を何れも具へて居るからであります。外護の働きかける力に導き出されて内薰、薰發するが故に僅の淺き修行で不思議の御利益が頂戴出来るのであります。されば妙樂大師が「行淺ク功深シ、以テ經力ヲ顯ス」と釋されたのであります。所詮は衆生本有の妙理は摩訶不思議であります。此の理を説ける法華經を難信難解といふ又むべなるかな。たゞ仰いで經の力を信するより外、言語の道斷ち、心行の滅する所であります。

第一〇 口 唱 宗

一、宗祖の御使命 宗祖大士云く、問フテ云ク天台傳教ノ弘通シ給ハザル正法アリヤ。答テ云ク有リ。求テ云ク何物ゾヤ。答テ云ク三アリ。末法ノ爲メニ佛留メ置キ給フ。迦葉、阿難等、馬鳴、龍樹等、天台、傳教等ノ弘通セサセ給ハザル正法ナリ。求メテ云ク其形貌如何。一ニハ日本乃至一閻浮提一同ニ本門ノ教主釋尊トスベシ。二ニハ本門ノ戒壇、三ニハ日本乃至漢土月氏一閻浮提ニ人毎ニ有智無智ヲキラハズ、一同ニ他事ヲステ、南無妙法蓮華經ト唱フベシ。此事未ダ弘マラズ。一閻浮提ノ内ニ佛滅後二千二百二十五年ガ間一人モ唱ヘズ。日蓮一人南無妙法蓮華經々々々々々ト聲モ惜マズ唱フルナリ。云云。(二五〇九頁)

宗祖大士の末法出現の三大御使命の一として、妙法口唱行が數へられてあります。此の口唱行は宗祖大士が末法の衆生に與へ給へる唯一無二の成佛道の修行であります。法華經讀誦行と併視すべきものではありません。次に開基の御指南を拜します。

二、開基の助釋 四帖抄に云く、當宗ノ意、信心ヲ以ツテ口ニ南無妙法蓮華經ト唱フ是レ宗旨

ナリ。乃至本門上行要付ノ師ヲバ唱導之首ト云ヒ、唱導之師トモ説ケリ。八ノ卷ニハ受持法華名者トモ、正法華ニハ宣持名號トモ、添品法華ニハ受持名者トモ云ヘリ。乃至日蓮大士ノ諸御抄ニハ一期生ノ間ノ御弘通ハ唯ダ是レ末法惡世ノ愚人ニ南無妙法蓮華經ヲ口唱セシムル是レ出世ノ御本懐ナリ。諫曉八幡抄ニ云ク、今日蓮ハ去ヌル建長五年癸丑四月二十八日ヨリ今年弘安三年庚辰十二月ニ至ルマデ二十八年ノ間、又他事ナシ。只ダ南無妙法蓮華經ノ七字五字ヲ日本國ノ一切衆生ノ口ニ入レントハゲム計ナリ。此即チ母ノ赤子ノ口ニ乳ヲ入レントハゲム慈悲ナリ。ト判ジ給ヘリ。此等ノ經釋御抄等、文義諍フ處ナク末法凡夫ノ惡人ニハ、本門ノ妙法蓮華經ヲ以テ口唱セシメテ下種ヲ成ズル事、本門流通ノ宗旨ナリト見ヘタリ。云云。

御文の御意は、末法弘通の大導師を第五の卷從地涌出品には、唱導ノ首を説き、或は唱導ノ師と説く、唱は口唱の唱で導師が街頭に立つて先づ口唱して大衆を導くのであります。天台傳教の如く、觀念の床に安坐し經文讀誦の攝受行を以て指導するのは格段の相違であります。又弘むる所の法に就ては、第八の卷陀羅尼品（一般に用ひられる羅什譯）には法華ノ名ヲ受持スルモノとあります。竺の法護が譯せし正法華經には、名號ヲ宣持スといひ、闍那崛多等が翻ぜし添品法華經には、名ヲ受持スと

ある。何れも法華經の體理を觀念するのではなく、法華の御名、即ち題目を持つことが説かれてあります。天台宗の如く、三昧に入つて悟得するとか一部八卷を文々句々に互りて讀誦するより外に、法華を持つ法は無いと思ふのは大變な考へ違ひであります。猶ほ開基聖人は宗祖大士の御書、諫曉八幡抄を御引き遊ばされて、宗祖御一期の御弘通は一切衆生に妙法を口唱せしむる事こそ出世の本懐なるべき旨を懇切に御示し下されてあります。蓮隆兩祖の御門下に於て誰か當宗は口唱宗なりといふに於て諍ふ者があらう。若しこの義に就て兎角の議論を立つるものあらば佛敵、祖敵の大罪人たるべきであります。

三、受持の方法

世間或は受持の方法を必しも口唱に限らず妙法五字の研究若しくは觀念などがよいと考へるものもあることと思ひますが、今妙法を弘通することは、してもよいしなくてもよいといふ如き閑事業でなく、成佛か墮獄かといふ危機に望んで居るのでありますから最善を盡さなくてはならぬのであります。然るに研究若しくは觀念は何れも行者の力丈けしかわからないのであります。偕て其行者の自力如何といふに、下根下機の衆生で、所謂惡人愚人の輩であります。恰も葦のすゐから天上のぞくが如く、大福長者の財産を赤手を以てつかみ取りする如きで、ホンの僅かの所得し

か得られないのであります。どうして墮獄を免れ、寂光參詣の權が得られませう。尤もわづかといふたのは與へて論ずる日のことで、奪つて之をいへば、謬より謬に入り墮獄の罪をこそ積み、到底成佛の道に一步も進み得らるゝものではありません。されば研究とか觀念とかいふことは成佛決定の上に力に随つて分々に應じて致すべきであると思ひます。今は兎に角、草露の命をもつ我等、何時無常の嵐が吹き寄するかも知れぬはかない身の上、大急ぎで必ず成佛するといふ方法を取らねばならぬのであります。

元來觀念觀法の行は既に像法時代に於て天台傳教等が修行された方法であります。所謂止觀修行、一心三觀であります。然るに宗祖大士は、正直ノ妙法ヲ止觀ト説キマギラカス故ニ、有ノマ、ノ妙法ナラザレバ帶權ノ法ニ似タリと論じ、一心三觀ニ勝ル、法如何と問を掲げて傳教大師の血脈を引、一言ノ妙法と答へ、此ノ一言ヲ聞クニ萬法茲ニ達シ一代ノ修多羅一言ニ含ム(一〇七二頁)と口唱の妙行を勸説されてあります。天台の觀法すら猶ほ「有ノマ、ノ妙法ナラズ」「帶權ノ法」となるのであります。況んや末代の下根下機の愚人の觀法がどうして正鵠を失はざることが出来ませう。而も天台の御時は熱益でありますから、既に下種を経て佛種を含んで居るのですからそれでよろしいのであ

りますが、末法今日の衆生は末下種の荒凡夫、なか／＼天台や傳教の修行を學ぶべき機根でありません。されば宗祖大士は、譬へば小船ニ財ヲ積デ海ヲ渡ルニ財ト俱ニ没スルガ如シと呵し、末代ノ愚人ヲ以テ南岳天台ノ二聖ニ同ズ、誤ノ中ノ誤ナリ(一五四頁)と警められてあります。妙法五字の研究や觀念修行などは目下の急務といふことは出来ません。然らば最善の方法如何。

四、ありのまゝの妙法

本佛のお悟り遊ばされた妙法蓮華經をありのまゝに受持する方法は口

唱の行より外絶對にありません。南無妙法蓮華經をそのまゝ法體を碎かず、色、形、意を變へず受持せんとせば南無妙法蓮華經と修行するより外無いではありませんか。少しでも手をつければ最早それはありのまゝではない。行者の私物となり終るのであります。この南無妙法蓮華經を南無妙法蓮華經と修行する丸呑込みの方法は信心であり口唱であります。開基日隆聖人の御指南に、

日蓮大士口唱ノ妙法蓮華經ハ乃至本果ノ釋尊ノ御口ヨリ唱へ出サレタル儘、更ニ色形意ヲ替エズ、ソノマ、ナル名字妙覺ノ妙法蓮華經ヲ上行ノ御口ニ移シ、上行ノ御口ヨリ日蓮ノ御口ニ移シ、高祖ノ御口ヨリ諸弟子ノ口ニ移スコト一器ノ水ヲ一器ニ寫スガ如ク云云。(四帖抄)

元來釋迦佛が印度へ出現遊ばされた頃は文字は無かつたのであります。恰度日本の大昔に語部があ

つて神代のことを語り傳へた如く、釋尊の御口から上行の御口へ面授口傳遊ばされたのであります。其他の一切の御經も皆諸弟子の耳にうけてこれを次の弟子へ口傳したものを、後世に文字が發達し來つた時に寫し取つたものであります。宗祖大士の御本尊の御題目は文字で顯し給ふ故に書顯でありませんが、これに對し佛在世の塔中の妙法を音顯の妙法など申す人もあります。されば口唱こそ妙法受持の根本的方法と申さねばなりません。開導上人の御教歌に

南無妙と唱ふる聲が本門の本尊なりと知るが成佛

意義甚深の御歌であります。拙き筆ではとても述ぶることは出来ません。然し音顯の妙法の尊貴にましますことは拜誦した丈で伺ふことが出来ようかと引證した次第であります。

五、無餘念の口唱

ありのまゝに本佛の妙法を口唱せんとせば無餘念の心地に住して口唱せねばなりません。聊かでも餘念を加へばそれが即ち雜念で、凡夫の思慮を加へたのでありますから最早ありのまゝの妙法で無いこととなります。開基聖人の御指南に、

我等一分ノ慧解無ク、但ダ口ニ任セテ南無妙法蓮華經ト唱へ、唱フル外餘念ナシ。餘念無ケレバ思慮無シ。思慮無ケレバ信心ナリ。信者餘念ナシ。餘念ナケレバ疑念ナシ。疑念無ケレバ己心自ラ

妙法ナリ。(私新抄)

餘念は即ち思慮、思慮は即ち疑念であります。疑ひなきが信心でありますから、餘念や思慮があつては信心になりません。されば無餘念は無思慮であり無疑心でありやがてまことの信心となるのであります。大論に信トハ澄淨ノ義ナリとありますが、無餘念無思慮こそ眞の澄み渡つた心地であります。此の澄み渡つた所に己心本具の妙法蓮華經が朝日の如くさし登るのであります。これを開基は「己心自ラ妙法ナリ」と御指南遊ばされたのであります。佛立開導の御教歌、題は信者の胸中、

雲もなくなぎたる空にうらくと豊さかのぼる朝日子の影

はれ渡りたる大空の朝日に輝き登る有様を信者の胸中とお詠み遊ばされたるは、この己心自ラ妙法ナリの御意と合致すると考へるのであります。

六、無餘念の工夫

無餘念に口唱するが極めて大切な事であるとすれば、如何にすればその無餘念の口唱が成就されるかといふに、一口にいへば一心不亂に口唱すればよいのであります。然しその一心不亂がなか／＼六つ箇敷ので難澁致すのであります。これに就て開導上人は受持即身成佛義に左の如く仰せられ遊ばしてあります。

吾祖曰ク、心ハ如何様ニ起ラウトモ口ニ南無妙法蓮華經ト唱フレバト云々。サレバ起ル心ハ私ナリ。此ノ私頼ムニ足ラズ。我口唱ノ聲ヲ便リニシテ、心ヲ聲バカリニセヨ。其時五字ト信心ト和合シテ、行者ノ一心御本尊ト顯ル、モノナリ。唯ダ我ト云フモノ、私ト云フモノ消エハテ、御題目バカリニナルコト肝要ナリ。云々。

此の御指南中、我ガ口唱ノ聲ヲ便リニシテ心ヲ聲バカリニセヨとあります一段が肝要であります。朝夕お看經の時、先づ我が口唱の聲を耳に入れるやうに努力するのであります。ナニがお看經は頂いてゐても店の者の話、臺所の女中のおしやべりなどを氣にして居るやうではとても無餘念は難かしい。そんな雑音を入れないやう我が口唱の聲で耳をふさぐ、否兩耳より口唱の聲を心の中につぎ込で、心の中に妙法の聲を一ぱい満たさねばならぬ。かくすることに依つて己心自ら妙法の佳境に達することが出来るのであります。しかしそれ丈では外より強き音響などありて心の中に雑音が侵入して來る場合は、太鼓や拍子木でこれを防ぐのであります。御教歌に、

餘念なくなるも太鼓の音のみかストントンンの拍子木もよし

ストントンは太鼓の調子で、拍子木はチヨン／＼であります。このチヨン／＼とストントンで

外來の雑音を防ぐ、かくして無餘念の口唱が出来るのであります。即ちありのまゝの妙法をありのままに受持することが出来るのであります。

七、三業受持

佛法修者は身、口、意の三業受持が肝心であります。三業受持の姿を宗祖大士

は佐渡の學匠、最蓮房への御返事の中に

我等末法濁世ニ於テ生ヲ南閻浮提大日本國ニウケ、忝モ諸佛之本懷タル南無妙法蓮華經ヲ、口ニ唱ヘ心ニ信ジ身ニ持テ手ニ翫ブ事、是偏ニ過去ノ宿習ナル歟。

我等既に一念の信心を以て口に題目を唱ふるが故に雑念を拂ふて妙法を心中に充滿す。從て自ら身業も妙法化せざるを得ないのであります。

開導の御教歌に、

妙法を唱ふる人は人も妙、その人のすむ處まで妙

無餘念に口唱する處、身意の二業自ら淨化す。これ口唱力による三業受持即身成佛の妙行であります。

八、法體折伏

口唱行は上に述べました如く妙法を有りの儘に受持する最勝の方法であります。

す。加之、自行即化他となる一舉兩得の妙行であります。即ち他の研究とか觀念とかの修行と殊なり、妙名口唱の音聲を直ちに多數の人々に聞かため、下種結縁を成する功德があります。

抑、佛法修行に攝受、折伏の二門があることは御存知の事と思ひますが、此の攝折に又各々化儀、法體の別あることを知らねばなりません。攝受の事は暫く措いて末法弘通の正意たる折伏に化儀、法體の二つがあることを少々申述べて見ませう。先づ法體の折伏とは、弘むる法それ自身の有する力——經力で折伏することでありませう。化儀の折伏とは弘むる人の力に隨て種々に説き聞かせて折伏するをいふのであります。例を擧げて申せば、念佛は無間に墮ます。なぜかといへば大恩教主釋尊を捨て、他方の彌陀に頼む不孝の罪があります。又諸經中の大王たる法華經を信ぜず其教に背くからである。是に經文を引證する等いろ／＼な攻め道具をならべる。これが化儀の折伏といふのであります。化儀は化導の儀式といふことで、換言すれば教化の方法といふ意味であります。法體の折伏では化儀の如く一々對手の邪義謗法を責めるのでなく、たゞ南無妙法蓮華經と口唱し奉る。その唱へ奉る妙法の、法の自體それ自身が折伏の威力を發するのであります。火は熱いぞ觸れるなといふのが化儀ならば、火自身に光りと物を焼く力がある、それを法體と申しませう。御教歌に、

世の人の耳に聞えて妙法を唱ふる聲を折伏といふ

南無妙と唱ふる聲が世の人の耳に聞えて折伏となる

何れも法體の折伏を詠まれた御歌であります。我等は何も知らないが口に任せて唱へ奉る題目が、それが一返一返他宗を折伏する言葉となる。誠に難有い事でありませう。されば化儀の折伏は出來ないがせめて法體の折伏をはげんで宗祖の御弘通の一助とも心掛けたいものであります。

九、長時の口唱

お題目を唱ふる事は誠に結構であるが、何もさう長い間唱へなくてもよいではないかといふ人がありますが、長時間唱へる理由が二つあります。第一は自行の爲め、第二は化他の爲めであります。

先づ自行の爲めと申しますと、曩に述べました無餘念の口唱を成するには、どうしても長時間唱へなければ罪障の穢れの多い凡夫では其境界に達する事が出來ないのであります。御指南中に、南無妙法蓮華經ト唱フル外餘念ナシ、或は心ヲ聲バカリニセヨ、又は私ト云フモノ消エハテ、御題目許リナルコト肝要ナリ等等示されてありますが、なか／＼その私が消えないのです。従て心をお題目許りにすることは容易ではありません。矢張店の者の話聲や臺所の香がやつて来る。其上、心中でいろ／＼

と考へ事をする。然し一本のお蠟やお線香のたつ間、それ等の雑念の起伏と戦ひ乍ら口唱して居りますと、次第々々に其雑念の数が少くなり、又弱つて来るのであります。宗祖大士が、

深ク信心ヲ發シテ日夜朝暮ニ又懈ラズ磨クベシ。何様ニシテ磨クベキヤ、只南無妙法蓮華經ト唱ヘ奉ルヲ是ヲ磨クト云フナリ。(二一八頁)

と御示し下されてあります。此の磨くといふ義と口唱を長時間するのは同一であります。一返や二返磨ても奇麗にはなりません。日夜朝暮に懈らずつとめてこそ始めて立派に磨き上げることが出来るのであります。

一〇、一目の羅

開基日隆聖人の御指南に云く、

下種ハ一返ノ口唱ニアリ。謂ク最初發心ノ授戒ノ時ノ一返口唱ノ題目ヲ、八識ノ心田ニ下シテ佛種トナシ、二返已去ノ題目ハ信心増進ノ爲ナリ。(弘經抄)

下種は最初發心の時の一返のお題目で成する。あとのお題目は信心増進の爲めであるとの御指南まことに難有い事でありませす。信心増進の爲めに一生汗否、生々世々唱へ続けねばなりません。處で此の御指南に就て大事な口傳がある。それは、一返ノ題目ハ下種トナラズ。然シ下種ハ一返ニアリ。と

いふ事です。丸で謎みたいな御文ですが、此に止觀の、一目ノ羅ハ鳥ヲ得ルコト能ハズ。鳥ヲ得ルコトハ羅ノ一目ノミ。といふ譬が引いてあります。譬を考へて見ると此の謎が解けて来るのであります。一目の羅といふ羅は鳥を捕へる網の事で、所謂カスミアミの事でありませす。極細の糸で作つてありますので、山に張つて置きますと小鳥の目に網といふことがわからぬ爲め、飛んで行かうとして首をつき込みませす。さうしてバタ／＼して居る處を隠れて居る人が出て行つて捕へるのであります。鳥が首を突込のは一つの羅の目で澤山です。二つにも三つにも突込まないのです。其を鳥ヲ得ル事ハ羅ノ一目ノミといふのであります。然しさうだからとて一目の羅を張つてある所へ首を持つて突込みに行く鳥がありませうか。もしあればよく／＼氣まぐれな、死に度うて仕方の無い鳥でありませう。恐らく澤山な目のある羅、それを羅とも知らずにツイ通り掛りに打つかつてヒヨいと首が引掛るといふ譯でありませう。是を一目ノ羅ハ鳥ヲ得ルコト能ハズと説かれたのであります。それと同様に、下種は一返のお題目で成するものであるが、末代の凡夫はなか／＼その一返のお題目が唱へられないのであります。即ち前に述べた無餘念の口唱が困難であるのです。されば長い間口唱を勵んで居りますと知らず識らず無餘念のお題目が唱へられるのであります。然るを一返や二返、或はごく短時間の中に

うまく無餘念にならうと工夫を凝らし苦心を重ねる人があるかもしれぬが、そんな無理をせず自然に其境界に達する様長時の口唱をせよ、眞の無餘念に住する事が出来るぞと開導上人は長い口唱を御教へ下さつたのであります。

一一、化他の爲め

長時の口唱を致す第二の目的は化他の爲めであります。既に前回申し述べました如く、口唱は自ら法體の折伏を成ずるものであります。一返の口唱は一返の折伏であり十返は十返の折伏となります。從て百返千返萬返と數を多く重ねる程折伏を澤山することになるのでありますから、口唱は多い程結構、長い程効果的と申さねばなりません。世間の廣告又は宣傳などに就て見ましても、なるべく大きく、なるべく長くする様に勉めて居るやうであります。

偕、口唱は如上の二つの目的の中、何れが主であるかと申しますと、經の御意より申せば第二の化他の爲めの口唱が肝心であるのであります。御教歌に

おのが身の爲めの口唱の萬返は法の心に叶はざりけり

自行の爲めに口唱すると功德は少い、化他の爲めに口唱すれば功德が莫大なのであります。なぜかと申せば元來此の御題目を經には教菩薩法とお説き遊ばされてあります。教菩薩法とは菩薩に教ふる

の法で、その菩薩は化他の爲めに身命を惜まぬ御方であります。經の御意に基いて修行するが當講の信心でありますから、化他の爲めに口唱することが大切であります。宗祖日蓮大士が日蓮ハ不輕ノ跡ヲ紹繼ス（一三三七頁）と仰せ遊ばされたあの不輕菩薩の唱へ遊ばされた二十四字を思ふて見ましてもよくわかることあります。

不輕菩薩は、我深敬汝等、不敢輕慢、所以者何、汝等皆行菩薩道、當得作佛の二十四字を唱へて一切の人々を禮拜なされたのであります。訓で讀めば、我深ク汝等ヲ敬フ敢テ輕慢セズ。所以者何ン。汝等皆菩薩の道ヲ行ジテ當ニ作佛スル事ヲ得ベシ。であります。御意を私に申して見ますと、諸君は皆佛性を有して居るのであるからこれをお磨きになれば成佛が出来るのです。もつと進めて申せば、諸君の有する佛性の爲めに菩薩道を勵み玉へ、といふ御折伏、御教化であります。そこで大勢の人には、ナニ生意氣なことをぬかず、無智の汝のいふことなんぞ誰が信するものがあらう。これでも喰へと杖木瓦石の雨を降らしたのであります。この二十四字の御折伏と宗祖大士の南無妙法蓮華經の七字とは文字は違つても意は同じであると仰せ遊ばされてあります。宗祖大士は顯佛未來記に、不輕菩薩ハ我深敬等ノ二十四字ヲ以テ彼土ニ廣宣流布シ、一國ノ杖木等ノ大難ヲ招ク。彼二十四字

ハ此五字ト其語殊ナリト雖モ其意之レ同ジ。(九七五頁)
又、教行證御書に、

彼ハ二十四字ノ下種、此ハ唯五字ナリ。(一一一六頁)

とも仰せ遊ばされてあります。彼此同意とすれば、彼二十四字は、折伏の御言葉でありますから、此の五字のお題目も矢張り御折伏の言葉でなくてはならぬのであります。即ち化他の爲めの口唱が御經の心に通ふものであり、又宗祖大士の御弘通の元意であることが伺はれるであります。

一一、二者の會通

自行の爲めの口唱と、化他の爲めの口唱と二通りあると申しましたが、こ

れは一往さう申さねばおわかりにくからうと思ひまして別けてお話し致したのでありますが、實はただ一つの目的の爲めの口唱であります。即ち化他の爲めの口唱こそ宗祖大士御弘通の本意であります。曩に口唱宗の劈頭に於て宗祖の御使命の項下に引證しました報恩抄を再拜して見ますと、

日本乃至漢土月氏一闍浮提ニ人毎ニ有智無智ヲキラハズ、一同ニ他事ヲ捨テ、南無妙法蓮華經ト唱フベシ。此事未ダ弘マラズ。一闍浮提ノ内ニ佛滅後二千二百二十五年ガ間一人モ唱ヘズ。日蓮一人南無妙法蓮華經、々々々々々々ト聲モ惜マズ唱フルナリ。云云。(一五〇九頁)

此の日蓮一人聲モ惜マズ唱フルといふ宗祖の口唱は決して自行の爲めではないのであります。これは開基の助釋の下の四帖抄中に引證せられある諫魔八幡抄の、

二十八年ノ間又他事ナシ、只ダ南無妙法蓮華經ノ七字五字ヲ日本國ノ一切衆生ノ口ニ入レントハゲム計ナリ。此即チ母ノ赤子ノ口ニ乳ヲ入レントハゲム慈悲也。(二〇三四頁)

と同意であります。即ち化他の爲めに聲も惜まず口唱されたのであります。此の宗祖大士の思召を相續して化他の爲めに口唱するのが眞の日蓮が弟子檀那であります。若し宗祖は化他の爲めの口唱であるが信者の我等はこれを信受して自行を全うすればよいのであると思ふ人があるならば、私は其人に敢て御尋ね致したい。然らば宗祖は折伏宗で我等は攝受宗か、宗祖は受難の御生涯であつたが信者は非受難でよいのか。如説修行抄の、誰カ經文ノ如ク行ジ給フ、誰人ニテマシマストモ諸經ハ無得道墮地獄ノ根源、法華經獨リ成佛ノ法ナリト呼バハリ給ヒテ諸宗ノ人法トモニ折伏シテ御覽ゼヨ、三類ノ強敵來ランコト疑ヒナシ、又云唱死云云の御指南は宗祖御一人の上の事か。決して左様ではありますまい。私は宗祖の御一生はそのまゝ末代信者の御手本と拜すべしと信するものであります。從て宗祖の教化折伏の口唱は我等弟子檀那がそのまゝ相續申上ぐべきであると斷言致しては

ばからぬものであります。開導の御教歌に

弘めんと思ふ心の一筋にお唱へ申せ妙法の五字

果して然らば自行の爲めといふことは全然無いかといふに決して左様ではありません。前に申しました自行即化他といふを逆に、化他即自行と頂くべきであります。前者は隨他意であります。後者こそ佛祖の御意そのまゝであります、得意に云く、

自分が唱へて自分が聞いて隨喜するのが化他即自行

唱ふる心地は廣く化他の爲だが、其聲を第一に自分が頂戴するのであります。この廣く他の爲めに唱ふる心地が尊い菩薩の回向心、衆生無邊誓願度となります。狭く自身の爲めと唱ふると二乗根性となり餓鬼心となるのであります。二乗根性や餓鬼心では成佛は愚か、今生諸天の守護も頂けないのであります。

第一 名字 即 宗

一、六 即

名字即宗を述ぶる爲めに暫く六即を叙する必要があると思ひます。是れ名字即と

は六即の第二に位するものなるが故であります。判りにくいのでせうが御辛抱を願ひます。

偕、六即とは、一、理即。二、名字即。三、觀行即。四、相似即。五、分眞即。六、究竟即であります。これは佛道修行の階梯を六つに分つたもので、行者はかういふ順序で進んで行くものであります。第一に理即とは、理は眞理、哲理の理で、佛敎の語では理性といふ。目に見ゆるを事といひ、見えざるものが理である。性とは不改の義とて、如何なる事があつても改め變ずることの無いもの。即ち絶対に變改せざるものにして、而も我等の目には見えないものが理性であります。萬物に皆此の理性を具へて居るのであります。此の絶対不變の理性を眞理といひ、實相といひ、如來藏といひ、佛性といひ、中道といひ、妙法といふのであります。但し其の絶対不變性は凡夫の目に映せずして、有爲轉變のものと總ての人は思つて居るのであります。恰も土塊につままれある金塊のやうなものであります。誰人も容易にこれを金なりと觀することが出来ないであります。併し鑑識ある技師は此の山に金を藏すといふことを發見するが如く、佛は有爲轉變の凡夫に即して佛性を有することを悟り、或は一切の國土は寂光淨土を覆へることを觀ぜられたのであります。即とは即佛と熟語せば解し易いのであります。即ち一切の人々は悉く理即佛、理の佛である。迷へる凡夫其まゝ理——目に見え

ざる佛の姿をつゝんで居ります。一切の草木國土は目には見えないが寂光淨土を覆ふて居ります。

第二に名字即、名字とは名は實名、字は假名、總じて事物の名稱をいふのであります。即ち前に述べた理性の名稱を始めて知るといふことで、久遠實成の佛の御發見である妙法蓮華經といふ寶號を聞き知る位であります。然し名稱のみを知つて未だ其實體に觸れないのであります。天台大師が譬を以て六即を示されてあります。こゝに一貧人がある。然るに此人の屋敷にとても尊い寶の藏があるが、主人は一向知らずに貧乏して困つてゐる。これが理即の凡夫であります。或時古老が来て告るには此の邊の地下に寶藏が埋もれてゐる。その寶藏さへ開けば富貴望みの儘である。君は決して貧乏人じやない、すこしも困る必要はないぞと教へてくれました。これが即ち名字即の位であります。この教を喜んで受ければ信者となり、やがて如我等無異の佛といふ大長者となることが出来ます。若しこれを疑ふて聞入れなければ遂に生涯貧窮で、或は餓死するかもしれせん。即ち墮獄必定であります。

第三は觀行即。觀じ行する位であります。前の名字即は聞いて信する文で、未だ其金塊の正體を觀するといふ處まで行かぬのであります。寶藏があるといふことは聞いたが未だ寶が手に入つたのではありません。此の觀行即では兎に角開いたといふ處より一步踏出すのであります。此邊だとい

ふので莽々と生え茂れる草木を切り倒し、薙ぎ倒して開拓に着手するが如く、一念三千の觀法を致すのであります。一度手に鎌を握り鋏を採れば直に寶藏が出現すると思ふものは無いでせう。其の如く三諦の理を觀じ始めたからとて其の諦理に達した譯ではありません。止觀の一に、未ダ理ニ契ハズト雖モ觀心息マズ、楞嚴中ニ射的ノ喩ノ如シ。是ヲ觀行菩提ト名クとあります。まだ悟に到達したのではないが、觀心の行は懈怠休廢しないのであります。恰も楞嚴經に説いた射的の喩の如きである。始は大きな的、次に小的次は錢をつるして射る。次は杖を射る。次は毛髮を射る、次に一毛を射る等かくすることが射的を學ぶといふことであると説いてありますが、大的を射得たからとて一毛が射られるものでありません。即ち未だ眞の射手とはいへません。然し次第に學べば遂には其處まで達することが出来ませう。名字即はかうして射るものだと聞かされた丈でありますが、今觀行即は兎に角弓矢をつがえて的に向つて射始めたのであります。當るか當らぬか、然し次第的に近づいて行くことは確であります。

第四は相似即であります。寶藏の喩で申せば土を掘り始めたのが觀行即、寶藏に近づいたのが相似即であります。相似とは近づくといふ義であります。小乗教の修行の位に七方便といふがあります

が、その中の煖法といふは煖は煖であたゝかいといふ事です、悟りの聖火に近づいたのであたらゝかとなつたといふ所から煖法といふ名がついてゐます。此と同じく大變近くなりました。もう一足といふ所まで近づいたのであります。無明の煩惱を破ることは出来ませんが、制伏することが出来ます。中道の妙理は悟れませんが、其の理にそむかぬ程度の行は出来ます。止観には法華經の、一切世間、治生産業、佛法に違背せずの文を引いて、生活の爲めに産業を営みても自然に經の眞意に順應して居る。わかり易くいへば未だ御法は持たぬが其言行は信者かと思はれるやうな具合であります。かゝる未信者は信者の似位と申すべきではありません。

第五分眞即。分證即とも申しますが、一分々眞理を證得する位であります。寶藏を開いて一二の寶が手に入つた所でありませぬ。毛の的はまだ當りませぬが大的的は當るやうになりました。此の位は初は發心住といふ位より四十一の位を経登つて等覺まであります。等覺とは妙覺に等しいといふ意味で、大悟の佛陀に隣りする、菩薩の最極位であります。これが一躍すれば即ち妙覺の位、究竟即であります。

第六究竟即。究竟は極まるといふ事で總べて目的を達した所であります。貧人は遂に完全に寶藏を所有して大福長者となつた。金的は見事射當てたのであります。元品の無明及び一切枝末の煩惱を斷盡し、宇宙の實相を達觀し、一切に於て自在を得、過去にも滅せず未來にも生ぜず、常寂光土に住するのであります。

二、爾前の佛は理即

名字即の名字とは、法華經の名字たる南無妙法蓮華經を指すのであります。されば名字即とは南無妙法蓮華經を持ち奉る分際であります。開基聖人の十三問答抄に云く、妙名ヲ唱フル故ニ名字即ト云フ云云とあります。從て妙名を信唱せざるものは未だ名字即到に至らざる理即の位に止まるものであることを知らねばなりません。宗祖大士云く、法華經ヨリ外ハ理即ノ凡夫也。彼ノ經々ノ佛菩薩ハ未ダ法華經ノ名字即ニ及バズ云云。(一六五四頁) 御義口傳に云く、六即配立ノ時ハ此ノ品ノ如來ハ理即ノ凡夫ナリ。頭ニ南無妙法蓮華經ヲ頂戴シ奉ル時、名字即ナリ。其ノ故ハ始メテ聞ク所ノ題目ナル故ナリ云云。佛すら猶ほ御題目を頂戴せざれば理即の位であります。されば我等如き惡人ながら、愚人ながら御題目受持の功德により、法華以前の佛菩薩に勝るゝのみならず、將又諸宗の元祖に勝出すること百千萬億倍なりと。宗祖大士、四信五品抄に遊ばされてあります。開導上人の歎詠に、

おのが身を嘆くにたらず、あひ難き御法に値ひし宿世思へば
金が無い、位が無い、學問が無いとて歎くに足らず。諸宗の祖師の頂上に住むお互であります。
喜んで喜びきれぬ程の芽出度い果報を頂いて居るのであります。

三、六郎一郎

名字即の位は實に尊い位であります。その故は本門に於ては六郎の名はありま
すが、それは皆名字即の中の階級であつて、名字即の外に位は無いのであります。換言すれば他の五
郎は皆名字即につゝまれて仕舞ふのであります。その事を六郎一郎と申します。附基聖人云く、當宗
ノ意、又名字即ヨリ外ニハ位ヲ置カズ云云。されば成佛と申しましても名字即を卒業することに外な
らぬのであります。私新抄には究竟即トハ名字即ヲ究竟スルナリと説き、四帖抄には末代極悪ノ人其
義趣ヲ解セズ。信力ヲ以テ自然ニ南無妙法蓮華經ト唱ヘ奉リ、經力ト信力ト和合シテ釋尊ノ因行果
滿ノ功德之ヲ備ヘ、名字體具ノ妙覺ニ至テ六ノ梯登ヲ超越シ即身ニ妙覺ニ至ル云云。名字體具の妙覺
といふは六郎が名字の一郎につゝまれてゐるから、名字即の中の究竟即といふ事になることを申され
たのであります。されば初め名字即に於て妙名を聞き、次第に、恰も梯子を一段々登つて——梯登
して——遂に階上に達する如く、究竟即に於て全く妙名を大悟するのであります。この最後に大悟す

るといふのは何を大悟するかといへば、最初名字即で頂いた妙名を大悟するのでありますから、結局
名字即の外には一足も出て居りませぬ。故に名字即を究竟するなりといはるのであります。譬を以
て申しますと、子供が親から一つの箱を貰つた。これは名字即であります。この子供は貰つた箱を研
究して蓋を取りました。これは觀行即の修行であります。蓋をあけて見ますと内に又蓋があります。
これは更に進んで相似即に至つたのであります。此の箱は不思議な構造になつてゐます。それは底が
二重にも三重にも、否々四十二重といふ仕掛になつてゐるのであります。蓋を取ると結構な品が入つ
て居る。これは分眞即であります。こりやうれしいと喜んで、底を叩くとそれが取れて又結構な品が
顯れる。又底を叩く又珍しい品が出る。次第々々に世にも稀なる品が現れます。最後に佛様といふ世
界中の最上、奇中の奇、尊中の尊者が出現されます。これが究竟即であります。併し、此の無上尊貴
の佛も茲に初めて有つたのでは無く、最初親から頂いた時にチャンとこもつてあつたのであります。
茲で子供は箱に對する完全なる知識を得ました。而して親の下さつた不可思議の箱を改めて押戴い
て、ホントニよい箱を下さつて難有う御座ますと御禮を申しました。此の最後に改めて御禮を申す時
は最初箱を頂いた時と同じ姿であります。最初に還るのです。即ち最後成佛の時名字即に還歸すると

釋されてあります。一寸六箇敷が開基日隆聖人の御指南を引證致します。

妙法蓮華經トハ妙覺究竟ノ法體ナルヲ名字即ニシテ之ヲ聞キ信知ス。乃至。觀行即ニテ妙法體内ノ三千ヲ取出シテ之ヲ觀ズ。分眞、究竟ト梯登シテ等覺ノ位ニシテ妙法體内ノ三千三觀圓滿シテ妙覺ニ至ルト思フテアレバ、本ノ名字即ノ惣持ノ妙悟、法體本地ノ南無妙法蓮華經ニ還歸スル也。是即チ等覺一轉、入于名字即ナルベシ。(私新抄)

等覺とは菩薩の最極で、妙覺の位に等しいといふ意味であります。即ちモ一歩進めば妙覺究竟の佛で眞に紙一重といふ處であります。六即の中には分眞即の事であります。此の等覺の菩薩は一轉すれば妙覺即ち究竟即に入る故に、等覺一轉入于妙覺といふ語があります。それが一般であるのに法華經の御教へから申せば、等覺の菩薩が成佛する時一轉して名字即の信心の位に入つて即身成佛を遂げるのであります。これは先々に申す如く、畢竟するに妙覺といふも名字即の中の事でありますから、成佛とは名字即の卒業といふ事であります。これは又、成佛とは信を以て成ずるものである、決して智慧で佛は得られないといふことを示して居ります。

四、元品の無明を斷す

名字即の位は六即の中の根本、本體でありますから、煩惱を斷盡する

にしても矢張り根本本體の煩惱を斷するのであります。この根本本體の煩惱を元品の無明といひます。この元品の無明は信の力でなくては斷することは出来ません。觀行即以下は用の無明を斷す。用の無明とは元品の無明の作用ハタラキをいひます。いはゞ枝末であります。根を切れば枝葉は自然に枯るゝ習ひ、故に未だ枝葉の煩惱ありと雖も、既に根本無明斷ち切れたれば體の佛果備はる。これを凡夫即佛といふのであります。

五、口唱正意

以上述べました事をもう少しやはらかに言ひ換へて見たいと思ひます。開導上人の御教歌に、

名字即、口唱正意の御門流、猫ニヤンとよりいはれざりけり

末法の凡夫は名字即が相當であります。名字即は開基聖人の御指南に、妙名ヲ唱フル故ニ名字即ト云フ云云。猫はニヤンとより外は何もいへません。お腹がすいたもニヤン、氣持が悪いもニヤン、嬉ししいもニヤン、ニヤンでもニヤンであります。お互凡夫は心に悟りを聞く智慧は素よりありません。さればとて身に行ふこともなか／＼六箇敷、たゞ口に南無妙法蓮華經と唱ふるだけならば、宗祖大士のお眞似は出来るのであります。されば大恩報謝にも南無妙法蓮華經。先祖の回向にも南無妙法蓮華經。

現世の御願ひにも南無妙法蓮華經。喜びにも南無妙法蓮華經。悲しきにも南無妙法蓮華經。何でもかでも御題目の一本鎗で突いてくつきまくるのが名字即宗の御信者であります。

六、佛の始め

天台大師は止觀の一に名字即を釋して云く、全ク佛法ニ識ラズ、牛羊ノ眼、方隅ヲ解セザルガ如シ。或ハ知識ニ從ヒ、或ハ經卷ニ從フ云云。又云く、但ダ名ヲ聞テ口ニ説クハ蟲ノ木ヲ食ミテ偶々字ヲナスガ如シ。是ノ蟲、是字非字ヲ知ラズ云云。牛や羊は東西南北の方向などはさつぱりわかりません。それと同じで名字即の位では佛法の方向は皆目わからないのであります。盲人の手引によつて道を進む事が出来るやうに、知識先覺によりて漸く佛の道をヨクヨクと歩くだけあります。されば彼の蟲が木を食ふてたま／＼字の形を作り得たとしても、それが是なる字か非なる字か何かかにかさつぱり知らんのと同様、お互の信心修行は誠に無智の信心で、爲すことは總て經力でありますから自分が預り知らぬも道理、開導上人が妙講一座に、行ヒハ牛羊ニ等シク智慧は彌猴ニ似テ三毒強盛ナリ。とお述べ遊ばされた通りであります。然し乍ら此の牛羊の如き愚なるお互も佛の御目より御覽になれば、これぞ地中の潜龍、襁褓につゝまれたる太子の如く實に尊貴なる價值を含めるものであります。

開導上人が名字即位と題して詠ぜられた御教歌に

何事もしらで唱ふる今の身ぞ三世の佛の始めなりける

信心のおこれば何もしらずとも知りたるよりもはるか勝れり

宗祖大士は、

問フ汝ノ弟子一分ノ解ナク但ダ一口ニ南無妙法蓮華經ト唱フル其位如何。答フ此人ハ但ダ爾前ノ圓人ニ超過スルノミニ非ズ。將タ又眞言等ノ諸宗ノ元祖等ニ勝出スルコト百千萬億倍ナリ。請フ國中ノ諸人、我が末弟等ヲ輕ズルコト勿レ云云。(一五四二頁)

まことに難有い身の上であります。されば教化の時、謗法拂の時此の御文を想起し、諸宗の祖師を折伏する見識を持ちたいものであります。

七、六と即と

然らば無智信心宗では、何もしらずとも入講のまゝで結構であるといふのかと尋ねられますと、そのまゝでよいとは申し兼ねるのであります。やはり無智宗でも信心増進といふことは忘れてはならぬのであります。開基日隆聖人が、この六即といふことを釋せられまして、

六故題目、信心増進、即故初後。唯一題目。

とお示し下されました。御意は、六即の六は階級を表し信心の増進を教へられたのである。六ノ故ニ題目信心増進ス。然し初心も後心も唯だ一つのお題目ぢや、決してお題目から離れてはならぬぞ。それは即ノ故ニ唯ダ一ノ題目ナリで、即といふ字は、體不二ノ義、故ニ名テ即ト爲スと妙樂大師が判ぜられてあります。初めも後も其の體は一つである。名字、觀行、相似、分眞、究竟と梯登すれば、名字と究竟とは麓と頂上の差があるから、どんなに違つて居るかもしれぬと思ふであらうが、初心も後心も六即一即で、名字即の中に包まれてをるのであるからたゞお題目より外は何も無いのである、といふのであります。然し此の御指南は同じ様に南無妙と唱ふる修行にも種々なる相違があるといふ事が教へられてあります。謗法の穢れなく唱ふるのと、少しまざつてゐるのと、或は大に謗法して唱へて居るのとの相違であります。此の謗法の穢れは信心が増進する毎に段々わかつて來るのであります。始めは札守りさへ拂へば謗法はすつかり無くなつたと思ひます。次に心の謗法、次に修行の上にと段々信心増進すれば謗法が目に見えて來ます。隨て段々改良々々と志すのであります。猶ほ先哲は、深ク六字ヲ識レバ上慢ヲ生ゼズ。委ク即字ヲ明カサバ自屈ヲ生ゼズとあります。よく味ふて頂きたいものであります。

八、信能く無明を破す

煩惱の根本は無明であります。其のまた根本を元品の無明と申すのであります。然るに此の元品の無明の體は「疑」であります。而して名字即に於ては經力を見て信を起す。此の信を起したるは「疑」を破つたからであります。「疑」があれば信は起らぬ。既に信を起す故に根本無明の體である「疑」が破られたのであります。これを開基聖人は名字即ニシテ體分ノ無明ヲ斷ズ（私新抄）と判ぜられてあります。又弘經抄には、

名字即ハ或從知識、或從經卷シテ、本門ノ題目ヲ聞イテ信心ヲ以テ口唱セシメ、法體ニ義味ヲ付ケズ。解行ニ下ラズ。佛意佛語ノマ、之ヲ信ジテ疑ヒナシ。疑ヒ是レ無明、無明既ニ斷ジ妙法蓮華經能障ノ元品ノ無明之ヲ斷ズ。是レ信位ノ即身成佛ナリ。

とも示し給ふ。名字即は信行でありますから解行ではないのであります。なぜかといふと解は自力であります。自力ではとても妙法の障りとなる能障の元品の無明は斷ずることは出来ません。これはたゞ信の力のみで能く破るのであります。信は經力を仰ぎ、決して妙法の法體に義味をつけて味ふといふ事を致しません。佛語を丸呑にして疑はぬ、其處に不可思議の力が發動するのであります。解は妙法の法體を碎くものでありますから經力は顯れません。たとへば人間の魂といふものは何處にあ

るか、解剖して探すやうなもので、如何程探しても見付かる事は絶対にありません。解行の解は解剖の解と同じであります、無疑曰信こそ大切であります。されば御教歌に
疑はで信するのみよ名字即ものしり顔になるのではなし

第二二 教彌實位彌下宗

一、二つの位彌下 教彌實位彌下の六字が當講教義上に重要な位置を占めてゐることは、左の一文を拜誦すれば思ひ半に過ぐるものがあります。

イヅク、イヅカタニテ御法門ヲストモ、教彌實位彌下ノ六字ト、信ノ一字ト、十二宗名トヲ體認シテ説カザレバ、當本門法華題目宗ノ御法門ニナラザルモノ也。(此三册)

開導上人御指南の在々所々に此の六字が充ち満ちて居るを感じます。恐らく三箇之中の御本尊は、此の教彌實位彌下の御意に基き給ふものであらうと推し奉る事程、大切な六字と信するのであります。

教彌實位彌下に就て二つに別けて説明致したいと思ひます。それは法の位彌下と、人の位彌下であります。

ります。法の位彌下は妙經の勝用を顯し、人の位彌下は本佛の大慈大悲を現すものであります。

二、法の位彌下 先づ法の位彌下を述べます。宗祖大士曰く、

四味三教ヨリ圓教ハ下機ヲ攝ス。爾前ノ圓教ヨリ法華經ハ下機ヲ攝ス。迹門ヨリ本門ハ機ヲ盡ス也。教彌實位彌下ノ六字ニ心ヲ留メテ案ズベシ(一五三九頁)

四味とは、天台大師が涅槃經の御意によりて一代聖教を五味に譬へられた。花嚴部が乳味、阿含部が酪味、方等部が生酥味、般若部が熟酥味、法華・涅槃を醍醐味と定められた。其中の前の四つを指して四味と申されたのであります。次に三教とは、これ又天台大師が一切經を内容から四つに別けられました。三藏教、通教、別教、圓教の中の前の藏、通、別をいふのであります。三藏教は小乗通、別二教は權大乘であります。圓教のみが實大乘であります。

偕、四味三教ヨリ圓教ハ下機ヲ攝スといふことは、同じ爾前(法華以前の義)の四味の經々中에서도藏、通、別、小乗權大乘は上機に止まり、實大乘の圓教は下機に迄成佛を許すといふことであります。矢張りたとへ法華以前でも圓教は圓教丈の價値はあるのであります。然し法華の圓教に比ぶればまだ、高い處に止まつて居るといふのが、爾前ノ圓教ヨリ法華經ハ下機ヲ攝スといふ事でありませぬ。

なぜ同く圓教であり乍らこの相違があるのかといへば、爾前の圓教には雜り氣があるが法華の圓教には少しも無い。所謂純圓一實であります。

茲で一寸お断りして置きたいのは教と經との相違点であります。經とはお經文の事で、教とは經文中に説き明かされた主義、教旨といふたやうなものであります。經は具體的で、教は抽象的であります。それで華嚴經は大乗圓頓の教へを説いて居るが又其の中に別教の法門が兼説されてあります。般若經にも圓教は説かれてありますが通別二教を帯びたものであります。それ故に華嚴、般若は圓教を説いてはゐますが經全體としては權教の分際を脱する事は出来ません。換言すれば圓教ではあり得るが圓經では無いのであります。更に譬を以ていへば山から掘り出した金塊は、金塊には相違は無いが其塊の中には銅や鐵が多分に含まれて居ります。之を精製して純金とする。純金は法華經で、爾前は掘出しのまゝの金塊の様なものであります。前後に亘りて金の成分には變りは無くとも價値を論ずる日には大變な差があるのであります。然しこれは猶ほ迹門法華經の上の法門であります。本門法華經の上にて説くときは到底共通點をさへ許すことは出来ないものであります。これ本門は圓の理を説かずして圓の事を現するものであるからであります。即ち迹門は諸法の實相を説くを以て主としますが

本門は久遠實成を現すのが目的であります。雜金と純金の相違は爾前經と迹門經との相違であります。本門は成分を殊にせる金剛石であるのであります。宗祖大士の治病抄に

法華經ニ又二經アリ。所謂迹門ト本門トナリ。本迹ノ相違ハ水火天地ノ違目ナリ。例セバ爾前ト法華經トノ違目ヨリモ猶相違アリ。爾前ト迹門トハ相違アリトイヘドモ相似ノ邊ニ有リヌベシ。乃至今本門ト迹門トハ教主已ニ久始ノカワリメ、百歳ノ翁ト一歳ノ幼子ノ如シ。弟子又水火ナリ。猶本迹ヲ混合スレバ水火ヲ辨ヘザル者也。云云。(二〇九九頁)

純と雜との差はあるが成分は同じ金であるといふ處が相似の邊といはるのであります。久始の變りめといふは本門は久遠實成であるに對し迹門は始覺權成の佛、實佛と權佛との天地の相違があるのであります。かゝる相違のある御經なれば迹門で許すよりも、もつと下根下機までも成佛得脱を成就せしむる妙不可思議の力が本門經にはあるといふことが、迹門ヨリ本門ハ機ヲ盡スナリの意であります。機を盡すとは最下の機根をもよく救助するの意であります。

三、五十二位

以上の四信五品抄の御文は天台大師の止觀に、

前教ノ其位ヲ高クスル所以ハ方便ノ説ナレバナリ。圓教ノ位下キハ眞實ノ説ナレバナリ。

の御文を妙樂大師受けて、

教彌々實ナレバ位彌々下レリ。教彌々權ナレバ位彌々高シ。故ニ通ハ八地ニ在リ、別ハ初地ニアリ、圓ハ初住ニアリ。

と注せられたのに依つたものであります。菩薩の修行の階梯に、最初が十信、次に十住、十行、十廻向、十地、等覺と五十一ありまして最後に妙覺の頂に達するのであります。然るに通ハ八地ニアリと申すは通教では四十八番目の八地(十地中の第八)で悟りを開き初める。別(教)は四十一番目の初地(十地中の最初)で成佛の線内に入るのであります。然るに圓教では十住の初めの初住の位(即ち初信より十一番目で眞理に觸るのであります。圓と別の差は三十、圓と通との隔りは三十七であります。經が勝れば勝れる程、菩薩の道を行じて早く悟りに入ることが出来ますが、劣れる經では遙に後るのであります。早いとは低い位といふ事でそれを位彌下といひ、後とは上の位といふことで、それを位彌高といふのであります。

四、六即と五十二位 前項に述べました五十二位と六即との配合を表示して、領解の一助に備へますと左の通りであります。



右の表に於て究竟即とは六即の最上位で、佛とか妙覺とかいふのと同じであります。分眞即は又分證即ともいふて、一分の眞理を證得する菩薩をいふので、圓教では初住(十住の初め)が此の分眞即の最初となつて居ります。別教はやゝ遅れて初地(十地の初め)から、通教は又遅れて八地から一分の眞理に觸れて行くのであります。教が權なれば悟りは遅れます。それを教彌權ナレバ位彌高シと釋し、教が實なれば實なる程早く悟りに入ることが出来るのを教彌實ナレバ位彌下ルと判ぜられ

たのであります。世間の例を以て申すと、證入は本科で、證入以前は豫科の様なものであります。いはゞ權教は豫科が永いといふ譯であります。然し本科に入つて直に卒業が出来れば結構同じであります。實は通教や別教では妙覺といふ名前はあつても眞の妙覺ではないのであります。通教で妙覺といふのを圓教の位に引直せばやつと十信（相似即）中の第七信に相當するのであります。十信では眞理に近付いたといふので相似の名を得て居るのであります。卒業處かまだ本科にさへ入つて居ないのであります。別教にしても妙覺の名はあるが、圓教の十行中の第二行に相當するので、圓教ではやつと二年生であります。圓教の佛は四十二品の無明を斷じて妙覺の位に昇るが、別教ではやつと十二品斷であるので、實は猶ほ三十品の無明が残つてゐるのであります。いはゞ圓教は四十二の問題を解決した卒業生であるが、別教は十二問題を解決したのみで猶ほ三十も問題を殘して居る譯であるから、卒業といふ名はあつても眞の卒業ではないのであります。されば初地又は八地といふ高い位で證入しても前途矢張り高遠であります。

五、經力にて先づ元品を斷ず

圓教は前の通別二教に比ぶれば、非常に低い位の初住で悟の圈内に入りますから教彌實位彌下の釋は圓教の獨占の様ですが、然し本門法華經となれば更に更に位

は低下して名字即の位に於て即身成佛の大果を得るのであります。即ち曩に名字即宗の項下に述べた如く、名字妙覺畢竟不二と申して、名字即中に妙覺がつままれて仕舞ふのであります。即ち分眞即に入つて四十二品目に斷盡する元品の無明を此の凡位の名字即に於て早くも斷ち切るのであります。元品の無明を斷盡すればそれが妙覺の佛であります。然るに名字即に於ては、妙法經力を頂いて信の一字で最後の元品の無明を切る事が出来ません。これ全く妙法經力の偉力の然らしむる處であります。されば教彌實位彌下の六字は全く本門法華經の爲めに設けられた御釋であると思はねばなりません。處で一寸注意せなければならぬ事は、我等名字即の凡人が元品の無明を切るといふのと、分眞即の菩薩が元品の無明を斷つとの相違點であります。最初下種の我等はいきなり元品無明を、經力信力にて斷つのであります。菩薩は、十住の初め一品の無明を斷じ一分の中道（眞理）を證得してより、一段一段と階梯を登るが如く、十住で十品の無明を斷じ、十行で又十品、十回向で又十品、十地で又十品、等覺で一品と都合四十一品の無明を斷じ、さて今度こそ最後の一品たる元品の無明を斷盡せんとするのであります。かく菩薩は枝末の無明より斷ずるに反し、我等はいきなり元品の無明を最先に斷盡するのであります。尤も菩薩も元品の無明は到底自力では斷ずる事は出来ません。そこで名字即

の專賣特許たる信の一字を戴いて斷盡するのであります。こゝを開基聖人は、等覺一轉して名字即に入ると判じ給ふのであります。

此の名字即に於て信の一字で元品の無明を斷つことに就ては名字即宗の下の六即一即以下の文、及び信能く無明を破すの項下を参照して下さい。

六、初心こそ經の御本意

以上の如く教が彌實なれば實なる程、行者は低い位で容易に得益するのであります。されば、初心で二世安穩の巨益に預るを信ずることは、經力の甚深微妙の力用を顯揚するものであります。之に反し、もし私如き初心、無智のものが、如何に妙法經力にても御利益は頂くことは出来ずまいと謙遜したならば、それは法華經の功力を輕しめ侮る事になるのであります。謗法の至りであります。この謙遜自屈のトップを切つた人は日本にては淨土宗の元祖法然であります。其著念佛往生要義集を見るに、

法華涅槃等ノ大乘經ヲ修行シテ佛ニナルニ何ノ難キコトカアラン。ソレニトリテ殊ニ法華經ハ三世ノ諸佛モコノ經ニヨリテ佛ニナリ、十方ノ如來モコノ經ニヨリテ正覺ヲトリ給フ。シカルニ法華經ナドヲ讀ミ奉ランニ何ノ不足カアラン。ガヤウニ申ス日ハマコトニサルベキ事ナレドモ、ワレ

等ガ器量ハコノ經ニ及バザルナリ。其故ハ法華ハ菩薩聲聞ヲ機トスル故ニ、ワレ等凡夫ハ叶フベカラズト思フベキナリ云云。

三世十方ノ佛モ此經ニヨリテ成佛スと法華經を高く擧げ、我等ノ器量ハコノ經ニ及バザルナリと機を下して法華を捨てたのは、此の教彌實位彌下といふ事を知らない爲めであるといはねばなりません。誠にお氣の毒な方と思ひます。妙樂大師は兼ねて此を知つて、恐ラクハ人謬テ解セル者ハ、初心ノ功德ノ大ナルコトヲ測ラズ、功ヲ上位ニ推シテ此ノ初心ヲ蔑ル。故ニ今彼ノ行淺ク功深キコトヲ示シテ以テ經力ヲ顯スと釋せられてあります。此の文義俱に明らかな御釋が目止まらなかつたのは重ね々々お氣の毒の至りであります。

七、人の位彌下

以上は經法の位彌下を述べたのであります。次に人の位彌下を説くことに致します。經法の位彌下は其經法の勝れたる事を示すもので、人の位彌下は聖衆の慈悲の勝れたることを顯すものであります。即ち末代低下の惡人を助けんが爲めに、本佛釋尊は本果妙の果位を去つて本因妙の因位、修行の位たる菩薩界に下り給ひ、上行菩薩となり、人界に示同して凡夫日蓮と現れ給ふ。これを從果向因上行體具、人界示同の尊形、末法應時の大導師、宗祖日蓮大菩薩と申し奉

るのであります。上行體具といふことは、上行菩薩の御體に十界を具へ給ふ。其十界中の人界といふことを上行體具の人界と申すのであります。從果向因といふもいはゞ釋尊體具の菩薩界に下らせられることを申すのであります。普通いふてゐる菩薩は凡夫が成佛を目ざして修行するものでこれを從因至果と申す。これは懈怠等の爲めに退轉して墮獄することがあります。從果向因の菩薩は絶對にその間違はありませぬ。又同様に人界でも地獄はひ上りの人間はこれから始めての佛道修行であります。上行體具の人界は根本は釋尊佛界でありますから、從果向因の菩薩といふべきであります。が、菩薩界と人界をしばらく區別を立てゝかく申すのであります。

以上の事は、必しも日蓮大士御一人に限るものではありません。所謂る十界の聖衆皆悉く然りであります。妙講一座の勸請段に、十界勸請、當位位彌下、案座名字ノ聖衆と遊ばしたるは即ちこれを指すのであります。此の當位位彌下、案座名字といふ文字は、これは當ノ位ヲ位彌下シテ名字(即ニ案座スル聖衆と讀みます。これ恐らく門祖日隆聖人の弘經抄の、
本地ノ釋尊 上行 總ジテ十法界ノ聖衆、當位ヲ位彌下シテ本因妙、名字信解ノ初隨喜ノ位ニ案座シテ、三密相應ノ御口ヲ以テ南無妙法蓮華經ト唱ヘ云云。

に基かれたものと拜するものであります。此の御文は申す迄もなく、御本尊の説明であります。御本尊は十界勸請であります。即ち十界の聖衆が何れも本地の尊貴なる位より末代凡愚の修行の位たる名字即ち垂下遊ばして、我等の手をとりて御導き下されるのであります。かけ離れて居りますと、迎も御導きは頂けませぬから、凡夫の位まで御下り遊ばされるのであります。夫を當位々彌下、案座名字ノ聖衆と申し奉るのであります。此の御指南を更にわかり易く御認め遊ばされてある私新抄を引證して領解の一助に致しませう。開基隆聖云く、

當宗ノ本尊ノ中央ニ南無妙法蓮華經ト安置シ奉ルハ、本地釋尊已下、木佛迹佛、本化迹化、人天四衆八部、皆悉ク本門壽量品ノ南無妙法蓮華經ヲ、名字即ノ位ニ住シテ口ニ唱ヘ奉ル云云。
御本尊の中央にお題目が大きく御認め遊ばされてあります。左右に釋迦多寶の二佛等、十界の聖衆が綺羅星の如く居ならび遊ばして御座る。これには重々の義がありますが、就中尊い一義は、十界の聖衆が凡夫の昔に立還て信心を以て南無妙法蓮華經と口唱して御座るのであります。今引證せる私新抄の次に

今日、靈山會上ノ佛菩薩、人天等顯本ハ、名字凡人ニ還テ下種ノ妙法蓮華經ヲ唱ヘ玉ヘリ云云。

を思ひ合せて拜すればよく御判りの事と思ひます。さて何故に凡夫の昔に立還て妙名を口唱遊ばすかといふに、これにも重々の義がありますが、所詮は末代の我等凡夫の信心口唱の御手本を示し給ふのであります。誠に有難事であります。されば我等が御本尊の南無妙法蓮華經に打向ひ、南無妙と受持口唱し奉ることは、當位位彌下の聖衆に立交り、同座して修行を致すのであります。戒壇は聖衆集會の處といふ義があります。即ち現身に寂光參拜し大利益に與つて居るのであります。宗祖大士云く、

サレバ我等が居住シテ一乘ヲ修行セン處ハ何レノ處ニテモ候ヘ常寂光ノ都タルベシ。我等ガ弟子檀那トナラン人ハ一歩モ行カズシテ天竺ノ靈山ヲ見、本有ノ寂光土ニ晝夜ニ往復シ給フ事ウレシトモ申ス計ナシ。(八四一頁)

此の御文の御意を開導上人は、

朝毎に唱へ死して寂光へ坐して居乍ら日參をせよ

と遊ばされてあります。御戒壇がけの御願に、事寂光と御認め遊ばされてあるのも同じ御意と拜する次第であります。

八、其病に同ず

佛菩薩の衆生救済の大慈大悲を涅槃經に嬰兒行、病行といふ譬を以て御説き遊ばされてあります。嬰兒行とはみどり兒にはみどり兒と同じになつて遊んで下さるといふ意であります。日忠聖人の御指南に、

孝經序ニ云ク、黃老彈ズル時ハ嬰兒立テ舞フト云ヘリ。意ハ老人ノ意面白クナケレドモ嬰兒ヲ舞ハセンガ爲メニ手ヲ拍テ老者ハヤス。故ニ嬰兒舞習フナリ。黃老ハ白髮ガ黄ニナル姿ナリ。其ノ如ク深位ノ大士ハ内證ハ中道王三昧ノ位ナレドモ、衆生利益ノ日ハ人天ニ同ジ、乃至。此嬰兒行トハ和光同塵ノ利益ナリ云云。(玄義略大綱)

其光明を和げ凡夫の塵に同ずるは聖者の慈悲であります。更に大慈大悲は凡夫の病に同ずるのであります。忠上云く、

佛菩薩ノ利益ノ時、罪重ノ衆生ヲ救ハンガ爲メニ假ニ衆生ニ同ジ、苦ヲ示シ罪ヲ作スヲ病行ト云フ。譬バ子ノ病スル時、病セザル親モ子ニ引レテ苦シムガ如シ。故ニ病行ト云フナリ。是レ深重ノ慈悲ノ體ナリ。大經ニ云ク、父母、病子ヲ念フガ如シト云ヘリ。或又云ク一切衆生異ノ苦ヲ受ク如來一人ノ苦ナリ云云。或經ニ云ク衆生未ダ癒ヘザレバ菩薩モ又未ダ癒ヘズト云云。(玄義略大綱)

釋尊上行菩薩の嬰兒行病行は上に述べた當位位彌下であります。尊貴の聖位より凡夫人間に生れ出で給ふ大慈大悲の極りであります。誠に有難い事であります。

第三 直入法華折伏宗

一、順化と逆化 凡そ法華經を説くに就て二通りあります。それは順化と逆化とであります。順化といふのは、先づ方便を説て衆生の機根を調へ、然して後最爲第一たる法華經を説くのであります。これは衆生の機根に順應して行く教化の方法であります。何となれば衆生は迷ひの愚人、而も説く所は佛の眞實の御覺りで難信難解の法華經でありますから、いきなり説いたではとても信すること出来ないのであります。否信しない計りか却て邪法なりと誹謗するは必然であります。そこで佛の大慈大悲を以て淺い教を以て誘引して次第に深い處へ至らしめるのであります。これを『三世諸佛説法之儀式』と御經に説かれてあります。法華經方便品に云く、

我、即チ自ら思惟スラク、若シ但ダ佛乘ヲ讚メバ、衆生苦ニ没在シテ是ノ法ヲ信ズルコト能ハズ。法ヲ破シテ信ゼザルガ故ニ、三惡道ニ墮チナン。我寧ロ法ヲ説カズシテ疾ク涅槃ニ入りナマン。

佛乘といふのは成佛の教といふことで法華經の事であります。佛が始め御覺を開かれた時に衆生の有様を観ぜられた處が、衆生根鈍で、而も欲に着して居るので、到底此の法華經を説たからとて信ずることは出来ない。却て三惡道につき落すやうなものである。寧ろ法を説かぬ方がましだらう。されば早く寂光へ還つて仕舞はうかと考へられた。

尋テ過去ノ佛ノ所行ノ方便力ヲ念フニ、我今得ル所ノ道モ亦三乘ヲ説クベシ云云。(方便品)

早く寂光へ還つた方がよいと考へたが、續て過去の佛方はどうなされたかと念じて見た所、何れも先づ方便を説て後に眞實が説かれてある。さうぢやなく我も當に過去の佛がなされた如く、又これから後の佛も必ずなされる如く、聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘の三つの教を説いて、やがて調機調養の曉こそ唯一の佛乘を説くであらうと決心遊ばされたのであります。この三乗が方便で、一乗こそ眞實なであります。此の一對三の事をよく心得て置いて頂きたい。諸經は方便、法華經獨り成佛の法だと威張るのではない。諸經は法華經を聞かしためが爲めの佛の大慈大悲の御苦心の結晶であります。法華經中に處々に此の一對三の御文があります。二三擧げて見ることに致します。

一、諸佛ハ方便力ヲ以テ、一佛乘ニ於テ分別シテ三ト説キ下フ。(方便品：譬喻品に同文あり)

- 二、十方佛土ノ中ニハ唯ダ一乗ノ法ノミアリテニモ無ク亦三モナシ。(方便品)
- 三、我等モ亦皆最妙第一ノ法ヲ得レドモ、諸ノ衆生類ノ爲メニ、分別シテ三乗ヲ説ク。(方便品)
- 四、初メ三乗ヲ説テ衆生ヲ引導シ、然シテ後ニ但ダ大乘ヲ以テ之ヲ度脱シ下フ。(譬諭品)
- 五、初メ三車ヲ以テ諸子ヲ誘引シ、然シテ後ニ但ダ大車ノ寶物ヲモツテ莊嚴シ、安穩第一ナルヲ與フ。

(譬諭品)

六、一乗ノ道ニ於テ宜シキニ從テ三ト説ク。(信解品)

七、諸佛ハ方便力ヲ於テ分別シテ三乗ヲ説キ下フ。唯一佛乘ノミ有リ息處ノ故ニニヲ説ク。(化城論品)

二、正像二時

以上は佛在世に約して述べたのでありますが佛滅後、正像二千年に於ても此の順化が許されてあります。法華經第七の卷、屬累品に云く、

未來世ニ於テ若シ善男子善女人アリテ如來ノ智慧ヲ信ゼン者ニハ、當ニ此ノ法華經ヲ演説シテ聞知スルコトヲ得セシムベシ。其人ヲシテ佛慧ヲ得セシメンガ爲ノ故ナリ。若シ衆生アリテ信受セザラシ者ニハ當ニ如來ノ餘ノ深法ノ中ニ於テ示教利喜スベシ。

如來ノ餘ノ深法といへば法華經を除く他の大乘經を指すのであります。佛慧といへば法華經以外

には無いのであります。然し難信難解の法なる故に誘引の爲めに餘の經を説くことが許されてあります。

三、直入法花

次に逆化に就て述べます。逆化とは前の順化に對していふ語であります。即ち初め方便、次に眞實といふ順序をふまず、いきなり眞實の法華經を説く故に逆化といふのであります。これを直入法華とも申すのであります。開基聖人の四帖抄に云く、

迹門流通四安樂ヲ順化ト名ケ、本門流通不輕行ヲ逆化ト云フ也。順化トハ前ニ云フ如ク、先ヅ方便ノ權ヲ説キ、次ニ法華眞實ヲ示スヲ順化ト云フ也。是レ迂廻漸次ノ修行ナリ。逆化ト云フハ順化ニ逆フ故ニ逆化ト云フ。故ニ方便ヲ設ケズ初ヨリ直ニ法華ヲ示ス。是レ初心始行の方法ナリ。故ニ知ヌ。是レ眞實ノ直入直行ノ修行弘通ナリ云云。

順化は迂廻の遠道、逆化は直入直行の近道であります。初心のものには遠廻りより近道の方がよろしいのであります。佛立開導上人の御教歌に

當宗は先はじめから本門の要法を説く不輕行也

釋迦佛は四十餘年方便をお説きなされ後八箇年に眞實の法華經を説き給ふたのであります。過去

の不輕菩薩は之れに違して逆化の方法を取り給ふたのであります。これを不輕行相、不輕行、不輕流などと申されてあります。日隆聖人云く、

昔ノ不輕ト今ノ日蓮計リハ一切衆生直入法華セシメ餘教方便ヲ用ヒズ。故ニ逆化ト云フ也。

四、逆化の法式

逆化に就て更に知つて置かねばならぬ事は修行の上にも順序が違つてゐるといふ事でありませぬ。即ち一般の修行は先づ自行であります。自行満つれば化他ありと釋されて、自分が出来てから他人に及ぼすのが順序であります。即ち順化の法式であります。然るに末法の逆化にはこれも逆に、先づ化他行であります。換言すれば化他即自行、化他することが自行であります。四帖抄の一に云く、

三世諸佛釋尊並ニ天台ハ先ヅ自行ヲ修シ、後ニ化他ヲ設クルナリ。是レ三世佛法通漫ノ順次ノ儀式ナリ。故ニ順化ト名ク。乃往過去ノ不輕大士ト末法ノ日蓮聖人トハ初メ化他折伏、後ハ自行攝受ナリ。是レ即チ逆化ノ法式ナリ。

何故に自行を先にせず化他行を先にするのでせうか。これは極めて重大な問題であります。大に考究する必要がある。

五、一念三千の佛

何故に自行を先にせず化他を先にするのかといふに、當宗の骨目は一念三千の佛であるが故であります。一念三千といふことは私の筆では述べ難い深奥の義であります。大聖釋迦牟尼世尊の出世の本懐、法華經の肝心骨髓であるのでありますから、到底筆紙の及ぶ所でありませぬ。宗祖大士は、

一念三千コソ佛ニナルベキ道ト見ユレ。此一念三千モ我等一分ノ慧解モナシ。而レドモ一代經々ノ中ニハ此經バカリ一念三千ノ玉ヲ懷ケリ。餘經ノ理ハ玉ニ似タル黃石ナリ、沙ヲシボルニ油ナク石女ニ子ナキガ如シ云々。(八一九頁)

又云く、一念三千ノ法門ハ但法華經ノ本門壽量品ノ文ノ底ニ沈メタリ云云(七五二頁)ともお述べ遊ばされてあります。誠に一念三千より外に成佛の大道は無いのであります。茲を以て我宗祖大士此の一念三千によりて南無妙法蓮華經の大曼陀羅を顯現遊ばされたのであります。宗祖大士云く、一念三千ノ法門ヲフリスマキタタルハ大曼陀羅ナリ。當世ノ習ヒソコナイノ學者夢ニモシラザル法門ナリ(七四六頁)と。妙法五字の大本尊こそ一念三千の極理を圖顯し給ふ處であります。

以上で一念三千といふことはどんなに大事な法門であるかといふことは略ぼおわかりになつたと思

ひます。扱一念三千の佛なるが故に、なぜ化他行を先にせねばならぬかと申すに、宗祖御指南に、一念三千ノ佛ト申スハ法界ノ成佛ト云フ事ニテ候ゾ(四一四頁)とあります。此の法界の成佛といふことをよく案すれば一念三千の理も多少わかれると思ふのであります。

六、法界の成佛

法界と申すは、十方法界といふことで、此の娑婆を中心として東西南北の四方に、乾、坤、艮、巽の四隅を加へて八方となり、それに上の世界下の世界を數へて十方法界となる譯であります、結極一切の世界といふことであります。此の一切の世界が成佛することが法界の成佛で、やがて一念三千の佛であります。一念三千を字義で申せば、虫けらでも一片の心さへあれば其心には上は佛、菩薩を始め聲聞、緣覺、天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄の十界が具はつてゐる。恰も一滴の腐水に幾萬かのバイキンといふ生類が棲息して居るとよく似てゐるのであります。而も此の蟲けらの心(畜生界)にかく十界が具はつてゐる様に、他の十界の各々にやはり各々他の十界を具へて居るのであります。これを十界互具と申すのであります。十界が互に他の十界を具へてゐるといふ義であります。宗祖大士云く、一念三千八十界互具ヨリ始マレリ(七五二頁)と。此の十界互具は10×10=100 即ち百界となります。(百界互具すれば萬界となり萬界互具すれば億界)となり無限に展大する故に先づ百界にて止む) 此百界に各々相如、

性如、體如、力如、作如、因如、緣如、果如、報如、本末究竟如の十如を具へて居るから、如の上から數ふれば千如となる。千如に又各々五陰世間、衆生世間、國土世間が具はつてあるので世間の上では三千世間といふ數となります。而も此三千種の世間が一念の心に具はるからこれを一念三千と名けられたのであります。これは必しも三千世間には限らないのであります。曩に割注した如く、十界互具を許せば百界互具も千界互具も、萬界、億界の互具も許さねばなりません。たゞ一切の事物はかく互に具へ合ふて居るもので、決して單獨に存立するもので無いことを示されたものと思ひます。又虫は永久に虫ではなく人間にもなり佛にもなるものであるといふ内面の理を説いたものであります。又生けるものゝみの互具互融に止まらず一切の植物、國土までも生物と互具し融合するものなることを示されたものであると思ひます。この一切の物を總稱して法界と呼び或は十方法界ともいふのであります。故に法界とは外形に従つた名で、一念三千は内面關係を述べた語であるといへませう。されば一念三千の佛、法界の成佛とは宇宙間ありとあらゆる一切の「モノ」の淨化、融合に名けた佛教術語であるのです。

七、衆生無邊誓願度

かく述べ來りますと宇宙三千の群象何れか自己の一面ならざるものはな

いのであります。悉く自己の姿の一部分であります。従て如何なる畜類と雖もこれを毀けるは即ち自己を毀けるのであります。之が保護を致すは即ち自己を保護するものであります。茲を以て一草一木一礫一塵たりともこれを徒らに用ゐることの無いやうに努めねばなりません。所謂無益の殺生を禁ずる所以であります。尤も藥王菩薩は佛の恩を酬いる爲め我が兩臂を焼て燈として供養したとありますから、有益に用ゐる事はやがて自己完成の一助であると解することが出来ます。

楮一切のものが悉く自己であるといふ哲理の上に立つて、つらく一切衆生を眺めたのが教主釋尊であります。これを法華經に、今此ノ三界ハ皆是レ我有ナリ。其中ノ衆生悉ク吾子ナリ。と、依て、其の喜憂は悉く釋尊の喜憂であります。故に而ルニ今此ノ處諸ノ患難多シ。唯我一人ノミ能ク救護ヲ爲スト。どうしても捨て置けぬは我が頸かせ、手かせの子供の身の上の事でもあります。娑婆往來八千度といふ御苦勞は實に止むを得ぬものであります。然しこれは釋尊御一人の上だけではありません。總て此の一念三千を自覺せるものゝ悉くが爲さねばならぬ苦勞であるのであります。宗祖大士云く、

涅槃經ニ云ク、一切衆生異ノ苦ヲ受ク 悉ク是レ如來一人ノ苦ナリ等云云、日蓮云ク一切衆生ノ一

切ノ苦ヲ受クルハ 悉ク是レ日蓮一人ノ苦ト申スベシ。(二〇三八頁)

と。豈日蓮御一人の苦のみならんや。日蓮が弟子檀那一同の苦でなければなりません。故に衆生無邊誓願度の大願を立て、朝夕に、

願クバ生々世々菩薩ノ道ヲ行ジ、無邊ノ衆生ヲ度シテ永ク退轉ナカラシメテ念フモノナリ。(妙講一座)

と言上するのであります。どうです化他を先にせねばならぬわけが少しはおわかりになりましたでせう。

八、進歩の近道

宇宙法界の三千の萬衆 悉く畢竟自己であるとすれば其の中心である自分自身を第一に完成確立して他に及ぼすが順序ではないか。自行滿れば必ず化他ありとの御釋もある。自身は近く而も狭い、尤も化し易い。之に反し他の一切は遠くして廣い。なか／＼化し難いのである。自他が同一體のものであれば化他即自行を、逆に自行即化他と行じてよい譯ではないか、などと考へられるのであります。

この考方は決して無理とは思ひません。然しお互末法の衆生、即ち惡人愚人はどうも自分といふ

ものに餘りに執着が激しいので、迎も自身を第一にといふやり方をすれば一方に偏して正道を踏む事が出来ないであります。そこで大慈大悲を以て自分を捨て、自分を救ふ道を教へ下さつたのが化他即自行の御法門であります。どうも悪人悪人は自分さへよければ他はどうでもよいといふ心が起り易い。それでは結極自分の畑を荒すことになるのであるから急がば廻れの譬の如く、他を教化して行くことが自分を正しく磨く所以となるのであります。嘗て某小學校の受持訓導に、私の子供を如何にせば進歩せしむる事が出来るかを尋ねた所、一個の生徒を善くしようとするよりも一級全體の空氣をよくする事に御心配を願ひたい。それが一番の近道でありますと答へられた。成程それに違ひないと感じました。自分の子供の尻を叩いて他を凌ぐ様にすれば或は成績はよくなりませう。然し他と俱に進みたいといふ美德は毀けられるは必定であります。此の世の中が悪くなるのは一に他に勝らうといふ競争心の惡的半面の影響が甚だ多いのであります。他に勝らんとするはよい、然し其の爲に隠れて事を進める。或は他を毀けようとする等、其他種々の不正手段を講ずるに至るのであります。是は智識の進歩は得られますが、徳風は害されるのであります。然し智育の方でも天才は別ですが大多數の人は全體の空氣に依て支配されるものであります。境遇が人を造るといふが如きは正にそれでありま

す。この一例は僅か小學校の一級一室の話であります。これはやがて佛になる道、寂光淨土開顯の道を暗示するものであると信じます。即ち法界といふ廣い一團を淨化することが、即ち自己を成佛せしむる最良の方法なのであります。迂回の様に見えて却て早い成佛の道であります。

九、不輕の先證

我が宗祖大士が、日蓮は不輕の後を慕ふものであると仰せ遊ばされた、此の不輕菩薩の御流義は矢張り化他即自行でありました。不輕品に云く、

若シ我、宿世ニ於テ此經ヲ受持シ讀誦シ、他人ノ爲メニ説カズンバ、疾ク阿耨多羅三藐三菩提ヲ得ルコト能ハザラン。我、先佛ノ所ニ於テ此經ヲ受持シ讀誦シ、人ノ爲メニ説キシガ故ニ、疾ク阿耨多羅三藐三菩提ヲ得タリ。

他人の爲めに説かずんば疾く佛道を成ずることは出来なかつたであらう。他人の爲めに説いたから、かくも早く成佛が出来たのであると繰返して説かれてあります。猶滅後の衆生に此のことを御勸め下されて、

是ノ故ニ行者、佛ノ滅後ニ於テ、是ノ如キノ經ヲ聞テ疑惑ヲ生ズルコト勿レ。應ニ一心ニ廣ク此經ヲ説クベシ。世々ニ佛ニ値ヒ疾ク佛道ヲ成ゼン。

と懇切に速成就佛身の秘訣を示されてあります。開基日隆聖人の御指南に、

不輕ハ是レ大悲闍提ノ菩薩ナリ。故ニ自行ヲ目ニ懸ケズ先ツ輕毀ノ謗者ヲ化ス。(四帖抄)

とあります。大悲闍提とは大悲の菩薩に名けた語であります。闍提は具に一闍提といふ。成佛不能のものをいふのであります。然し惡の一闍提は成佛の善根を破壊するが故に成佛不能といはるゝのであります。善の一闍提は衆生が成佛し畢るまでは成佛せぬといふ誓願を立てた菩薩であります。此の二者は天地の差があるといはねばなりません。かく一切衆生を教化し盡くす迄は自身の事は願はぬといふのが不輕流の修行、即ち我等の學ばねばならぬ所のお手本であります。而も此の自己の利益を目にかけず、ひたすら化他の爲めに精進する所に、自己を速に完成する道が開けるのであります。佛立開導の御教句に、

身を捨て、浮ぶ瀬もあり法の水

よろこんで捨てたる命拾ふたり

一〇、下種益

逆化の中、化他を先にするといふ事は略述しました。次に何故に三世諸佛説法の儀式を逆に、いきなり、實大乘の妙法蓮華經を説くのかといふに、これは下種益であるからであ

ります。三世の諸佛及び正法像法の時、熟益か脱益であります。天台大師(文句)云く、

問フ釋迦出世シテ踰躑シテ説カズ。常不輕一タビ見テ造次ニシテ言フハ何ゾヤ。答本ト已ニ善有リ。

釋迦小ヲ以テ之ヲ將護ス。本未ダ善有ラズ。不輕大ヲ以テ之ヲ強毒ス云云。

本已有善と本未有善の相違であります。今は迷へる衆生であるが、久遠の本に於て已に大善たる妙法五字が下種されてある者を本已有善の衆生といふ。之等は其の種子を失はしめざる爲めに、即ち種子を將護する爲めに順次に誘導するのであります。種子を下せる田畑はおもむろに雜草を抜いて其の小芽を毀けない様に注意する。これを佛法にて熟益といふ。いよ／＼果實を結ばせる一段となれば吹く風にも心を痛める程大切に取扱ふ。佛法にていよ／＼成佛の域に入るを脱益といふ。煩惱から解けて脱け出す義であります。故に釋迦ハ踰躑シテ説カズと釋す。踰躑とは「タメラヒテ進マザル」であります。四十餘年もためらふて法華を説かなかつた事を指すのであります。然るに不輕菩薩は造次に之を説く、造次とは倉卒の義、アワツ、ニワカの意味を含んで居ります。僧であれ俗であれ遇ふ所の人に直に最上法華の法門を説く。これ何故かといふに本未有善の衆生なるが故であります。本未ダ善アラズ——根本善の佛種子が下しでない、荒地であります。五月の田植の時と同じで、どん／＼鋤

き倒す。雑草を一本々々抜く様な事は致しません。即ち折伏を加へ直に法華の肝心を説く。これを下種益と申します。今末法の衆生は何れも不輕大士の時代と同じで、本未有善の者ばかり集まつて居るのであります。かゝる衆生に對し何より一番先に施さねばならぬものは佛種であります。若し佛種無くんば諸の施設悉く徒事となりませう。故に熱脱の儀に違して、第一に實大乘教たる妙法五字を説き與へるのであります。

一一、折伏の事

上來述べました逆化が即ち折伏であります。字義で申せば折り伏せる事で、三毒の心を折り伏せて妙法五字を頂戴せしめるのが本義であります。而も大慈大悲の心に住して之を行ふのであります。開導上人の御教歌に

折伏は慈悲より出づる教なり我身の罪も遂に滅びん

折伏は人を憎まず高ぶらずあはれむ事ぞ祖師の御本意

逆化に對して順化といふ言葉があるやうに、折伏にも攝受といふ對語があります。攝受とは攝は攝取不捨などの語があるやうに、オサメル、引ク、養フなどの義があります。受は受納の義、他に對して柔軟で其の惡を説かず、引き受けて置いて靜に善に住せしむるやり方であります。折伏の方は惡を呵し

惡を破りて惡を離れしむるやり方であります。天台大師云く、

夫レ佛ニ兩説アリ。一ハ攝ニハ折。安樂行ノ長短ヲ稱セザル是レ攝ノ義。大經ノ刀杖ヲ執持シ乃至

首ヲ斬ル是レ折ノ義。與奪途ヲ殊ニスレドモ俱ニ利益セシム。(止觀十)

法華經安樂行品に、他人の過を説かざれ、他人の好惡長短を説かざれ等とあるのが攝受門であります。涅槃經(大經ともいふ)に正法を護持する爲めに刀杖を帯び、乃至正法を壞らんとするもの、首を斬れといふが如きは折伏であります。兩者天地の差はありますが、而もこれが表裏して衆生を救ふことが出来るものであります。宗祖大士云く、

夫レ攝受折伏ト申ス法門ハ水火ノ如シ。火ハ水ヲイトフ。水ハ火ヲフセグ。攝受ノモノハ折伏ヲ笑

フ。折伏ノ者ハ攝受ヲ悲シム。無智惡人ノ國土ニ充滿ノ時ハ攝受ヲ前キトス安樂行品ノ如シ。邪智

謗法ノモノ多キ時ハ折伏ヲ前キトス常不輕品ノ如シ。乃至末法ニ攝受折伏アルベシ。(八二二頁)

天地の差があるものを而も末法ニ攝受折伏アルベシと併用されるのは如何にして用ひられるかと申しますと表裏して用ゆるのであります。末法は折伏正意の時であります。けれども其の裏に攝受を用ゐるのであります。嚴なる父を表とし正と致す傍らに母の愛がそゝがれて子供は成長致します。折

伏は父の嚴、攝受は母の愛であります。直入法華折伏宗にも攝受が裏付けられてあることを忘れてはなりません。天台が與奪ノ義といはれましたが、攝受は與へてウムヨシ〜といふて育て、行くや方、折伏は奪つて呵責するやり方でありませう。何れも大切であります。末法は悪人充滿の時でありませうから、折伏を主と致して弘通するのであります。開導上人の御教歌に

たらかして阿呆を使へばつけ上る、しかり使ひにするは末法

第一四 結 勸

- 一、信心法度十三箇條 十二宗名は初期の御著述である十三問答抄に御示し遊ばされたものであるに對し、晩年の御指南に信心法度十三箇條があります。是非心得て置かなければならぬことでもあります。これは他日發表致す考へでありますが、其中主なるもの二三を擧げて見ます。
- 一、他宗謗法の堂社へ參るべからず。おなじく佛神を拜み一紙半錢をも供養すべからず。
 - 一、當宗に僧なくて事かけ候とも他宗に何事もさすべからず。
 - 一、他宗の講にまじるべからず。

- 一、他宗の佛會祈禱の處へ行き一飯をもうけ茶酒にてもうくべからず。同こなたへもさやうの時よぶべからず。
 - 一、男他宗にて女性當宗ならば、いつまでも捨つべからず。男當宗にて女性他宗ならば三年迄はおくべし。それすぎば門徒をはなすべし。
 - 一、他宗の人、むこよめになりきたらば即ち當宗になすべし。同家のうちに來り宮仕へ候へば即ち先づ一日なりとも當宗になすべし。
 - 一、當宗の僧檀方、同坊、相檀方の謗法ふるまひ見かくし、きゝかくさんは今生はむなし、後生は無間におつべし。
- 等であります。此の御法度と十二宗名との關係を一言申せば、十二宗名は信者の進むべき道——目標——積極的御指南で、十三ヶ條は寧ろ守るべき誠め——消極的戒法をお教へ下されたものと拜されます。換言すれば十二宗名は信心を、十三ヶ條は謗法を御示し下されたものと信じます。此の兩者は互に表裏して我等初心の信行を御導き下さるものであります。
- 二、十七の異名 一宗に十二も違つた名があるなどは變だと思ふて罪障を積む人があると惡

いから、他にもこんな例があるといふことを知つて置いて頂きます。宗祖大士は（七〇五頁）當ニ知ル
 ペン果分ノ經ニハ十七ノ名ヲ具セリとの傳教大師の語を引いて、次の十七の異名が擧げられてありま
 す。一名無量義經、二名最勝修多羅、三名大方廣、四名教菩薩法、五名佛所護念、六名一切諸佛祕
 密法、七名一切諸佛藏、八名一切諸佛祕密處、九名能生一切諸佛、十名一切諸佛道場、十一名一切
 諸佛所轉法輪、十二名一切諸佛堅固舍利、十三名一切諸佛大巧方便經、十四名說一乘經、十五名第
 一義住、十六名妙法蓮華經、十七名最上法門。以上に就て妙樂大師は此の十七名の中の第十六に妙
 法蓮華經といふのがあるから、これは法華の異名であると判ぜられてあるのを宗祖大士御引證遊ばさ
 れてあります。もとく天親菩薩の法華論中に述べられてあるのですから、此の十七は正に妙法蓮華
 經の異名に相違ないと思ひます。これを以て見ますと、妙法蓮華經が同じ名の中でも一番大切なもの
 で總名と申すものであります。他は別名で部分的異名とでも申すべきでありませう。此の例によれば
 總別の差はあるとしても、十二宗名は少しも變ではないのであります。法華論の異名は何れも法華經
 中の經文御義によつたもので智者解行向であります。わが開基の十二宗名は愚者信行の爲めで、宗祖
 御指南に基いた實際的な御指南であると思ひます。異名に就ての説明は省畧致します。（終）

佛立 信行 常識

第一 祈願	三〇七	三折伏	三三	四 開いて覺えよ	三六一
一 祈願の依り處	三〇七	四 折伏のしかた	三三	五 聽聞の心得	三五三
二 祈願の方法	三〇七	五 折伏の標準	三五	六 或る信女の話	三五五
三 祈願の心地	三〇七	六 連れ立つて唱ふるこ と	三六	七 御法門知りたりげ	三五七
第二 謗法拂	三〇八	七 御助行を受くる人の 心得	三七	第六 回 向	三五八
一 謗法	三〇八	四 御 講	三二	一回 向	三五八
二 謗法恐るべし	三〇八	一 御 講	三二	二 回向の方法	三五〇
三 謗法拂ひ	三〇七	二 御講の功德	三四	三 塔 婆	三五四
四 正直に謗法を捨てよ	三〇八	三 參詣者の心得	三四	四 多寶塔	三五五
五 謗法拂ひの時の注意	三〇九	四 御講席は異體同心の 熔爐	三四	五 塔婆の様式	三五六
六 まさらはしきもの	三〇九	五 御講席は示威運動	三四	六 起塔供養	三六七
七 神社と神道	三一一	第五 御法門	三四	七 我等の塔婆	三七〇
八 宗教的行事を避けよ	三一一	一 法門の字義	三四	第七 御供養	三七二
九 神に對する態度	三一一	二 三つの門	三四	一 御供養	三七二
第三 助 行	三二九	三 而復狹少	三五〇	二十種供養經	三七五
一 助 行	三二九			三 信者に供養	三七七
二 助行の人	三三一			四 御供養券	三七八
				五 供養の功德	三七九

佛立 信 行 常 識

第一 祈 願

一、祈 願 祈願とはイノリ、ネガフことです。祈は叫ブ、ツッグルなどの義で神佛に事柄を申し上げること、願は思フことで、心中にあること、即ち心に思ひ口に出して求むることが祈願といふ字義です。此の意味に用ひらるゝ言語は祈禱、祈請、祈りなどあります。宗祖大士の御鈔中には多く祈り又は祈禱の語を用ひられてあります。要するに吾等のかくありたいと思ふ心を御本尊様に申上げて、御經力、御佛力の加護を求むることでありませう。

二、祈願の依り處 勝手に御願ひすることは別として、果して御願ひすることを佛様や、お祖師様は正しいことだと思召してゐられるものでせうか、否や。かの明治神宮に参りて何やかや御願ひする人が澤山ありますが、あんなことは明治大帝の叡慮に適ふものか、願ふたら聞き届けて遣すぞと

の思召があつたものかどうかを確めて置くことは必要でありませう。尤も、聞き入れて下さるか否やは別に考慮して居ない、願へばよいのだといふ人は今の問題にはなりません。こんな人は實際の心中を割つて見ると明治大帝に聞いて頂くつもりでなく、己れは祈つて居るんだぞ、それでもお前はおれの要求を聞入れぬかと、第三者に對する一種の示威運動である場合が多いのであります。こんな連中の祈願と當講の祈願とは一所になりません。當講の御願ひは必ず聞届けて頂かねばならぬと御本尊様に御継り申すのですから。尤も神社に祈るお方でも一生懸命に願ふ人はあります。然し間に鐵砲を放すと同じで、肝心の神様が願ひ事は聞き届けるぞよとの御託宜も無いのであるから、暖簾に腕押しすることに頼り無い次第であります。

それなら當講の御願ひに就てはどうぢやと申しますと、チャンと法華經にもお祖師様の御書にも御座いますから、決して間に鐵砲暖簾に腕押しではないのであります。今二三の祖文を擧げて説明して見ませう。

一、持法華問答抄に云く、七難即滅、七福即生ト祈ランニモ此御經第一也。現世安穩ト見エタレバナリ。他國侵逼ノ難、自界叛逆ノ難ノ御祈禱ニモ此ノ妙典ニ過ギタルハナシ。令百由旬内、無諸衰患

ト説タレバナリ。(四七五頁)

二、道妙禪門御書に云く、肝要ハ此經ノ信心ヲ致シ給ヒ候ハ、現當ノ所願満足アルベク候、法華第三ニ云ク、雖有魔及魔民、皆護佛法、第七ニ云ク病即消滅、不老不死、金言疑フベカラズ。(一五一六頁)

三、太田左衛門尉御返事に云く、法華經ト申ス御經ハ身心ノ諸病ノ良藥ナリ。サレバ經ニ云ク、此經ハ即チ爲レ閻浮提ノ人ノ病ノ良藥ナリ。若シ人病アリテ是ノ經ヲ聞クコトヲ得バ、病即チ消滅シテ不老不死ナラン等云云。又云ク現世安穩ニシテ後生善處ナラン等云云。(一七二〇頁)

以上の三文中を通じて、法華經の金文を四箇處御引證遊ばされてあります。第一は法華經第三の卷藥草論品の御文で、

是ノ諸ノ衆生、是ノ法ヲ聞キ已テ現世安穩ニシテ後ニ善處ニ生レン。

とあります。是の法とはいふ迄もなく法華經であります。何故に現世安穩なりやといふに法華經の經力及び諸佛、菩薩、諸天善神の守護の力によるものであります。第五の卷安樂行品には諸天ハ晝夜ニ常ニ法ノ爲ノ故ニ而モ之ヲ衛護スとあります。法とは法華經であります。法華經を持つものを衛護するとあるのであります。第二は同じく第三の卷に魔事アルコト無ケン魔及ビ魔民アリト雖モ皆佛法

ヲ護ルの御文があります。魔とは障害、擾亂、破壊など譯する印度語であります。一切障礙無く破壊せらるゝこと無く、否却て魔王及び魔臣魔民等が吾が法華經の信者を守護すると説かれてある御文であります。第三は七の卷藥王菩薩本事品の御文で讀んで字の如くであります。第四は第八の卷陀羅尼品にあります。毘沙門天王護世の神呪であります。曰く

爾ノ時ニ毘沙門天王護世者、佛ニ白シテ言ク、我モ亦爲レ衆生ヲ愍念シ此ノ法師ヲ擁護セン。乃至。世尊ヨ是ノ神呪ヲ以テ法師ヲ擁護セン。我モ亦自ラ是經ヲ持ツ者ヲ擁護シテ百由旬ノ内ニ諸ノ衰患無ラシム。

一由旬は日本里數で約二百四十町でありますから、百由旬といふと二萬四千町となり、約六百六十里以内となります。要するに法華經の行者の身邊には、諸の危険は無いやうに守護するといふ誓ひであります。猶此の陀羅尼品には持國天王、藥王菩薩、勇施菩薩、鬼子母神、十羅刹女の守護の誓文神呪が説かれてあります。此外、普賢經には、普賢菩薩の守護の文あり。或は所願不虛、亦於現世、得其福報などの文もあります。されば日蓮大士は祈禱抄に、

法華經ノ行者ノ祈リノカナハヌ事ハアルベカラズ。乃至、道理文證ヲ拜見スルニ、マコトニ日月ノ天

ニ御座スナラバ、大地ニ草木ノ生フルナラバ晝夜ノ國土ニアルナラバ、大電ダニモ反覆セズ大海ノ潮ダニモ満チ干ルナラバ、法華經ヲ信ゼン人現世ノ祈リ後生ノ善處ハ疑ヒナカルベシ。(九〇六頁) 祈禱抄送狀には、一切法華經ニ其身ヲ任セ金言ノ如ク修行セバ、慥ニ後生ハ申スニ及バズ、今生モ息災延命ニシテ勝妙ノ大果報ヲ得、廣宣流布ノ大願ヲモ成就スベキ也。(九一五頁)

其他立正安國論には先づ國家ヲ祈リテ、須ク佛法ヲ立ツベシとか、先づ生前ヲ安ジ更ニ歿後ヲ扶クンなど教擧に暇がありません。具には現證論據、「宗祖大士と現證」の項下を御覽下さい。

三、祈願の方法 祈願には別に方法といふものは定められてありません。たゞ謗法の穢れなく、御本尊に打向ひ、奉り南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と一心に口唱すれば必ず成就するのであります。謗法に就ては別に項を改めて説く考であります。

四、祈願の心地 どんな心で御願ひしたらよいのかと申しますと、餘念なくと申すより外ありません。御教歌に

餘念なく妙法五字を唱ふればよろづの願ひなかに成就

餘念とは又他念とも申されてあります。「ほかのおもひ」を餘念とも他念とも申します。ほかの思ひ

といふと何ぞ一つ思ひが無ければならぬ。あります。大に有ります。御教歌に

戀ひ慕ひ唱へ重ねし心より法の光りは顯れにけり

御本尊様を戀ひ慕ふといふ一念を以て口唱する、それより餘の念、他の思ひがあつては成就致しません。これは法華經第六の卷如來壽量品に

其ノ心戀慕スルニヨリテ乃チ出デテ爲ニ法ヲ説ク。

とあります。よられたものであります。南無妙法蓮華經の御本尊様に打向ひ奉りて、佛様、菩薩様達を戀ひ慕ひ何卒私を御助け下されと御願ひするから、そんなに願ふなら助けに出懸けてやらうと御出まし下さるのであります。

心ざし深く願はゞ玉だれの小簾上げまかせまみえ給はん

の御教歌も同意であります。御簾をたれてあるけれども、一心に願ふからみすをまいて會ふてやるぞといふ御心にて、即ち御利益を下さることを意味するのであります。

この戀慕の心を言ひ換へますと信の一字となります。御本尊様は我等の目には黒き文字なれども實は生身の如來なりと信じ奉る(其一)。生身の如來にましますば我等の願ひ必ず御聞届け下さると信

じ奉る(其二)。御教歌には

妙法は生きていますといふことを疑はぬをば信者とぞいふ

尊像はいきていますと思はねば信心するも無益なりけり

などは其の一證であります。又

口唱には智慧才覺も無益なり疑ひなきを信心といふ

口唱する時——御願ひする時は自分の考を捨てよ。御本尊は紙に字が書いてあるのちや、御尊像は木でこしらへたものちやといふ考を打捨てよ。而して生きています御本尊、生きてをはず祖師の御姿と信じて疑ふな。而して一心に口唱せよ。さればこの信の一念の無い口唱は蓄音器と大して差は無いと申さねばなりません。されば御教歌に

妙法の五字よりいづる御利益を信心の手にいたゞきにけり

信の一字が要の中の要であります。然し又ありがたいと思ふだけで口唱を怠れば、これ又御利益が頂けませぬ。御教歌に

唱ふるが信心なれば唱へずには有難がるは信心でなし

されば信と口唱の二つが車の兩輪、鳥の兩翼、一つ缺けても御利益は頂けませぬ。

御利益は信の中にはあるなれど出づるは行の聲にあらはる

の御教歌が此の兩端を叩いて下さつた御指南であります。

最後に御法門でよく無味口唱といふことを承ります。この無味口唱とは御本尊を私の考を以て吟味する——味ふ——といふことをしてはならぬといふことであります。物識りぶつて不動愛染が

梵字で候とか、いや釋迦多寶の二佛がどうだとかいふのが味ふのです。そんな考なしにたゞ生身

の如來なりと信じて疑はざる一念以外の他の念を絶滅せよといふことであります。

然るを世間の佛教者の言ひ草である無念無想といふことを無味口唱だと心得違ひするものがあります。

常講口唱の心地は決して無念無想ぢやない。信の念あり、生身の想ひあるものであります。間違

ひなき様せられたい。

第二 謗 法 拂

一、謗 法 法とは法華經のこと、この法華經を謗るを謗法といひます。謗るについて御經に

は十四謗法といふて十四通り御示し下されてありますが、所詮は法華經の御教に従はず信ぜざることを謗法と申すのであります。日蓮大士云く、

謗ト云フハ但ダ口ヲ以テ謗リ、心ヲ以テ謗ルノミ謗ニアラズ。法華經流布ノ國ニ生レテ信ゼズ行ゼズ即チ謗ナリ。(二三頁)

悪口をいふたり、教に反對するばかりが謗法ではない。この御法を信心せぬ人は知らず識らず、法華經に背ける人、即ち謗法人となつて居るのであります。この道理の上に立つて諸宗教の神とか佛とかいふものを見ますれば、皆我が法華經に信順せざるもの、否敵對して居るものばかりでありますから物て皆謗法であります。よしそれは法華經の中に名を顯はして居る佛でも菩薩でも、他宗教の手先になつて働いて居るのでありますから、謗法の毀りを免るゝことは出来ません。

二、謗法恐るべし 謗法といふ事がお判りになれば、自然と其恐るべき譯も、お悟りになられたであらうと思ひます。佛立講以外の日蓮宗は多くこの謗法といふことを恐れませんのみならず、其の謗法の寺へ平氣で參詣して居ます。さうして却て佛立講の信心を謗り、氣が小さいとか、了簡が狭いと申して居ます。これは宗祖日蓮大士の思召に逆ふものであります。今御指南を引いて如何に謗

法の恐るべきかを述べて見ませう。

法華經ノ敵ヲ見ナガラ置テセメズンバ、師檀トモニ無間地獄ハ疑ヒナカルベシ。南岳大師ノ云ク、諸ノ惡人ト俱ニ地獄ニ墮ツ云々。謗法ヲ責メズシテ成佛ヲ願ハ、火ノ中ニ水ヲ求メ、水ノ中ニ火ヲ尋ヌルガ如クナルベシ。ハカナシハカナシ。何ニ法華經ヲ信ジ給フトモ謗法アラバ必ズ地獄ニ墮ツベシ。漆千倍ニ蟹ノ足一ツ入レタランガ如シ。(二五一五頁)

日蓮等ノ類ヒノ恐ルベキ文字一字コレアリ。若シ此ノ文字ヲ恐レザレバ縦ヒ當座ハ事ナシトモ未來無間ノ業タルベシ。然ラバ無間地獄ヘ引入ル獄卒ナルベシ。夫レハ置ノ一字是レナリ、云々。此置ノ一字ハ獄卒ナルベシ。謗法不信ノ失ヲ見ナガラ聞ナガラ云ハズシテ置カンハ必ズ無間地獄ヘ墮在ス可シ。仍テ置ノ一字獄卒、阿防羅利ナルベシ。(日向記)

謗法の寺へ參る所ではない之を敵として責めねばならぬ。若し責めざる者は無間地獄に墮ちると仰せになつてあります。法華經の敵を見乍ら置て責めないといふ「置」の一字がやがて自分を地獄へ導く獄卒であると御示しになつてあります。この二の御文を拜したならば謗法を責めずには置かれましまし。況んや參詣などがどうして出来ませう。

三、謗法拂ひ

謗法を見ながら責ざるものは無間地獄へ墮つるとの御指南を拜した以上、決して捨て置くことは出来ません。然し捨て置くことが出来ぬとて、まさか其處等の謗法寺へ行て阿彌陀や藥師佛を相手に折伏も出来ません。先づ我が家にある所の謗法を責むるのが第一であります。我が家の謗法を責め平けることを謗法拂ひと申します。阿彌陀佛が佛壇の眞中にある。これを責める。なぜ法華經に敵對なざる、否法華經の敵の手先にお成りになるとは不都合千萬である。或は帝釋天王、又は毘沙門天王等皆其の謗法を責めるのであります。然し阿彌陀佛も觀世音も帝釋も毘沙門もそれ自身が悪いのではない。謗法の僧等の手先に使はれるのが悪いのであるから、茲に敵の手先となつたことを改める爲めに其の謗法の姿を消滅してあげる。即ち火に上げるのであります。火に上げることは我國の風習として「清める」ことでもありますから、其の謗法の罪を清め消滅してあげることになりませう。これで謗法拂ひが出来たのであります。家中に一つの謗法の影もない様になりましたら、第二に進んで兄弟親戚知己等を折伏し教化して其の謗法を消滅せしめる。兄弟、親戚、友人等の家にある謗法を見ながら責めざるは、矢張り「置」の一字に觸れますから、自分の罪障となります。先方が聞入れなくとも責める丈は責めねばならぬ。然し他人のものに手をかけることは出来ませんから、消滅迄はさ

して上げられません。只責めて上げるだけであります。念の爲に申して置きますが謗法の札等を消滅するのは必ず本人がすべきであります。また家人たりとも主人の承諾なしに爲てはいけません。

四、正直に謗法を捨てよ

或はいふ人があるかもしれぬ。そりや謗法は恐ろしい、謗法をしてはならぬ位のことはお題目を唱へるものは皆知つて居るけれども、何も有るものを焼いたり流したりせんでもよいぢやないか。そんなものがあつて邪魔になるといふやうなケチな御本尊様ぢやない。あつても御利益は頂けますよ。などと主張される方があられるかもしれませぬが、宗祖日蓮大士の御思召とは大變違ふ所であります。御指南を拜見しますと、

正直捨方便ト申シテ、法華經ヲ信ズル人ハ阿彌陀經等ノ南無阿彌陀佛、大日經等ノ眞言宗、阿含經等ノ律宗ノ二百五十戒等ヲ切りステ。抛テ後、法華經ヲバ持チ候也。大塔ヲクマンガ爲メニハ、足代大切ナレドモ、大塔ヲクミアゲヌレバ足代ヲ切り落スナリ、正直捨方便ト申ス文ノ心是レ也。(一九九五頁)

家を建てるには足代がある。建て、仕舞へば取拂はねばならぬ。それと同じだと日蓮大士は仰せになつてある。それをいや邪魔にもならぬから取らなくてもよいといふのが謗法法華の人の言ひ草であ

ります。然し宗祖大士は正直にスツパリと捨て、仕舞へと仰せになつてあります。日蓮門下としてはどちらを用いるが正しいか、申す迄も無いことでありませう。つぎに一度捨てた以上、用も無いのに並べて置くは愚の骨頂であります。骨董屋の陳列棚でも無目的に並べてあるのではない。況んや現當二世の大願を掛ける御本尊を安置し奉つてある所へ、無用の長物を並べ置くは骨董屋にも劣るものであります。否言に無用の長物とのみでは相濟まぬ。恰も離縁した婿を新婿と同居さして置く様なもので、家内中がとても圓滿に治まるものではない。即ち信者の信心がゴヂギン\の難炊になり、貞實の信心を望むことは出来ません。斷じてかゝることは許すことの出来ないものであります。

五、謗法拂ひの時の注意

謗法拂ひの方法は前に述べた様に火に上げるが一番よい方法であります。水に流したりすると又打上げられたりして、其の姿が全く消滅しません爲め徹底的に拂へないといふ杞憂があります。それから特に注意して置きたいのは謗法拂ひだからとて粗末に取扱ふてはならぬといふ一事であります。かりそめにも萬人の尊敬する佛神の名のあるものでありますから丁重に取扱はねばなりません。どうかすると、世間で大掃除の時、大神宮のお札や何かと塵箱からはみ出てる様なことを見ることがありますが、極めてよくないことであります。佛立開導日扇上人は次の如く

示されてあります。

信仰上ノ事ハ自由ナリトテ神札等モアラクナスニハ非ズ。謗法拂等ニモ尊敬シテ、世間上ノサワリトナラザル様ニ注意スベキモノナリ。

六、まぎらはしきもの 實際は謗法でないのですが、謗法にまぎらはしきものがあります。佛畫の如き、神社のお札の如きものであります。此等のものは如何に取扱つたらよいかといふことを述べて見ませう。

佛畫も信仰の對象物としてあるものは立派な謗法ではありませんが、世間にあるものは多く骨董品として尊重されてあるもので謗法といふべき筋のものではありません。達磨の坐像や床懸け又はえびす大黒の額がくの如き又然りといふべきであります。併しこれが謗法にそつくりであるから誠にまぎらはしくて困るのであります。

一體この似たもの位くらゐこまるものはありますまい。それは胡麻ごま化され易い爲めであります。一例をあげて申しますと登録商標の如き、其の商標が信ぜられて來るとそれとは似ても似つかぬ悪い品に、其の商標によく似たレッテルを付けて賣出す。一般の人はついそれに引掛られる。掛けられてナーン

だ違つて居たのだ、と悟る。然し後の祭りとなつて仕方が無い、それでは困るのは買ふ人斗りでない、本物を賣つて居る方も迷惑を受けます。それで政府は良品を保護する爲めに商標を登録し、猶これに類似した商標をも付することを禁じ之を犯すものを罰する様にして下さつた。

又似たものを禁ずるに就ては道德にも其の例があります。彼の渴シテ盗泉ノ水ヲ飲マズ、熱シテ惡木ノ蔭ニ憩ハズ、といふが如きであります。盗みといふことは尤も嫌ふものであります。故に、それに似た、否但だ名のみ似て居る盗泉といふ處の水をも飲まない。悪い名のついた木の蔭にも立寄らぬ。孔子は道に暮れて泊らうとした所が、其の里は勝母といふ村であつたので、母に勝つとは恐しい名前であるといふて引返して他所で宿をとつたといふことであります。近頃のこと申せば、過激派を嫌ふ爲めに、赤化思想の防壁の爲めに、赤い旗までも警察が禁じたといふのも、矢張り間違は似た所から起る、殊に思想などは似た所からうつり易いものであるからであります。

凡そ善惡の徳目は法律にもあり、道德にもありますが、宗教ほど深刻に取扱ふものはありますまい。浅い法律や道德ですら似た所を恐れるのです。況や宗教に於て似たるものに、非常な警戒を加へるは當然なことあります。

日蓮大士は、

常樂我淨ハ義コソ外道ハアシカリシカドモ名ハヨカリシゾカシ。然レドモ佛ハ名ヲモ忌ミ給ヒキ。乃至。念佛者ハ法華經ヲ國ニ失フ念佛ナリ。縦ヒ善タリトモ義分當レリト云フトモ先ツ名ヲ忌ムベシ。(六七六頁)

佛を念ずるといふことが何で佛教徒に差支があらう。けれども法華經の敵となれる邪宗邪義の通り名が念佛であるのであるから、義は當れりとも名がまぎらはしき故に忌むのであるとの御意。さればよし骨董品であらうとも當講の信者はまぎらはしき軸や額等は床に置かぬ様にせねばなりません。似たるをも恐れる人がどうして本物の謗法を敢て爲すことが出来たものか、これ位はといふ油斷のある人はやがて本物の謗法の行ひを知らず識らず犯す様になります。

序乍ら申して置度のは佛像佛畫を骨董品として床に据ゑ賞玩する人が澤山ありますが、これは立派な宗教冒瀆です。而も上流とかいふものに多いのは實になげかほしい次第であります。賞玩の目的でかゝるものを書くからして感心せぬ。況や某々寺の本尊であつたといふやうな物を金で買取て我家の床の置物とするなど言語道斷の振舞といつてよい。用を終れる佛像佛畫はよろしく博物館に納め

るか、或はさつぱりと火に上げる事が一番よい方法である。決して個人になぐさみや店頭にさらすべきものでないと信じます。

七、神社と神道

次にまぎらはしきものは神社のお札であります。抑も神社といふものは、吾が國の先帝又は先勳者を、其の因縁の深い地に於て祭つたものであります。いはゞ生前の尊敬を死後まで繼續して居るもので、お墓や記念塔の如きものであります。彼の氏神様といふものが恐らく本當の日本の神社であります。即ち其の土地の開拓者として、開拓によつて恩を受けたものが氏の上と尊崇する。平たくいへば「あの方はこゝの草分だ」といふ考へから氏神として祭り、其の土地の人々が氏子として之に仕へるのであります。一の土地を開拓する爲めには、色々の困難に打勝たねばならぬ。猛獸や毒蛇と戦ひ風雨や寒暑にも苦しめられ、而して一の山谷曠野が漸く人の住むに堪へられる様になるのであります。其の恩澤は何時いつ迄も後人の感謝せねばならぬ處であります。所がこの氏の上である氏神様によく似て大變意味の違つて居る神社が澤山出来て居ます。それはあの神様は難有いからといふ宗教的信仰心から、又は單なる英雄崇拜心から、他所の氏神を分神して自分の土地の鎮守としたものであります。かゝる氏神は眞の氏の上ではない。いはゞ宗教的の神、即ち一個の

宗教となつて居るのであります。其外明治維新前までは眞言なり天台なり法華宗なりの寺や其の宗旨の守護神であつたものを、王政維新の際に神佛分離といふ大斧を振り廻し、是が非でも生木を裂く様に別けて仕舞ふて、其神を獨立せしめたといふのも實に澤山あります。東京でいへば吉原の裏の大鳥神社、即ち鷲大明神（俗にお酉様）ともいふ流行神の如き其の著しきものであります。この場合は立派な宗教的神である。此の如きは佛教徒が宗教的目的を以て勸請したものでありますから、假ひ分離獨立しても矢張りその性質は繼續されて居ます。鷲神社の一例を以ていへば、古來より日本武尊を祭る（東京市編纂、東京案内参照）といはれてありますが、それは眞赤ないつはりで本來は妙見大菩薩が勸請されてあつたのであります。隣にある法華宗の長國寺の守護神であつたのであります。元は千葉の本山にあつた本體を時の貫首が末寺である長國寺へ出開帳したのであるが、居心地がよい爲めか居すわりとなつた。其の妙見は鷲の羽根をひろげた上に乗つて居る姿である所から鷲大明神、又大鳥様の號がつけられたのであります。嘘と思ふたら長國寺へ行つて住職に聞いて御覽なさい。又大鳥神社の正面の石の鳥居を見て御覽なさい。天保十己亥九月吉日、當山二十一世日退代と彫込であります。こんな例は山程あります。かゝる神社に矢張り神聖無垢な氏神と同様に敬意を表せねばなら

ぬといふ事は頗る困難なことであります。全體我邦の神といふは「神ハ上也」と訓じ、尊敬すべきものといふ心から名けたもので決して佛教や基督教でいふ神とは異なるものであります。從て神社は宗教ではないといふことが王政維新の際、神佛分離を執行せしめた重要な理由であつたのであります。先年大隈伯が内閣を組織せられ首相兼内相として地方長官を招集し、施政方針を示された時特にこの點に重を置き、神社と神道との別を明らかにされたことがありました。所謂神道とは天理教とか黒住教とか神理教とかいふ宗教團體の事で、神を本尊とする宗教。神社は是等と全然關係の無い別種のものであるといふ事です。是は彼等神道の人々には非常にツライ所で、どうかして同じ物の様に見せつけようと苦心して居るのであります。ツイ此頃清浦子爵が首相として思想善導の爲めに宗教家を招かれて其の意見を徴された所が、神道諸派の代表者は何れも申合せた様に、神道と神社とを別けたのが悪いと口を揃へて申されたといふことが、其當時の新聞紙に報ぜられてあります。兎に角神社と神道は別なものである。即ち神社は宗教でないといふことは確かなことであります。然らば今日神社の採りつゝある態度はどうも宗教的傾向を有し、一般の人ではとても神社と神道との區別を明らかにすることが出来ない様になつて來ました。それは宗教的神社が始まりで氏神の神社

まで何れも其の風潮に乗じて居るといふ状態であります。茲に於て宗教家としてかゝる神社をどう取扱へばよいかといふ難問題に逢着するのであります。

八、宗教的行事を選ばよ

吾等宗教家として希望する所は、神社は宗教的行事を選ばよ。信者に對しては神社に敬意を表するも、斷じて神社の宗教的行事に参加せぬ事であり。茲で宗教的行事といふのは主として神靈の力で不可思議の用を爲し、氏子の願を叶へてやり、又は守護を垂れるといふことであります。お祓ひをしたり御守札を出したりするは明らかに宗教的行事と思ひます。尤も神社を一つの宗教なりとして、個人的に信仰するはそれは其人の勝手でありませんが、神社自體としては謹んで貰ひたい。又當講の信者は絶対に宗教的神として信敬することは出来ません。たゞ國家の先勤者として國民的敬意を拂ふだけではありません。どうか當病平癒だとか、心願成就だとか、御守護を垂れ給へとかの御願は決して出来ません。從て其等の爲に出來て居る一切の守札の如きもお請けしないのであります。

次に伊勢大神宮や出雲大社、其他の神社の玉串を神札など稱し、御分身の様に一般に信ぜられて居る爲に、今述べたお守札と同一視されるのは非常に遺憾な事であります。元來我國風では崇神天皇の

御時三種神器中、御鏡御劔を大和の笠縫邑に遷し、其の御鏡を御靈代として天照大神を祀る。是神と俱にあるは神威を穢す虞れありとの思召からであります。以來屋内に神を祀らぬ風を爲したのであります。從て神社が諸所に出來たのであります。玉串は畢竟、御幣である。言海に玉串ハ榊ノ枝ニ木綿ヲ付ケタルモノ神ニ奉ルモノとあり、初は木綿を木の枝にくゝりつけて上つたものであつたのが、絹になつたり紙にしたりして今日の御幣に變つたのであります。御幣は古語では「ミテグラ」といふ。言海に「ミテグラ」(幣)何物ニテモ神ニ奉ル物ノ總名、後ニ絹帛ナドヲ串ニ挾ミテ奉ルヲイフ、後ニハ紙ニモ代フ、とあります。御幣の幣の字は元來「ヲクリモノ」の義で、貨幣の幣と源を同するものであります。即ち神様に物を贈進する品物が御幣であるのであります。伊勢神宮司で出す玉串(木の串に細き白紙を巻きつ)の upper に「上」の字が印してあるのは全く上る意味であります。それを御神體の様に思ふて購ひ求めて來るは誤解であります。否御分神の様に宣傳するのは國民を愚にするものであります。上るものであるから金錢を以て其の札を求めたならば、それを神殿に奉納して歸ればよいのである。然るにお札を國の土産に持歸らしむるは、神社が佛教の祈禱札を模倣したもので、明に神社の宗教化であると思ひます。神社側の反省を煩はすものであります。

九、神に對する態度

上來神社に對する態度を述べたから、次に神に對する態度に就て述べ
て見ませう。宗祖日蓮大士が國神に就て、信者日女御前に御示し遊ばされた御消息があります。

爰ニ日蓮イカナル不思議ニテヤ 候ラン、龍樹天親等、天台妙樂等ダニモ顯ハシ給ハザル大曼陀羅
ヲ、末法二百餘年ノ比、初メテ法華弘通ノハタジルシテ顯ハシ 奉ルナリ。乃至。加之日本
國ノ守護神タル天照太神、八幡大菩薩、天神七代、地神五代ノ神々、總ジテ大小ノ神祇等、體ノ神
ツラナル、其ノ餘ノ用ノ神豈ニモルベシヤ。云云。(一六二五頁)

是は我等信者の尤も大切に奉仕する御本尊の説明であります。其の尤も大切なる絶対無上の敬意を
捧げる御本尊様の中に日本全體の神々を悉く勸請し、朝夕至心に奉仕するのであります。これが
が故かと申せば此の神々は皆久遠本佛の分身にして法華の行者を守護し給ふが故であります。これが
當講信者としての國神觀であり又敬神の態度であります。若しそれ神社に祭れる神に對する態度は前
に述べたる如く國民としての敬意を捧ぐるに止まるべきであると確信致します。御教歌に

謗法を拂はにや利生あらはれず、雲がはれねば月も拜めず
似たるをも謗法らしき事はいめ、火をいむ時はあかきものをも

第三助 行

一、助行

助行とは正行に對する言葉であります。正行とは正意の修行或は正因の修
行といふ義であります。末法の凡夫が成佛する根本原因は、南無妙法蓮華經のお題目を信唱すること
でありますから信唱題目が成佛の正因の行、されば是を末法の正意と致します。宗祖は正行ニハ唯
南無妙法蓮華經也(二〇〇八頁)と示されてあります。是正行に對して傍意の行、助縁の修行を助
行と申します。又云く、所詮末法ニ入テ天真獨朗ノ法門無益ナリ、助行ニハ用ユ可シ(同上)とありま
す。天真獨朗といふのは天台大師の教へ給ふた一念三千の觀法修行であります。之は智者の修行で
あるから末法愚者多き世には無益である。けれども末法といふても又少分の智者、いはゞ愚者の中
の智者といふべきものが無いではない。それ等の人々が正意にお題目を修行し傍らこの行をしてよ
い。それが正因を緣助することになるからといふ御意であります。此の意味をお述になつた祖書を引
證して讀者の領解を助けませう。

唱法華題目抄に云く、

常ノ所行(正行のこと)ハ題目ヲ南無妙法蓮華經ト唱フベシ。タヘタラン人(智者)ハ一偈一句ヲモ讀ミ奉ルベシ。助縁(助行)ニハ南無釋迦牟尼佛、多寶佛、十方諸佛、一切ノ菩薩、二乘、天人、龍神、八部等心ニ隨フベシ。愚者多キ世ナレバ一念三千ノ觀ヲ先(正)トセズ。(三四一頁)十章抄に云ク、眞實ニ圓ノ行ニ順ジテ常(正)ニ口ズサミズベキ事ハ南無妙法蓮華經ナリ。心ニ(助縁として)存スベキ事ハ一念三千ノ觀法ナリ。コレ智者ノ行解ナリ。日本國ノ在家ノ者ニハ但一向ニ南無妙法蓮華經ト唱ヘサスベシ。(六七五頁)

●注意 カツコ()の中はわかり易からん爲に著者私に挿入せるものなり。

所詮助行といふことは、成佛の正因修行を全うせしむる爲め、障害を除き又は援助を加へて信心が増進する様にする修行をいふのであります。妙講一座で申せばお題目口唱が正行、是正行を喜び勇んで出来る様に如説修行抄をあげる。如説修行抄は助行であります。開導師(鷄鳴曉要辨)云ク末代今時題目ノ行者ノ朝夕ノ勤行ニハ正行ハ口唱ナリ、助行ニハ如説修行抄ヲ拜讀シテ懈怠スルコト勿レト。懈怠の心に鞭打つものは修行抄であります。即ちこれが助行の役目であります。助行は成佛の因とはならぬ肥料であり、手入であります。

二、助行の人

前項は助行の法を申しました、こんどは助行の人をお話し致します。

正行がお題目といふ法であるから助行も如説修行抄とか一念三千の觀法とか申す法となりますが、若し正行を人とすれば助行も亦人でなくてはなりません。換言すれば成佛する法に正助あり、又其法を行する人にも正助ありといふことであります。

扱當講で専ら用ひて居ります助行といふ事は御祈願の時の助行の人を指すのであります。然らば正行の人とは誰かと申せば願主其人であります。即ち當病平癒を祈る病人が正行の人であります。それが初心であつて大きな聲さへ出さず、長く唱へ續くことも出来ず、一心の唱題がなか／＼覺束ない。さればといふて古い信者が代理でやつて上げようといふ事は宗祖門祖の御許しなさらぬ所であります。どうでも本人が一心にならねばならぬ。處で本人が一心になれぬ、仕方がないから本人が一心になる様に仕向けてやる、是が助行であります。尤も後心の信者でも信行懈怠して其信心が發らぬ、一心に口唱が出来ぬといふこともあり、或は病氣の爲に一心の修行が困難である場合、又は一心に修行して居つても、更にヨリ強盛に、猶ヨリ一心に進みたいといふ場合、他の助力——助行を待つことがあります。この他より一心になる様に仕向ける所の助行に二通りあります。一は折伏を加へてもら

ふこと、二は連れ立つて唱へてもらふことであります。

三、折伏 御願ひせねばならぬ程の病氣災難の發つて來るのは謗法があるからであります。されば其の謗法を改良懺悔せねば如何に御願ひしても御利益は頂けませぬ。所が燈臺下暗しの諺の如く兎角自分の悪い事には氣が附かぬものであります。他から見ればすぐわかる様な謗法でも本人は存外悪いとは思ふて居ないのであります。或は悪いとは知りつゝも猶改良する程悪いとは思ふて居ないことがあります。かゝる場合他より折伏を致しますと始めて改良が出来るのであります。されば助行の第一要件は折伏するといふことであります。

開導尊師の御指南に、

利益ヲ蒙ラント思ハハ謗法ヲトムムベシ。利益ヲ人ニ蒙ムラセント思ハハ謗法ヲセムベシ。タトヘバ器ノモリヲ止メザレバ水クムコトヲ教フルトモ水タマラズ。先其モリヲ止ムルトキ即水ヲマシガ如シ其器ノ主モルコトヲシラヌヲ教ヘテヤルガ教化(清徹私に曰く、茲では折伏とよむがわかりやすし)ナリ。シラヌ程ニツメヲシテ、シバシ利益ヲ見スルト云ヘドモ、ツメノシヤウヲ教ヘテ置ザレバ但水ノクミヤウヲ教ヘタルノミナリ。(録内十四卷御書入)

謗法の穴があるから何んぼ口唱の水を汲み込んで御利益とならぬのであります。そこを教化親が初心によく教へて置かぬ爲に口唱さへすれば御利益を頂けるものと思ひ込んで病氣の時でも謗法を改良するとか懺悔するとかいふことに氣がつかず、こんなに一生懸命でやつてゐるのにどうして御利益が頂けぬのでせうなどと、恨みがましき心を起すことがあります。それで折伏すると却て腹を立てるなどといふ大馬鹿ものがある。これはつめのことをよく教へてないからであります。古い信者でも腹を立てる分際はまだ、このつめのことをよく知らぬ信者であります。これをよく承知したお方は俗に云ふ御利益を頂くことの上手な信者といはるゝのであります。病氣災難の時は日頃の信心に謗法の穴のある所を考へて直に改良し懺悔致し決して再びかゝることは致しませんからと誓願致し口唱を勵むと手の平を返す様に御利益が頂けます。

四、折伏のしかた

開化要談體の卷には、折伏セザレバ利益顯レガタシと御指南下されてあります。又同書に謗法ノ有無ヲ糺明セズシテ御看經ヲ願フコト與同罪ナリともあります。さて折伏を致しますに就て同書には次の如く御指南下されてあります。

折伏ノ仕様ニ二様アリ。タトヘバ犬ニ當ラヌ様ニ棒ヲフルト、鼻柱ヲネラフテナグルノトナリ。同

シ當流ノ面折トハ云ヘドモ臆病折伏、詔曲折伏アリ。コレハ御抄ニ遊バシタル法華經ノ敵ト仰セラレタル折伏ナリ。名ハ折伏ニシテ心ハ隨他意、御太鼓折伏ナンニモナラヌト云フ折伏ナレバ臆病ナリ。詔曲ナリ。犬ニ當ラヌ様ニ棒ヲフル意ナリ。ナグルニ非ズタスクルナリ。コラスニ非ズカ、ヘルナリ。良薬口ニ苦シ金言耳ニ逆フ。無間地獄ヘ落スガ不便ト、助ケタサガ先ニ立チテ死ヌルナラバ早クシネ、生キテ謗罪ヲ積ンヨリハ毒鼓ノ縁ニダモト面折スルガ、カブリ付クノナラカブリツケト鼻柱ヲネラウテ眞向ニナグル意ナリ。コレヲ當流ノ折伏トハ申スナリ。

御教歌に

折伏も當らぬ様にするときにはやはり無慈悲の隨他意となる

折伏をすると申せば一色の様に思ひますが、當らぬ様に折伏があります。云はゞ先方が怒らぬ様に御機嫌をとり、他人の身の上話の様にやるのがあります。これをへつらひ折伏、お太鼓折伏と御叱り遊ばされてあります。退轉するなら退轉せよといふ強氣を持って折伏せねばならぬのであります。尤も、慈悲の心に満ちた其の心より起る折伏でないと、眞の折伏にはならぬのはいふ迄もないこととであります。

附言 折伏は攝受に對する言葉で、宗祖大士も如説抄に佛法ヲ修行セン者ハ攝折二門ヲ知ルベキ也。一切ノ經論此ノ二ヲ出デザルナリと御示し遊ばされてある大事な法門であります。字義等は前に述べてありますから御参照を願ひたい。

五、折伏の標準

折伏をせねば御利益があらはれませぬとすれば、どうしても折伏せねばなりません。折伏は就て注意すべきことは、何でも思ひ付たことを折伏々々と振りかざすことです。よくある事で病氣が長くなりますと、あれも謗法ぢやろ、これも謗法ぢやろといふ、ぢやろ付の折伏が出てまゐります。それも一人でいふのならさうメチャ、クチャもありますまいが多勢で口々に折伏する爲、あちらでよいといふことが、此方で謗法となり、こちらで懺悔することがあちらで懺悔する必要はないとなつたりすることが出来上ります。こんな不統一な折伏でどうして病人に御利益を頂かせられるのですか。而してかく不統一に陥る所以は折伏の標準が個々にあるから十人十色の折伏が出てまゐります。一つの標準であれば決してかゝることはあるべき筈はないのであります。一つの定規を標準とすれば十本百本千本をけづりましても、どれと、どれと合せて見ましても、皆一分のすきも無く揃ひますものです。

楮一本の定規とは何ですか、いふ迄も無く御法門であります。御指南であります。この御法門を日頃そら聞きにして居る爲に御法門に從て御折伏するといふことが出来ず、自分考で折伏する様になるのであります。かういふ御教歌がある。この御指南にそむくから謗法だと、チャンとよい所を明瞭にして折伏すれば、自分も確信を以てすることが出来、從て相手にも信を以て首肯しむることが出来るのであります。ぢやろ付の折伏などをする人は御法門のうすら覺えを基とするから折伏する人が第一確かにそれに違ひないといふ信を持つて居ない。されば折伏しても深く貫くことが出来ません。即ち徹底せしむることが出来ません。諸君、御法門はよく覺えて置いて頂きたい。それには能く一心に聽聞する心掛が必要です。折伏せねば助行にならぬからと何でもかでも思付を折伏されては病人こそよい迷惑であります。よく心をとめて置いて頂きたい。

六、連れ立つて唱ふること

助行の第二要件は一所にお題目を唱へて上げることです。已に折伏して改良させた以上、その人をして改めたといふことを完うせしむる爲に、所願成就の處まで共同責任でとも／＼に唱へてあげねばなりません。琴や三味線を習ひにお師匠さんの處に行きます。歸つてから、ボツン／＼とあやしい手付で調子はづれの歌を誦つて居ります。同じ師匠の處

へ通ふて居るものがそれを聞いた時には、まあひどい調子はづれだなと思つたら、其處はかう弾くんですよ、あゝ誦ふんですよと教へて上げる位の親切はなくてはならぬ。蔭で手を叩いて笑つて居るんでは同じ稽古仲間といふ義理をしらぬ人となります。又教へてもらふたら面をふくらさずに有難う御座いますと御禮を心から申すべきであります。其時に教へばなしで左様ならにしますと、又其の調子はづれを繰返します。覺え込むまで、其癖の直る迄一所に弾いて上げる親切がありがたい。この一所に弾くことを連弾といふでせう。誦ふ場合には合唱することを連節といふでせう。この連弾とか連節とかいふ心持で助行といふ言葉を考へて下さい。助行はタスケル行といふよりは、スケル行といふ方が本義に叶ふのであります。イヤ病人を助けて上げるんだからタスケル行が本當だ、などいふ人は中山や原木の祈禱者の輩の口眞似であります。病人自身の信行の力で助かるといふのが當講の御教へ、みだりに他から助けて上げるなどいふことは出来るものではありません。たゞスケテ上げるのであります。

七、お助行を受くる人の心得

お助行を頂くお方の心得は開導日扇上人が最も明瞭に御示し下されてあります。

開化要談(體の卷)に云く、

ロスギノ爲ニ拜ミアルク者ヲ頼ムベカラズ御利益ナシ。

病家ノ心得ニハ、助行ニ來テ下サレタル信者ヲ敬ヒ思フコト、高祖御來臨ノ思ヒヲナスベシ。遠方

ヨリ參レルモ、又時過ギタルニモ御空腹サセ申サヌ様御供養申スベシ。相互ナリト思ヒテ、相互ニ

心安ク輕率ニスレバ更ニ御利生ハナキモノナリ。

貧家ニテ其事ノ叶ハヌハ心テ敬フベシ。又助行ノ人モ、モトヨリ助クル慈悲ナレバ供養ヲ受クル心

更ニナシ。蠟燭、香等、持參スル人モアリ。出來ル家ニテセヌハ貪慾ナリ、利生ナキ也。已上

御指南誠に明瞭であります。助行者を敬ふ心が薄ければ御利益はいたゞかれません。お祖師様が私

を助けに来て下さつたのだ。お祖師様の御名代が御いで下さつたのだとおもふて敬はねばなりません。

法華經第四の卷、法師品には

吾ガ滅後ノ惡世ニ能ク是經ヲ持ン者ヲバ、當ニ合掌シ敬禮シテ世尊ヲ供養スルガ如クスベシ。

或は又、

其ノ所至ノ方ニハ 隨テ向ヒ禮スベシ。

とあります。開導尊師が御病氣でゐらせられた時、井上伊三郎氏の親父井上吉之助氏が御助行に行

かれて、偕歸られる時、開導尊師は井上氏が表に出られる迄、其方に向つて合掌し、口唱して居られ

たといふことです。「所至ノ方ニハ 隨テ向ヒ禮スベシ」の御經文のまゝであります。この敬ひがな

くては速に御利益を頂くことは出来ません。ナーニお互さ、御苦勞々々といふ調子では覺束ない

ものです。其の井上氏の序に申しますが、大正五年の暮も押しつまつて數日、あと五日といふ日

に井上伊三郎氏がチブスに罹りましたので、私が信者と共にお助行に參つたことがあります。すぐ

病室である御寶前へ案内されました。もう診察も終り、何分病氣が病氣ですから是非入院をせねばい

けません。と、醫者が申渡されて歸られました。其間五六分でせう。然し伊三郎氏の母御は、どう

も御信者をお待せして相濟みませんと、詫びられました。而して、どうか謗法の點を充分御折伏下さ

る様御願申上ます。昨日私から伊三郎へ折伏いたしましたら墨にかちり付いて涙を流して懺悔いた

しましたが、猶貴師より御折伏を頂きたう御座います。どんな御折伏でも必ず頂戴いたします。決し

て舞ふ(退轉の)様なことは致しませんと、申されました。

私は開導師直々に御育を受けた信者は違ふなと心から隨喜致しました。今迄は何處へ助行に行て

も信者を待たせる位のことには有り勝です。けれども井上さと女の如く、生身の菩薩を御待せ申して相すまぬと言ふ敬ひを受けたことは始めてでありました。又どんな御折伏でも頂戴致します。決して舞ひませんとの決心を示された方を見ましたのも始めてです。かゝる信心前ですから其日の御看經で翌朝は一度熱が下り、入院の必要が無いといふ事になり、三日目に御禮言上致し、大晦日には歌舞伎座へ出張されて春興行の準備をされたのであります。其時の決心は御禮の時申されました。伊達さん私は歌舞伎座の營業主任をやめませうか、どうもこんな商賣をして居ると御奉公が出来ませんからと申されましたが、イヤそれには及びません。御奉公にも色々あります。芝居にも殿様もあれば下郎もある、又木戸番もなくてはならぬ。奈落で舞臺を回す人もなくては芝居は出来ぬ。あなたは貴殿の御奉公の仕方があると申したことがあります。あの時、必ず御折伏は頂戴致しますと申されたのですから、歌舞伎を御引きなさいと申せば、ハイと素直に御請けになつたに違ひないと思ひます。素直に御折伏を頂戴なさる人は、御利益も速かであるといふことを信じて頂きたい。御教歌に

あさましの我等の祈りかなへるはまたく御法の力なりけり
 奥深くわくる達者も足よわの爲にはもどれ法の山口

謗法を拂ふくすりのよくきゝて重き病のなほる妙法
 お折伏あまりつよしといふやうな御弟子檀那は一人もなし
 折伏をする人ならばわが祖師の乗りうつります御弟子なりけり

第四 御 講

一、御 講 御講は何の爲に御勤めするのですか。これはなかく一口にいへぬ程澤山深い譯があります。

講の字義 元來御講といふ講は佛立講の講の字であります。開導師は此の佛立講の講の字を解説教導の義なりと御指南下されてあります。解説はトキホドキで、譯のわからぬ事をトキホドいて下さるを解説と申します。教導はヲシヘミチビクであります。右は地獄道、左は極樂道と教へ導くが教導であります。されば信心上でわけのわからぬことをトキホドキ、信者の行くべき道をお教へ下さるの御講であります。随つて御講は佛立講の成り立つ上を取つて、極めて大切なものであることがわかりませう。開導師の御歌に

講中となつてお講へまゐらねば講の外なる人にかはらず

入講した人は講の中に入つたのですから講中でありませぬ。然るに一向御講席へ顔を出さぬといふは講の中に来ないのでありますから名前丈の講中、實際は講の内でない講の外の人、即謗法人と同様であるのであります。この御歌一首だけで如何に御講が大切なことであるかと伺はれます。

御講の歴史——御講といふものは現在勤めて居る様に開導尊師が始めからなさつてあつたものかと思ふと決してさうではありませぬ。いろ／＼の變遷があつたのであります。

抑も御講といふものは佛教が弘まる所何處でもあるものであります。されば佛法が日本に渡來して間もなく御講は始まつたものといへるのであります。然し法華の御講は日本では推古天皇の御宇（紀元一二六六）聖德太子が岡本の宮で法華經を講ぜられたのが始まりで御座いませう。其後勤操といふ僧が桓武天皇の延暦十五年に法華八講を始めて修し、翌々年（延暦十七年）傳教大師が叡山で法華十講を嚴修されたとあります。以來平安朝時代には隨分盛に法華經の講演が行はれました事は、平安文化の結晶たる諸種の歌集に法華經を詠じたものが頗る多いのを見ても知ることが出来ます。餘程御話を聞かねばこれを題として歌をよむなどは出來ないこととあります。又平安朝時代の諺に「生れたる

稚兒も法華經をよむ（大鏡）といふ言葉があつた位、とても／＼想像以上に廣く行はれたものと見えます。法華講説といふことが法華の御講の眼目でありませぬが、開導尊師が佛立講を安政四年正月十二日御結び遊ばした御趣旨は、この法華經は下根下機の今日とても講演する杯のことは出來るものではない。説き手はあつても聞き手が無い。御歌に

骨折りてむつかしきこと覺えたが、きく人のなき時は末法

法華經もいまは詮なし末代の我等のためは五字ばかりなり

されば法華講演に代ふるに法華の肝心題目の五字を講讀するが時機相應なりと御悟り遊ばされ、御題目のありがたい事を説き勧め給ふたのであります。此題目講讀の法席を御始め遊ばした頃の御講は振れ出しも十八日暮れ早々といふ風で、何時といふ様なキチンとした事ではなかつたのであります。それから御講の長さも三十分や一時間位でなく一晚中、事によると十二時過ぎて一時二時といふ様なこともあつたさうです。然しだん／＼下根下機の人々を救はねばならぬ御教へでありますから、改良に改良を重ね、時間も短縮しまして現在の様なつとめ方になつたのであります。

二、御講の功德

御講は御題目の有難い事を信者に説き聞かせるのが目的であります。これを

聴聞なされた方は信心増進されます。或は間違つてゐた考を改良されます。人の間違つた考が澤山な人に迷惑をかける様に、一人の信心改良が大勢の人々に利益を施す、其功德の限量は到底筆紙に盡せるものではありません。彼の法華經隨喜功德品に佛説かせ給ふた、五十展轉隨喜の功德に於て此間の消息を伺ふことが出来るのであります。初め聴聞した人は一人であつたが、其人が十人の人に傳ふると二轉が十人、十人が十人宛傳へれば三轉は百人、かくして四轉で千人、五轉で一萬、六轉で十萬、七轉で百萬、八轉で千萬、九轉で一億、十轉で十億となり全世界の人々を悉く結縁する事になります。五十展轉遊行かない内に全世界に普及せしむる事が出来ます。この宣傳の根本は初めの第一人からであります。されば一人に傳へるといふことは全世界に傳へると同様になります。かく澤山な人々に展轉して結縁せしめる功德は實に莫大なものと申さねばなりません。然るにこの大佛事を成就するのは御講願主の發起によるものでありますから、其の功德を悉く御講願主が頂戴することになるのであります。宗祖大士、南條殿御返事に

サレバ必ズヨミカ、ネドモ、ヨミカク人ヲ供養スレバ佛ニナルコト疑ヒナカリケリ。(二三八〇頁)
と仰せ遊ばされてあります。自身が演説や御法門をせんでも僧侶を供養して御法門をして頂ければ

れがやがて自身が御法門をしたと同様になるのであります。況んや御講席に於て多くの信者を供養し、先亡の諸靈及び法界の群靈を回向し、組内信者の異體同心を計る等皆御講の力と申さねばなりません。然し乍ら御講願主をして此の大佛事を成就せしむるに至るのは又參詣される人々があり、其の人々が隨喜して展轉するから驚くべき大功德聚となるのであります。若し十人の御講參詣者が十人なり聴聞し放しであつたならば、即ち轉教といふ事をしなかつたならば十人は何時迄行つても十人で、百人にも千人にもなりません。然らば一回の御講は畢竟十人の聴聞者に止まります。彼の十轉して十億の人々に響かしむるとは天地の差が其處に生じます。茲に於て、導師と願主と參詣者とそれに隨喜轉教といふことが加つて始めて大佛事が實現するのであります。此の極めて大事な轉教は、偏に御講參詣の人々に依て行はるゝことでもありますから、參詣の人々も大佛事の役者の一人であつて、大功德の山分に預る資格があるのであります。御教歌に

御弘通の御奉公とて外になし御講參りや又勤めたり

御講を勤むるものと參るものと、ともに共に積功累徳するのであります。

三、參詣者の心得

茲に注意せねばならぬことは、御講願主は兎に角十人參詣してもらへれば

十人に轉教した功德を頂きますけれども、參詣者にして若し轉教の御奉公を怠るときは大功徳の分け前を頂くことは出来なくなるのであります。御教歌に

謗法を見ながらせめず法門を聞いて傳へぬ信者何なる

聽聞して轉教するのでこそ御弘通の御奉公の一分に與り、供養をうくる資格があるといふべきであります。轉教せぬ人はたゞ自分だけの利益の爲に參詣し聽聞するのですから、自利の爲で御弘通の爲ではありません。當佛立講がどつち向きにならうとそんなことはかまはぬ。私さへ御利益を頂けばといふ二乗根性の信者です。かゝる人は

法門は耳に聞えず御供養は、けふは餅ちやと目に見えるなり

信心がそれて御供養とりとなり羽根はなけれどとび歩く也

といふ方面に屬する信者であります。従つて御講參詣の功德も僅な小利しか頂けません。されば御講參詣の第一の心得は御教歌を覺えること、それが出来ねば御法門の一節でも心に染めて「今日はこんな御法門があつた」と人に御傳へなされる心掛が肝要であります。

四、御講席は異體同心の熔礦爐

御講席は教務と信者、古い信者と新しい信者、役中と平信

者など種々の人々が狭い座席に膝をつき合せて一所に御看經をしたり、一所に御供養を頂戴したり、其の前後に信心上の話を交換するので知らず識らずの間に異體同心になります。これが一月に一度とか二度ならばですが、五度も八度も顔が合ふのですから遠い親類よりもどの位親しくなるかしれません。病氣だと聞いても名も所もろく／＼知らぬ人ですと心も動きませんが、御講席で始終面を合せて居る方ですと、どうもヂツとして居られなくなつて御助行に出懸ける様になります。又お互に氣風を知り合ふて、つまらぬことで睨み合ふといふことはありません。途を歩いてゐても、電車の中でもよく出逢ふ人は何となく心になつかしさを覺えるもので、つい一方から挨拶をして口をきく様になるものです。況や同じ御法を信じ奉つて始終膝つき合せる間柄ですから、自然と堅い異體同心を成すことが出来ます。異體同心なれば萬事を成すとは宗祖大士の金言です。何でも異體同心を成す様御講參詣を上げまねばなりません。

五、御講席は示威運動

今日は各種の團體、殊に労働團體では示威運動といふことをよくやります。一人々々では何が労働者かと一口にけなされましても、百人千人と纏つて居りますと強い力を感ずるものであります。それは第一に労働者自身、第二に周囲の人々であります。

當講の御信者が一軒だけボツネンとあります。夫が朝夕に拍子木を叩くので近所でうるさがられて居ます。井戸端會議の主題となつて来る。一般の人々が蔑視する様になる。信者自身も一人ボツチで心細く思ふて居る。そこに今度御講がつとまります。あちらからも此方からも尋ねて参ります。交番で同じ名前が五返も七返も尋ねられると、巡察も初は帳面をしらべるが、二度目からはすぐ教へてくれる。三度五度となると警官の頭の中に於て重大なる存在を有するに至る。又角の駄菓子屋でも其通り、物見高い所ではすぐ又近所の評判となる。時間が来ればお看經が初まります。上手な拍子木が威勢よく二三丁揃つて上る。心細い願主も心強くなる。近隣の人もこの威勢に押される様になる。この威勢が強い暗示であります。即ち示威運動となつて来るのであります。されば御講参詣は成るべく大勢が結構であります。大勢程威勢よく、大勢程押しが強くなります。

第五 御 法 門

一、法門の字義 御法門といふ法はノリと讀みテホン、ミチなどの義があります。佛様がお覺り遊ばされた處の眞理——其の御説き遊ばさるゝ處の教——は世間の人々が手本として従ふべき正しき

道であります。されば丁寧に申せば佛法といふべきであります。世間にもいろ／＼な法がありますからそれ等と區別する様に佛の法といふのですが、略してたゞ法といふてあります。門とは能通の義であります。殿堂に参詣せんとすれば先づ門をくゞらねばなりません。門はこゝを通れば殿堂に行けますよといふ事を表示して居るものであります。門を通らずに行かうとすれば堀を泳いだり、高塀を越えたりせねばなりません。それはなか／＼難多くして入ることは出来ません。矢張り門をあけて行くに越したことはありません。佛のお悟りに到達せんとするものも佛法の門をくゞらねばなりません。わかりやすく申せば寂光淨土に参詣しようと思ふても何方やら見當がつかぬ。其處へ一つ門がありますと、ははア此の門をくゞれば淨土へ行けるなといふことがわかります。法華經第二の卷には「佛教ノ門ヲ以テ三界ノ苦ヲ出テ涅槃ノ樂ヲ得」といふことが説いてあります。以テ佛教門は以テ佛法門と同義であります。此の佛法の門をくゞりさへすれば最早そこは現世安穩の庭園であり、其の庭園を歩いて行きますと極樂淨土の御殿に達します。

二、三つの門 此の佛法の門にいろ／＼あります。第一が權門であります。第二が迹門であります。第三が本門であります。權門とはカリノモンといふことで眞實の門ではありません。先づ例を

以ていへば、大きな神社にはとんでもない處へ一ノ鳥居が立つてゐます。その鳥居は大體の方向を示すもので、この門をくゞつたから直に拜殿の前に出るといふ譯ではありません。法華經以前の權教は恰も道に迷へる參詣者に大體の方向を指し示すと同じく、佛の悟りのごくあらましの入口を教ふるものであります。さればこれを權門と申します。次に二ノ鳥居が迹門であります。迹とはアシアトといふ義で足が本もの、其の足あととは本ものゝ形を能く寫したものであります。まだ眞實ではありません。宗祖大士が本門は天月、迹門は池月、本門は木の如く迹門は影の如しなど示されてある御心はこの意味であります。處で本ものゝ門によく似たのが迹門であります。まだ本殿へは程があります。第三に本門、根本の門なる故に本門といふ。この門さへくゞれば直に佛様のまします本宮に通達することが出来るのであります。

三、而復狹少　さて彌と根本の門にかゝりました。門をくゞるには信心といふ姿勢で行かねば入ることが出来ません。法華經方便品に「信ヲ以テ入ルコトヲ得タリ己ガ智分ニアラズ」と仰せられてあります。信心といふ姿勢はどんな風かと申せば、勝手氣儘に歩かないで佛様の御指南といふ號令通りにキチンとする事です。なぜ氣を付けの姿勢でなくては入ることが出来ぬかといふと、ごく狭

い門であるからです。法華經譬喻品に其ノ家廣大、唯ダ一門ノミ、而モ復タ狹小とあります。不信謗法のものが入ることが出来ぬから狭いといふのであります。決して本來より狭いといふ譯ではない。寧ろ不信者は自分で門を狭めるのであります。譬へて申せば不孝のものは敷居が高いといふのと同じであります。不孝な奴が飛び出したあとで親が敷居を高くしたといふ譯ではないが、不孝のものにはそれが高く思はれるのであります。此の垣一重が鐵の門より高く心からといふ淨瑠璃もあります。押さばつぶれる柴の折戸も不孝な娘には鐵の高い門に思はれるのであります。廣い門も醉拂ひの千鳥足——ヒヨロ、ヒヨロ、ヒヨロツヒヨロと歩く人にとりては狭くて鼻つらを打つてばかり居りまして、どうしてもスーツと入ることが出来ません。何だ此んな狭い門をこしらへて、もつと廣い門を造れなどたわけ言をいふて居ります。謗法々々と八ヶ間敷いふ、そんなに言はなくても大慈大悲で通してくれたらよささうなものだと、自分勝手な屁理窟をつけて經に妙なしと謗る者が、世間に澤山あります。

四、聞いて覺えよ　法の門をくゞるとは佛法の掟をよく守ることです。よく守る爲にはよく聞くといふことが大切であります。よく聞かすによく守るといふ人は佛の御教を守るのでなくて自分考

へをよく守る御方であります。

法門をきかぬ間は凡夫にて、佛の智慧の出るよしなし

との御教歌の如く、教へて頂かねば自分考へしか無いのですから、後生大事と守つて居てもそれは結局我見を執すといふ恐しい罪障をつくることになりすのみです。佛の御悟りの智慧を戴くのは御指南であります。御講席で承る御法門であります。御指南通り修し行するを法門をまもると申します。御指南通りの信心をしようと思へばどうしても御法門を覚えねばなりません。唯御講席へ顔を出すといふだけでは御講参詣の所詮がありません。よく心して聴聞して心に染め付けねばなりません。御教歌に

法門はきゝつるだけを覚えよや、心にそまるたびをかさねて

御法門いくら聴聞したとて、覚えぬときは何の詮なし

然るに折角参詣し乍ら御法門前に歸る人あり、或は御講席に身はあり乍ら聴聞せぬあり、聴聞はして居れども居ねむりなどして心に染まぬあり、開導尊師の毎講爲讀聞續篇に

サテ御講席ニテイネブル者ハ謗法ナリ。聞クコトヲ好マザル故ナリ。マタ御法座ニ進ムコトヲイヤ

ガル者ハコレモ聞ク事ヲ好マズシテ参詣ハスル人ナリ。此ノイネブリト座ヲス、マヌトハ、此ノ二人ハ見付次第退席サスベシ。以上
かゝる信者はえてして

法門は耳に聞えず御供養は今日は餅ぢやと目に見ゆるなり (御教歌)

の醜態を演ずる程度の信心前であります。

五、聴聞の心得 開導尊師御指南、開化要談(名)に

一日愚人ト語ヘバ一日ノ愚ガウツル。一席御法門聴聞スレバ大ナル功德ヲ得ル。其キク所ヲ忘レヌレバ千金ヲオトシタルヨリモ損ナリ。コレヲ知ル人信者ナリ。云云。

御法門聴聞の功德の莫大なる事は、一句魂に染むれば無量の罪障頓に消滅す、といへる言葉を以て伺はれるのであります。一生の間現世安穩に行くべき道を教へて頂くのですから、聞き漏しては大變な損だと思ひ、一心になつて聴聞せねばなりません。然るをあの人は御法門が上手だ、あの方は下手だと、丸で講釋の席にでも行つた様な氣持で御法門聴聞して居る人がありますが、大變な心得違ひであります。第一それでは損です。千金を落したるよりも損であります。一字千金二千金と申す文句が

ありますが、御法門は一字や二字や五字や十字ではありません。さすれば千圓二千圓處か何萬圓も頂ける處をウツカリして居た爲に頂け損うた譯であります。かく思へるお方が眞實の御信者であります。尤も御法門は上手に説かなくてもよしといふ譯ではありません。出来るだけ上手に説くが教務の方の務めでありませんが、それは俗にいふ「樂屋の沙汰」でありまして信者側の考ふべき事ではありません。信者としては一心に聴聞し、これを實行するといふ處に心を置かなければなりません。御教歌に

聞く度にいつも始めの心地してめづらしときけ妙の御のりを

始めて聞く御話、めづらしい御法門は上手下手にかゝはらず聴衆を引付ける力のあるものです。これを言換れば、實質のあるものは形式の如何に關係なく、滑らかに心の中に流れ込むものであります。扱其の實質といふ――始めて――珍敷――のは話すよりも聴くものゝ方にあるので、説く人はこれで幾十返目であつても、聴く人は始めてといふ場合は随分澤山あるものです。其處です。信者は心の持ち様によりましては何時も始めて――めづらしく聴聞の出来るものであります。それ故にメヅラシトキケ、と仰せになつてあるのであります。きくといふのでなしにキケと命令詞になつてあります。即ち御指南であり御折伏であります。イヤ同じ事を聞いて夫で始めてと聞く事は出来ませんといへ

ば御指南にもとるのであります。信者ははじめてと聞ける様に努めねばなりません。扱どういふ心持であれば同じ御法門を始めてと聞くことが出来るかと申せば、承る御法門を一々實行する、せねばならぬといふ決心を持つこととあります。この決心が出来ますと、いつもはじめの心地してめづらしと聞ける様になります。一つ其決心を起して下さい。必ず此の御教歌の通りになることが出来ます。

六、或る信女の話

雜寶藏經に佛様がお説きになつてあることですが、或處に一人の信女が

ありました。法を求むる志厚く遂に一人の僧侶を請待致しました。處で佛在世の請待は誰某と名指して御招き申すことは許されません。信者からの懇請があればお弟子方が順番で一人なら一名、三人と申出れば三名といふ風に出掛けます。今女人の御請待に依て行かれた御僧は、至つて愚な老僧でありました。御法門などとても出来ないお方でありました。それでも順番ですからお出掛けになつて丁重な御供養に預りました。御供養が済むと御法門があるのが例でありますので、女人は一心に一句も聞き落すまいと耳をすまし心を静めて坐してゐました。然るに老僧は前述の如く、御法門など出来る方でないので殆んど困じ果てました。御供養は頂戴した、ハイ左様ならといふ譯には行かぬ。御法門を聴聞したいばかりに御供養申上げたのですから、どうしても説法せねば歸れないのであります。

さりとして説法することは出来ないのです。モガ／＼して居ますと、施主の女人は彌々之から結構な御法門がある事と至心に御待ち申上げて居る。こちらは益々困り入るのみである。どうして逃げ出さうかしらんと考へて居ります。女人はそんな事とは少しも思はず益々一心になつて居ります。然るにどうした隙を見出したか、老僧は燕の如く身を翻しサツト逃げて仕舞ひました。然し女人は何も知らぬものゝ如く猶一心にお待ちして居りました。處が不思議にもこの一心になつて居る功德によりて其女人は其座に於て須陀洹果といふ尊い悟りを得られました。悟りを得た女人は漸く老僧の御歸りになつたことに気がつき、偕も難有き事である。あの老僧の御蔭で須陀洹果を證得することが出来た。ああ結構な事ぢや。どうかも一度御目にかゝつて御禮を申上げねばならぬと、それからいろ／＼手をつくして尋ね巡りました。老僧はこれを知つて大に驚き逃げかくれました。けれども遂に尋ねてお目にかゝつて貴僧の御蔭でかゝる尊き悟を得たと御禮を申しました。自分は何も法門をせずたゞ喰ひ逃げをしたのであるのに、信女の一心一念隨喜の功德が斯程にも尊い果を結べるかと、至心に懺悔し、深心に隨喜された爲に、此の愚な老僧も亦須陀洹果を得られたといふことであります。何一言も説かないのに、唯至心に隨喜せる一女人が結構な御利益を頂かれたのであります。若し此

の女人末法にあらば、御教歌を一度なりと讀上げられただけでも大に隨喜される事と思ひます。況んや如何に下手なりとも御法門を聽聞して上手下手の沙汰をされる氣遣はありますまい。

七、御法門知りたりげ

宗祖大士の上野殿御返事に、

日蓮ガ弟子等ノ中ニナカ／＼法門シリタリゲニ候人々ハアシク候ゲニ候。(一七一六頁)

御法門を知つたか振るのは悪いぞといふ御指南であります。知つたか振るといふことは御法門はチヤント心得てゐますよといふ奴が鼻の先にぶら下つて居ることです。知つてゐますよといふのが悪いなら御法門は聽聞しても覺えない方がよいのですかと思ふ人があるかも知れぬが、御法門を覺える事と知つたか振るのは同じではありません。この知りたりげといふ「げ」は氣配とか氣色とかいふ意味の語で、いはゞそんな風をするといふ事です。御法門は覺えて之を實行するのが肝心であり、又聽聞の目的であります。然るに兎角行ひが伴はずして而も知つてゐるぞといふ風をする。當今は古法華に多く見られる圖で、これらはやがて現當二世の利益を失ふ者であります。開導尊師の御教歌に

御法門知り顔したる高なぐれ、あはれ無間へふみかぶるらん

聽いた御法門は耳に残して置かずに實行に化して仕舞ふのです。米を酒に、將た餅に化して仕舞ふ。

其處には最早米といふものはありません。米の氣はないのです。それと同様に承つた御法門を直に行ひに化して置けば知りたりげ杯の心は出るものではありません。知りたりげが出るのはまだ酒や餅になり切らない米なるものが残存せると同様、實行化されざる聽聞があることを證據立てるものでもあります。實行せざる聽聞は聽聞せざると同一であります。否やもすれば此の残存物が知りたりげとなつて來易いのであります。そんな事は心得て居ますと反撥的に出て來るものであります。茲に至つて古法華といふ名稱がつく、哀れにも無間地獄行の看板を出したことになります。天台の御釋に名字即の位を即開即行(玄義)とあります。即ち聞いて即ち行ふ。聞いたら行ふといふのが末法只今お互相應の修行であります。聞いて置く、承つて置く、考へて見ませうといふことは、許されないことでもあります。

第六回 向

一、回 向 御講を勤めて御回向をして頂く、其回向といふは死んだ人の追善をすることであるのはいふ迄もないことであるが、なぜその事を回向といふのかといふ事を、よく心得て置かない

と追善の目的を達することが出来ないであります。

回向とは回はマワス、メグラスの義で向はオモムキ、ムカフの意であります。一言にいふて見れば「此方のものを回して向ふへやる」といふことであります。大智度論には回向トハ少物ヲ王ニ上ルガ如ク、聲ヲ回シテ角ニ入ル、ガ如シと説いてあります。自分の手許にあるものを王様に差上げる。自分で用ふれば只それだけの物でも、王様に進上すれば王様の御喜びを頂いてやがて立身出世の基となる。又聲を出して叫んで見た所で一町先まで響けば大聲、それを法螺貝に吹入るととても遠方まで響き渡る。それと同じで自分の爲に修する功德、即ち自利の爲にと願ふのは功德が芥子程のものであるが、其の修行を他人の爲にすれば、少物を王に上る如く聲を螺に吹入れる如く、功德利益の響きはとても廣大であるといふのであります。この他人といふのが志す所の精靈であれば今日一般に用ふる回向の義にびつたり合するのであります。即ち自分の心願成就の御願ひよりも、死んだお方の追善菩提の爲にと口唱すれば、功德莫大であるのであります。妙講一座で申しますと、願クハ受持口唱シ奉ル本地本法ノ功力ヲ以テ法界群靈(に回向し其の)離苦得益佛果菩提(を願ひ又)門流持經者(の面々)に回向し其の(異體同心信心不退、現當二世心願満足)を祈り更に(講内祈願病者の面々)に

回向し其の) 當病平癒、病即消滅(を請ひ最後に) 一天四海(に回向し其の普天の下四海の同胞悉く) 皆妙法ニ歸する様に受持口唱の功德力を趣き向はしめんと念ずる。それが當講信者の一般的回向であります。其の中別して某精靈に回向するといふ場合のあることは申す迄ありません。

二、回向の方法 受持口唱し上る本地本法の功力を死なれた兩親(又は妻子等)に回向せんとする時はどうしたら先方に無事に届きませうか、といふお尋ねに御答へ致します。

よく世間にあることです。今日はお父さんの三年ぢや、お父さんはお酒が好きだつたからといふてお墓の頭からお酒を掛ける人があります。親子の情愛から申せば尤もなことです。が、墓に蒲團も掛けれず、などいふ謬もある通り、お墓にお酒を上げたからそれでお父さんの口に入ると思ふたら間違です。もしそれが行く位なら冬はお墓に蒲團をかけ、夏は蚊帳を釣つて煽風器でもかけるといふ風にせねばなりません。そんなやり方では回り向はすといふことは出来ません。

これをお話するには目連尊者のお母さんのお咄しをした方が早わかりです。かいつまんで致します。目連尊者の母御は青提女と申す至つて慳貪な方であつた。目連尊者が母御の死後其の果報を神通力で見ますと哀れにも餓鬼道に墮ちて苦んで御座る。世にありし時、いと我子の爲にはかり目や升

目を盗むといふ風なやり方をして商賣をされた罪の報ひです。

やせにけり哀れ餓えたる餓鬼なれや子を思ふ道も忘れたりけん (日肩上人)

うゑの爲にやせ衰へて御座る。食を求めても一滴の水だに得られず、たゞ空しく苦しむのみである。可愛い、目連尊者を成人させる爲に、人の口をひねる様にして残した財、それも皆あだとなつたばかりでない。其のいと可愛い、目連尊者の事すら苦しみの爲に忘れ果てたであらう。其の哀れな姿を見た目連尊者は御飯をと差上げると、アラうれしやわが子よと飯を取つて口に入れんとすれば飯はバツトもえ上り焔々たる炎となつた。目連尊者は直に神通力を以て雨を降して炎を消し止めんとすれば炎は恰も油を得たるが如く却て盛になつて母御の身を焼く。目連尊者は全く施すべき道知らぬ。走り歸つて釋尊に事の由を申上て救助の方法を御尋ね申した。其時佛は多くの聖僧を供養せば其の回向力によりて母は苦しみを脱るゝ事が出来ると仰せ遊ばされた。其處で目連尊者は安居自恣の日を以て衆僧を供養した。其の功德によりて目連尊者の母御は天上界のめでたい果報を得られた。これがお盆の初まりだと申す事です。

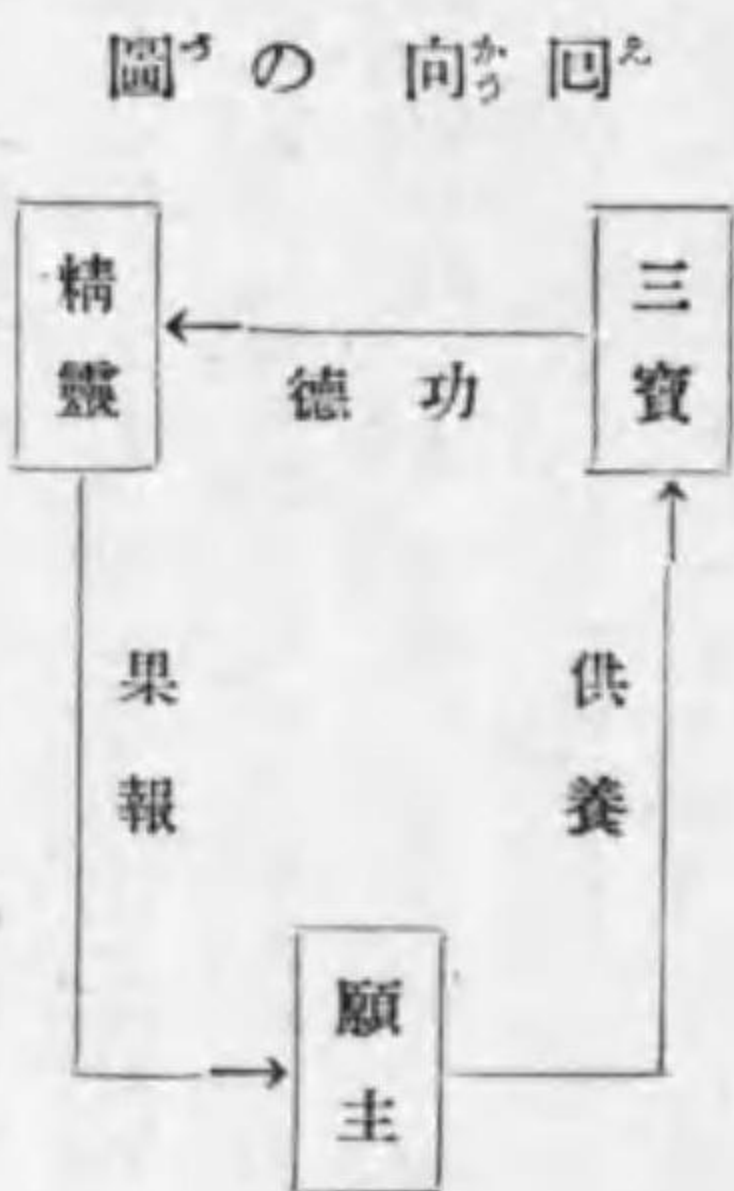
以上は孟蘭盆經を引いての宗祖大士の御指南(一五九四頁)に基いて述べたのであります。目連尊者

は小乗の法を修行して神通を得られた。其神通を以て母の苦を救はんとしたのは、恰も人間が酒をお菓にぶつかけると同一で一向き、目はなかつたのです。日蓮尊者も回向といふことをよく御存知無かつた爲めでせう。回向といふことは志す死者に直に與へることではなくて、其の死者には功德といふものに形を變へて向はすのであります。いはゞ直線的に行かずにぐるつと迂回して行くものであります。何處を回るかと申せば一度御本尊様の中を通つてから目的の方に向ひます。御飯を死んだ方に上げたと思ふたら、其の御飯を位碑の前に置かずに（置けば目連式です）御寶前に御供へするのです。三寶を供養するのです。其の三寶供養によつて其の御飯が功德といふものに變るのです。此の功德であると餓鬼は愚地獄の釜の底迄も無事に届くのです。わかり易い例を出せば可愛い、赤ん坊に鯉めしを食はせたいと思ふたら、其の鯉を母さんにたべさせるのです。さうすると其鯉がおいしいおつぱいになつて赤チャンの口に易々とはいつて行きます。そんな回りくどい事は面倒だと生れて半年もたぬ赤ん坊にぬる／＼した油の乗つた鯉を食はせるお父さんがありますか。どうでもお母さんを経由せねばならぬ。それが母さんを回つて赤ん坊に向ふといふ御回向の義であります。大人の口に合ふものでも子供には頂けませぬ。人間世界の食物を冥界の精靈に施したからとて通用せぬのは當然であります。

す。

功德は何處までも巡るものであります。かく三寶に捧げた供養はやがて功德と變じて志す精靈に向ひ、更に轉じて果報となつて回向願主に回り向ふのであります。

圖示すれば左の如くであります。



此世にて現に果報をうると聞く信者に供養出来るだけせよ

この御教歌は此の圖の直接の説明ではありませんが、此圖と御教歌とを併せ見るとピッタリ一致するでせう。よく御覽下さい。

三、塔婆

御回向の時には塔婆を建てます。回向には塔婆はつきものゝ様になつて居ます。それで塔婆の事を少し書いて見ませう。

塔婆とは略稱で叮嚀にいへば率塔婆と申します。或は極く略して塔といふこともあります。五重の塔、七重の塔などいふのがそれでありす（何れも梵語であります）。翻譯して靈廟とか方墳とか圓塚とか又は功德聚など申します。死んだ人又は生存者の徳を顯揚せんが爲に土石を高く積み上げ、其の中に物又は骨等を安置し仰ぎ拜せしむる處をいふのであります。佛様の御在世の時、祇園長者が佛様の諸國遊行の間尊容を拜し奉る事が出来ないのでわびしく思ひ、何ぞ御身についた物を頂いて渴仰の念を癒したいと願はれましたので佛様は爪と髪とを御與へ遊ばされました。長者はその御爪と御髮毛とを以て塔を建て、禮拜されたといふことが十誦律といふ本に出て居ります。これは今日でいへば記念品（又は生形見）を頂いて記念碑を立つる様なものです。御滅後に於ては四處起塔と申しまして一に御誕生地、二にお悟りを開かれた處、三に初めて御法門を遊ばされた處、四におかれ遊ばした處へそれぞれ塔を建て、佛の偉大なる御徳を顯揚しました。今日印度に現存せるもの、及び近頃發掘されたもので有名なのはサーチの大塔とか、佛陀伽耶の大塔、健陀羅の塔などあります。

四、多寶塔

一般にいふ塔婆（塔）は上述の義で略ぼよいのでありますが、法華の塔婆は更に説明を加へないと義が盡せないであります。所謂多寶塔であります。法華の眞實を證明せんが爲に遙々東方寶淨世界の多寶如來が大七寶の妙塔に乗せられて、靈鷲山法華説法の砌りに出現せられました。高さ五百由旬、廣さ二百五十由旬と申す大塔であります。一由旬が四十里ですから高さは二萬里、横は一萬里といふ廣大なものです。而も金銀瑠璃等の七寶を以て飾られてあります。此の不思議な塔の中には多寶如來がましますのであります。

やがて釋迦尊によりて此の妙塔の扉が開かれますと、中より多寶佛は釋尊を御招きになります。即ち空中にかゝれる塔の中へ釋迦如來は御這入りになりました多寶如來とならび坐し給ふのであります。これを二佛並座と申します。それから靈鷲山の地上にありて今迄御法門聽聞の御弟子達をも、佛の神通を以て皆虚空に在らしめ、續いて御説法遊ばされました。即ち虚空會であります。我等が朝夕拜し奉る御本尊様はこの虚空會の御有様、二佛並座の御儀を日蓮大士の靈筆を以て圖顯せられたるものであります。觀心本尊抄に、

其本尊ノ體タラク本時ノ娑婆ノ上ニ寶塔空ニ居シ、塔中ノ妙法蓮華經ノ左右ニハ釋迦牟尼佛、多寶

佛、釋尊ノ脇士ハ上行等ノ四菩薩、文殊彌勒等ハ四菩薩ノ眷屬トシテ末座ニ居シ、迹化他方ノ大小ノ諸菩薩ハ萬民ノ大地ニ處シテ雲客月卿ヲ見ルガ如シ云々。(九四〇頁)

本時ノ娑婆とは靈鷲山です。寶塔空ニ居スとは多寶塔が虚空の中に住することです。塔中ノ妙法とは多寶塔中に御題目様がましますをいふのです。この塔の中心にお題目様がましまして其れを守護し奉る如く左右に釋迦多寶二佛座を並べ本化上行、無邊行、淨行、安立行の四菩薩威儀を正し、其の下々に十方世界ありとあらゆる佛菩薩、天人鬼神等眷屬として居ります。これが我等の御仕へ申す御本尊のていたらくであります。而も多寶塔中の儀式であります。而も私達が御建て申す御塔婆といふのはかゝる意義深遠なる妙塔であります。

五、塔婆の様式

塔婆を建立する場合は其材料によりて種々様式を異に致します。たとへば家を建築するのでも木造建築、石材建築、鐵骨建築とそれ々特有なる形を持つて居ります。されば圓塚といふ風に圓形のもあれば、方墳と申して四角なものもあります。いはゞ國技館式のもあれば、上野の五重の塔といふのもある譯です。印度阿育大王は佛滅後三百年頃に自分の領内に八萬四千の寶塔を建てたといふことが歴史に記されてありますが、それ々特殊の形を有して居つたことを想像され

るのであります。

偕末法五濁の世に於て信心を致すことさへ困難であるのに、塔を建て、本尊を供養することはなかくあり難いことでもあります。されば志ありて建立するものは、其の形式と材料の如何を問はず、皆佛の歡喜措く能はざる處のものであります。従つて功德莫大なることいふ迄もありません。今この功德が如何に尊貴なるかを經文に照して次に述べて見ませう。

六、起塔供養

法華經第七の卷如來神力品に曰く、

若シハ經卷所住ノ處、若シハ園ノ中ニ於テモ、若シハ林中ニ於テモ、若シハ樹ノ下ニ於テモ、若シハ僧坊ニ於テモ、若シハ白衣ノ舍ニテモ、若シハ殿堂ニ在リテモ、若シハ山谷曠野ニテモ、是中ニ皆塔ヲ起テ、供養スベシ。

經卷所住ノ處とは法華經を安置する處といふことです。法華經とは略稱、即ち妙法蓮華經を安置する處、夫は庭園であらうと、森林の中であらうと樹木の下であらうと、僧侶の住宅であらうと、白衣(信者)の舍であらうと、御殿であらうと、山や谷や廣い野原であらうと、其の何れを問はず何處でもよいから塔婆を建て、之を供養し奉れとあります。親會場の中でも御講席でも御幕でも、何

處でも御塔婆は建てられます。而して其の功德に就ては次下の經文に曰く、

所以ハ何ン、當ニ知ルベシ。是ノ處ハ即チ是レ道場ナリ。諸佛此ニ於テ阿耨多羅三藐三菩提ヲ得、

諸佛此ニ於テ法輪ヲ轉ジ、諸佛此ニ於テ般涅槃シ玉フ。云々。

所以ハ何ンとはその譯はといふと、と申すことであります。この塔婆を建てた處は取も直さず道場

である、道場とは道ノニハと讀みます。如何なる道かと申せば成佛の道であります。妙法の塔婆を建

てた處が即ち成佛する道を信行する處であります。十方世界のあらゆる佛達は皆此の妙法蓮華經の塔

婆建立の處に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得られたのであります。阿耨菩提とは大なる悟をいひます。

即ち佛様は皆此の處で悟りを得られたのであります。換言すれば成佛されたのであります。又諸佛は

此の塔婆の前で法輪（御法門の事）を轉説されたのであります、又佛様は此の處で御入滅遊ばされた

のであります。般涅槃とは入滅と譯します。これを約言しますと佛の生涯は始中終、妙法の塔婆から

離れない。妙法の中に成佛し、妙法の中に説法し、妙法の中に御歸り遊ばされるのであります。

妙法蓮華經の塔を殿堂の中に建立すれば其處は修行の道場として我等は親會場と呼びます。白衣

たる信者の家にありても小規模乍ら道場であるには相違ありません。妙法五字を石に彫り付ければ石

の妙法塔、木に記せば木の寶塔であります。この故に石塔の表にも御題目を顯し奉り、木の板にも

妙法を書し、位牌にも妙法と略記し奉る。何れも起塔供養の意を離れません。昔阿育大王は八萬四

千の塔を建立されたといふことですが、今東京の都には至る所に妙法の本尊が安置されてあります。

即ち多寶塔の建立であります。或は墓地に詣れば妙法蓮華經の石塔が林立してあります。其の又間に

はお題目の木の塔が無數に群立してあります。恐らく阿育大王の八萬四千の數よりも多く、且つ功德

は勝れてましますと思はれます。なぜかと申せば阿育大王の塔には佛骨のあるものもあらうし、無いの

もあらう、よし皆悉く佛のお骨を安置してあつても、其の佛骨よりも尊いものが此の墓地の塔には

こもつてましますのであります。法華經法師品に曰く、

しませば佛の舍利をも安置する必要なしと説き置かせ給ふて有ります。又宗祖大士は塔婆を切るは出佛身血のとがありと御示し遊ばされてあります。出佛身血とは五逆罪の一で佛の御身より血を出す罪であります。妙法の塔婆は生身の佛でましますからかく仰せられになつてあるのであります。決して木の切れだからとて粗末に思ふてはなりません。

七、我等の塔婆

お互の建立する塔婆の表にはお題目様が顯されてあります。たゞ四角な木の棒、薄い木の板には相違ありませんが、お題目様がましますから多寶塔と同じであります。多寶塔の尊いのは其の中央に妙法蓮華經が勸請されてあるからであります。様式の如何や材料の高下が妙法の光明を左右するものではありません。否、貧弱なる我等の資力を以て此の木塔を建立し奉る。貧者の一燈否一塔必ずや富貴なる阿育大王の八萬四千の寶塔に百千萬億倍するゝ功德を戴くことを確信して疑ひありません。

猶我等の塔婆には「爲」といふ字の下に戒名や年回等が記されてあります。是はこの起塔供養の因縁を記すもので塔それ自身には無くてならぬといふものではあります。恰も佛像を造立し戒壇を建立するは矢張某靈の佛果菩提の爲めとか、當病平癒の御願とかの目的であると同様であります。宗祖大

士の日眼女釋迦佛供養抄(一八三二頁)に

今、日眼女ハ今生ノ祈リノヤウナレドモ教主釋尊ヲツクリマイラセ給ヒ候ヘバ後生モ疑ヒナシ。

日眼女と申すは四條金吾殿の奥方であります。何か心願ありて釋迦佛を造立し奉つたのであります。かゝる場合に必ずしも御尊像に「心願成就の爲」と書かなくてもよい譯であります。それと同じで起塔供養は何も志す精靈の戒名を必ず書き記さなくてもよいのであります。便宜上書いて居ります。然し無くてはならぬものではないことを知らねばなりません。これはやゝもすれば起塔供養は戒名が主であると思ひ誤り、肝心の御題目を書顯し奉るといふ大事に、重きを置かないものがあるので念を入れて申すのであります。又塔婆の裏に御經文を書きます。これは起塔供養の讃歎の爲であります。

最後に宗祖大士の卒塔婆建立に就ての御指南を拜讀致します。

ミマカリヌル幼子ノ娘御前ノ十三年ニ丈六(一丈六尺の事)ノソト・バヲタテ、其面ニ南無妙法蓮華經ノ七字ヲ顯ハシテヲハシマセバ、北風吹ケバ南海ノイロクヅ(魚族)其風ニアタリテ大海ノ苦ヲ離レ、東風キタレバ西山ノ鳥、鹿其風ヲ身ニフレテ畜生道ヲマヌガレテ都率ノ内院ニ生マレン。況

ンヤカノ卒塔婆ニ隨喜ヲナシ、手ヲフレ眼ニ見マイラセ候人類ヲヤ。過去ノ父母モ彼ノソトバノ功德ニヨリテ天ノ日月ノ如ク淨土ヲテラシ、孝養ノ人並ニ妻子ハ現世ニハ壽ヲ百二十年持テ、後生ニハ父母トトモニ靈山淨土ニマイリ給ハン事。水スメバ月ウツリ、ツヰミヲ打テバヒマキノアルガ如シト思召シ候へ等云云。此ヨリ後々ノ御ソトバニモ法華經ノ題目ヲ顯ハシ給へ。(一九二三頁)

形式は極めて簡單です。木の板の表に法華經の題目を顯はしてあるだけです。併しそれは我等の目にうつる簡單さです。佛の御目から御覽になれば金色の光を放つ七寶の妙塔、十方三世の佛菩薩の集まらせ給ふ大寶塔です。

第七 御供養

一、御供養

御講には御供養はつきものになつてゐますから今度は其の話を致します。

先づ供養といふ文字上の解釋を致します。三寶を資養する爲に香、華、燈明、飲食、資財等を供へ奉る故に供養と申します。詳言すれば、佛、法、僧の三寶に香とか華とか、お燈明とか、飲食のものと、か、其他種々のものをお供へ申してお養ひ致すから供養といふのであります。佛様に對しては言

ふ迄もなく皆様が毎日なされてあります様に御花を献じます、香を立てます、御水及びお盛物を供へます。かくして三千年以前の衆生が教主釋迦牟尼佛をお養ひ申上げた如く末法今日に於て御仕へさせて頂くのであります。僧にも亦其の飲食、臥具、衣服等を供へ養ひ申さねばならぬことはいふ迄もないことであります。然らば法寶はと申しますと、法には法命と申して御法にも命があります。或は法身の慧命とも申します。此法は食物や着物では養へませんが、法味ならば御養ひの料となるのであります。法味とは妙法口唱、講讀の功德、恭敬禮拜、弘通發展であります。

次に供養の種類はいろいろに數へられてありますが大別して財供養、法供養の外を出でません。財供養とは物質的のものを供養することです。香、華、燈明、衣服等であります。法供養は如説の修行を致して衆生を教化利益すること佛様の尤も御喜びになる精神的御供養であります。されば佛様には法味とも申すべきであります。此の二種を或は財施法施などと申します。僧侶は法施、在家は財施と一般では區別されてあるのですが、當講では信者必しも財施(財供養)のみに止まらず、大に如説修行、教化折伏等の御供養を致される。僧侶また説法教化の法施のみでなく、時に金品の寄附等も應分にされてあります。然しとても信者の財施には比することも出来ません。又信者も僧侶の法施に

は遠く及ばないのであります。先づ僧は法面財裏で、信者は財主法従とでも申したらよからうと思ひます。

序ながら申して置度のは信者の中で熱心なお方は、或は己れは僧侶以上に法施をして居ると思はれる方があるかもしれませぬが、それは増上慢になりますから、そんな考は微塵も持たぬ様にせねば罪障になります。如何に熱心でも營業が本職で傍ら御奉公であります。僧侶は身も心も法の中に打込んで榮枯盛衰を法と俱に致して居りますので總ての點で非常な相違があります。

細別を致しますと利供養、敬供養、行供養の三種に別つた名目もあります。利は財供養に當り敬は讃嘆、奉仕等で行が修行ですから敬、行は法供養を一是佛に對し他は衆生に向つて別つたものであることが伺はれます。御奉公はよくされるが、内での御看經が足らぬ御方は行供養はするが敬供養はしませんといふ人です。之に反し御奉公は一寸もせん只自分の家で御看經一方といふ方は敬供養専門で行供養はさつぱりといふ人であります。佛様を敬ひお仕へ致せば其の御喜びは申すまでもありませんが、佛の娑婆出現の目的は衆生教化にあるのですから、之れを御味方申上げる所に更に大なる御喜びを頂ける道理であります。中庸にソレ孝ハ人ノ志ヲ繼ギ、善ク人ノ事ヲ述ブルモノ也とあります。

たゞ養ふだけは下の孝です。養ひ且つ敬ふは中の孝です。更に父祖の志を繼ぎて其事業を盛ならしむるが最上の孝であります。信心も亦孝の心掛と同じであります。

一、十種供養經

法華經の事を翻譯者である羅什三藏が十種供養經と申初められてから、法華經の別名となつたさうですが、其十種とは何かと申しますと、一華香、二瓔珞、三抹香、四塗香、五燒香、六繪蓋、七幢幡、八衣服、九妓樂、十合掌恭敬であります。華香は華と香であります、こゝでは一つに數へてある所や、あとから種々の香がある所から華より薰發する香と解したい。即ち御花と其香（花が主となつてゐます）。瓔珞は玉を編んで身をかざるもの。抹香、塗香、燒香の三は大智度論に乾香燒クベシ濕香塗ルベシ抹香及ビ華散ズベシとあります。沈檀を粉抹としたものを佛様や寶塔に散らして供養すること曼陀羅華を散するが如くすることを抹香といふ。供養せんとするとき自分の身體や手などに濕香を塗り、以て身より發する臭氣を消除し不敬を避くこれを塗香の供養といひます。今で申せば御寶前に出るとき香水をぬつて御供へものをするといふ様な事でありませぬ。大智度論に天竺國熱、又身臭ヲ以テノ故ニ香ヲ以テ身ニ塗リ諸佛及ビ僧ヲ供養スとあります。燒香は今日の御寶前によき香を立て、供養し又以て他の臭氣を除くと同じであります。繪蓋は絹布を以て張れる大蓋

であります。蓋は日覆で塵や雨などを防ぐ爲にするもの傘の類であります。寺の本堂の導師座の上にあるのを天蓋と申しますが天人來て供養をして捧ぐるものであるから天蓋といふとあります。先づあんなものと思へば大した間違はありますまい。幢幡は龍頭の竿などにかけたる長帛の旗の類で、是も寺の内陣の柱懸などになつて居ます。衣服は常の如し。妓樂は女の藝であります。佛在世では天女の奏する樂でありましたらう。合掌恭敬は手を合せて禮拜し奉ることです。以上の十種を以て佛及び御弟子を供養されたことであります。

扱此の十種供養は前に述べた利供養、敬供養はあるが、行供養を缺いて居るではないかと難する人があるかもしれぬが、それは前後の御經文を拜すると其の疑は解けるのであります。第四の卷法師品に曰く、

人アリテ妙法華經ノ乃至一偈ヲ受持シ讀誦シ解説シ書寫シ、此ノ經卷ニ於テ敬ヒ視ルコト佛ノ如クニシテ種々ニ華香、瓔珞、抹香、塗香、燒香、澆蓋、幢幡、衣服、妓樂ヲ供養シ乃至合掌恭敬セシ云云。

受持讀誦は自分の行、解説、書寫は化他の修行、已上が行供養に當ります。敬視如佛は敬供養、華

香以上利供養となるのであります。財、法の二施は車の兩輪、鳥の兩翼でありまして、決して一方だけでは役に立ちませんから、此の二種の供養を忘れぬやうにせねばなりません。尤も其の中の財が正意で法が傍意となる人と、法が主で財が従となる人とがあります。各自の境遇によつて變りますが兩面は必ず具へねば成佛は出来ないと思はねばなりません。

三、信者に供養

三寶を供養するといふことは承知致しましたが、信者を供養するといふ事も御經文にありますかと尋ねたいお方がありませう。尤も當講の信者を供養することは御經に基いて定められてあることであります。その御文は矢張り十種供養をお説き遊ばされた法師品にあります。曰く、

吾ガ滅後ノ惡世ニ能ク是ノ經ヲ持シテ世尊ヲ供養スルガ如クスベシ。世尊とは佛様です、佛様を供養する如く能く是の經を持つものを供養せよとあります。此の御文の

前後には此と同義の御文が澤山あります。如來ノ供養ヲ以テ供養スベシとか、人中ノ上供ヲモツテ之ヲ供養セヨとか天上ノ寶珠以テ奉獻スベシとか在々所々にお説きになつてあります。イヤそれは僧侶に對してすることを指したものではなからうかと疑ふ人もあるかもしれませんが、元來此の法師品は

僧俗をとにもくろめてお説きになつてあるお經ですから、決して僧侶に限る譯ではありません。たとへば、

若シ人一ノ悪言ヲ以テ、在家出家ノ法花經ヲ讀誦スル者ヲ毀譽センハ其罪甚重シ。(法師品)

とあるが著しい例であります。法華經は必しも此の法師品に限りません。總て持經者を讚美せられて男女、在出の差別は嫌ふてありません。宗祖大士も此の御意により、如説修行抄に屢々弟子權那々々々々とお呼びになつてあります。たゞ一つ注意すべきは能ク是經ヲ持ツ者でなければならぬといふことであります。謗法ばかりして居る様な方は、信者とはいふものゝそれは能く持つ者でないから、供養しても功德はありませんのみならず、却て罪障になるとお示し遊ばされてあります。

おなじ罪うくるものなり謗法を責めざるものに供養するなよ(御教歌)
之に反して能く持つ御信者に對しては、

此の世にて現に果報をうると聞く信者に供養出来るだけせよ(御教歌)

四、御供養券

お供養といへば前の十種供養の様なものであるのに金券にまぎらしきお供養券は何の供養であるか、といひますと、これは當講に於て御講が一日に澤山ある處から特に出來たお供

養品である中さねばなりません。然し趣旨に於ては前の財供養の義を少しもはづれて居りません。

一は供養に預る人にもさう度重なつては折角の志も頂戴が出來かねます。なんぼ御供養でも多く頂ければ身を害します。次に施主の都合を考へて見ますと、飲食とか品物になりますと金高がはりますので骨が折れる、參詣の少きを願ふ様にもなります。さればといふて金錢の供養は許されないことでもありますので、僅か宛でも喜んで供養させて頂ける様にと、かゝる便宜な方法を案出されたものであります。是は金券にまぎれるものではありませんが金券では決してありません。かゝる特殊なお供養であります。たゞ講内或は支部内に於てのみお蠟やお賽錢などに融通する道を開いてあるだけです。恰も物品には夫々價格を有して質物として融通されると同じであります。融通されるからとて質物を金券と思ふ人はありません。お供養券は當講の事情から案出された一種の供養物で、當講の専用、新發明品であると心得て置いて頂きたい。

五、供養の功德

佛を供養する功德は茲に述ぶる必要の無い程周知のことです。それで僧侶とか信者を供養する功德を少し述べて見ませう。法師品を拜見致しますと、

天上ノ寶珠以テ奉獻スベシ。所以ハ何ン、是ノ人歡喜シ法ヲ説ンニ須臾モ之ヲ聞カバ即チ阿耨多羅

三藐三菩提ヲ究竟スルコトヲ得ルガ故ナリ。

又云く。一劫ノ中ニ於テ合掌シ我前ニアリテ無數ノ偈ヲ以テ讚ン。是ノ讚佛ニ由ルガ故ニ無量ノ功德ヲ得ン。持經者ヲ歎美センハ其福復彼レニ過ギン。

類似の御文はまだありますが、前の御文に就て申せば、天上界の寶を以て供養申上げた其志に對し非常に喜んで法門の一句を説て下さつた時、夫を少しでも承つた人は阿耨多羅三藐三菩提即ち無上道たる佛の悟りを得ることが出来るといふ御心です。後の御文は一劫の間といひますと何億萬年といふ永い時間、其の永い間佛様を讚歎供養すれば無量の福が得られるが、法華經の信者をほめ、たゞえて供養するものは、その佛を一劫の間讚め奉つたよりも遙か勝れたる福を得ることが出来るといふ御經文であります。而も第八の卷普賢菩薩勸發品には、法華經を受持讀誦するものを供養讚歎せば當に今世に於て現の果報を得べしとありますから、未來の成佛ばかりでなく、現世に於て莫大な利福を頂戴すること疑ひないのであります。布施供養は出来るだけさせて頂きたいものです。

妙講一座式考

第一 初隨喜品	三六三	三 五悔との相違	四三三
一 序 説	三六三	第四 一座の結構	四二四
二 理觀三千	三八三	一 妙法中心	四二四
三 理の五悔	三八七	二 取捨得宜	四二九
第二 名字信行觀	三九一	三 妙講一座の權威	四三一
一 事觀妙法	三九二	第五 一座の分段	四三二
二 事の五悔	四〇一	一 總 科	四三二
第三 信智増進	四一七	二 第一段	四三三
一 如來神力品	四二七	三 第二段	四三五
二 不離身抄	四三三	四 第三段	四三六

妙講一座式考

第一 初隨喜品

一、序 説 惡世末法の今日、成佛得脱の大白法たる妙法華經を修行する方法は法華經第六の卷分別功德品に委敷御説きに成つてある。三五高覽の天台智者大師經文の元意を探りて隨喜品・讀誦品・説法品・兼行六度・正 行六度の五品の名を建てられた。其の中の初めの隨喜品と云ふのが、本門立行ノ首(記九)であるから末代本未有善の初心始行の者は、此の品位に住して修行するものである。されば今は暫く初品に就て修行の相貌を明し、妙講一座式の由來を知らしめ、以て當講學徒の用心に資せんとするのである。

二、理觀三千 初隨喜の位に於て成佛の道を求めんとするものは、一念三千の觀法を正修し傍ら五悔を以て之を助けるのである。(止觀七)一念三千に就て、先づ三千とは何ぞやといふに、宇宙萬

有の諸法を總括して三千と數へ、之を觀するとは其三千の諸法の實相は如何なるものかと心を靜め念を臆持して心眼を放ち、之を覺らんと試むるのである。若し三千を極むれば即ち宇宙に迷はず、向上の道を進むことが出来る。然し三千の諸法廣漠にして到底始行の人の究め盡し得る所でない。茲に於て遠く求むるの迂を捨て、近く己心所具の三千を觀じ、心は色質なき故に「空」なり、而も慮想起る故に「假有」なり。然れども空有の兩端を捨つる能はず中なり。諸法も亦然なり。因緣所生なるが故に假有なり。假有なるが故に空ならざるを得ず。空にして假なり。即ち兩端を捨てず又兩端を離るる故に中道なりと。是れ即ち一心三觀の法門である。處で三千の數が一念の中に籠て居ることは、華嚴經に心ハ工畫師ノ如シ種々ノ五陰ヲ畫ク一切世間ノ中ニ法トシテ造ラザル無シ。乃至心・佛・及ビ衆生是ノ三差別無シと説いて依ても知る事が出来る。心とはココロで、佛とは悟りの佛界、衆生とは迷ひの九界のことである。佛界も九界も一念の心と同一であると云ふことは十界が一心に具はつて居ると云ふ事ではないか。既に一心に十界を具することを承認すれば十界の各にも他の九界を具することを許さねばならぬ。之一心は必ず十界の中何れかに依存するものなるが故である。偕十界互具すれば百界となる。而して百界の各に又特殊の性、相、體、力、作、因、緣、果、報及び此の九種の

全體が究竟して平等一如のものとなつた「本末究竟等」と名けるもの——經文に如是性・如是相・如是體・如是力・如是作・如是因・如是緣・如是果・如是報・如是本末究竟等(法華經)とあるから十如是と云ひ又略して十如と云ふもの——を備へて居る。百に十を乗すれば千となる、則ち千如を得た。而して此の千如の一々に五陰世間・衆生世間・國土世間の三種を含んで居る。そこで、三千種の世間が出来た。一體世間とは世界と云ふのと同じ事で時間的に變化し(世の義)空間的に隔別せる(界・間の義)森羅萬象を云ふものである。即ち一念の中に三千種の隔別せる諸法が歴然と具つてある。故に一心を觀すれば一切法を觀することになる道理である。之を十界互具百界千如一念三千と云ふのである。止觀第五に介爾中心アレバ則チ三千ヲ具すと云ふは之を云ふのである。然し茲に一つ注意すべきことは宇宙の萬法必ずしも三千の數に限らない、實に無量無數であると云ふことである。十界互具して百界と云ふ以上、又百界互具して萬界、萬界互具して億界乃至無數界とならねばならぬ。然るを唯だ百界に止め、其上に十如を累ね、三世間を加へて三千としたのは、宇宙の萬象が漠然空間に存し時間を経るものでなくして、其の全體が互具互融して居ることを示さんがために十界・十如・三世間を假に組合せて三千としたものに外ならぬ。換言すれば、三千の數は各他の二千九百九十九の數と交

涉關係して居る。網の一目は總ての他の網の目に依つて作られて居る如く、諸法は獨存するものでなく互に支へられて居るもの、切り離すことの出来ぬものであることを具體的に示したものである。之を彼の華嚴一家が漠然、因陀羅網境界門を説て事々無礙法界縁起論を立てたのに比するに、實に天地の相違を有する所以が明である。こゝが震旦の小釋迦、三五高覽の天台智者の靈山直授の價の存する所である。又唯心的佛敎の敎理説明上に頌を唱ふる所以である。

偕一心を觀するとはいへ、三千の諸法を含有せる一心であるから、極めて閑靜なる處を撰み、外界の刺戟を防がねばならぬ。傳敎大師我朝にして始めて四種三昧院を建立される時、荊棘を分けて比叡山に登られたのである。是れ其の寂寞無人の處なるを以てである。然し其後山上漸く盛んに成つた爲に、慈覺大師は更に横川の地を撰んで靜かに三昧に入つたのである。かく天台宗では靜かな處を要する爲、多く山上に觀室を設けたから、後には町にあつても山寺山と號し、何々山の稱を附したものである。然るに散心口唱、出でては折伏敎化を爲すべき日蓮法華宗に於て、觀念讀誦の攝受門の眞似をなし、寺號の上に山號を附すること甚だ以て奇怪千萬である。門祖日隆聖人は茲に心を留め給ひ、本能(京都)・本興(尼ヶ崎)兩本寺御建立の時は、前代の風習を破つて山號を廢されたのである。之は

餘談であるが序を以て一言したのである。

外界の刺戟を避ける爲に閑靜な處は求めても、偕心の不思議を觀せんとすれば、今度は内界より妄念雜慮紛然として競ひ起る。即ち過去より已來造り重ね來た煩惱が正業の觀念を曇らせる。こゝに於て此の罪障を消滅する方法を講ぜねばならぬ。即ち五悔を要する所以である。

三、理の五悔

五悔とは五種の懺悔と云ふ事で、懺悔、勸請、隨喜、回向、發願である。これに理の字を冠させたのは、後に述べべき當講の五悔に別たんが爲である。偕て懺悔を理懺と事懺とに分つ。事懺とは以下言はんとする所のもので、理懺とは以上述べ來りし一念三千觀の別名である。普賢觀經に端坐シテ實相ヲ念ゼヨ。衆罪ハ霜露ノ如ク慧日能ク消除スと云へる是である。根に喰入つた元品の無明の大罪障は、慧日の光明に依つて除かれ、枝末所犯の個別的な小罪障は、事相行儀の懺悔に依つて滅す。

事懺の初めの懺悔とは、光明文句に云く懺ト者慚ニ名ケ、悔ト者愧ニ名ク、慚ハ即チ天ニ慚ヂ、愧ハ即チ人ニ愧ヅと。即ち過去世に於て犯したる罪業を一は佛天に開謝し、他は一切衆生に披陳する事であつて五悔の總表である。即ち晝夜六時身口意の三業を清淨にして尊像に對し、凡そ無始已來